

# 大菩薩峠

小名路の巻

中里介山



その晩のこと、宇治山田の米友が夢を見ました。

米友が夢を見るといふことは、極めて珍らしいことであります。米友は聖人とは言いにくいけれども、未だ曾て夢らしい夢を見たことのない男です。彼は何かに激して憤ることは憤るけれども、それを夢にまで持ち越す執念のない男でした。また物に感ずることもないとは言わないけれども、それを夢にまで持ち込んであこがれるほどの優しみのある男ではありません。しかるにその米友が、珍らしくも夢を見ました。

「あ、夢だ、夢だ、夢を見ちまった」

米友は身体からだへ火がついたほどに驚いて、蒲団ふとんからはね起きま

した。実際われわれは、夢を見つけているからそんなに驚かないけれども、物心を覚えて、はじめて夢を見た人にとっては、夢というものがどのくらい不思議なものだか想像も及ばないことです。

米友とても、この歳になつて、初めて夢を見たわけでもあるまいが、この時の狼狽あわて方は、まさに初めて夢というものを見た人のようでありました。

そうしてはね起きて、手さぐりで燧ひうちを取つて行燈あんどんをつけ、例の枕屏風まくらびょうぶの中をのぞいて見ると、そこに人がおりません。

「ちえッ、よくよくだなあ、まさかと思つた今夜もまた出し抜かれちまつた」

米友はワツと泣き出しました。米友が夢を見ることも極めて珍らしいが、泣き出すことはなおさら珍らしいことであります。

米友は憤<sup>おこ</sup>るけれども、泣かない男です。けれどもこの時は、手放<sup>おこ</sup>して声を立てて泣きました。

昼のうちに、あれほど打解けて話しておったその人が、まさか今晚は無事に寝ているだろうと思つたのに、もう出かけてしまった。昨夜の疲れと、その安心とで、ぐっすりと寝込んでしまったおれは、なんとという不覚だろう。それに、今まで滅多には見たこともない夢なんぞを、なんだつて、こんな時に夢なんぞが出て来たんだらう。あんな夢を見ている間に出し抜かれてしまつたのだ。

あまりのことに米友も、一時は声を揚げて泣いたけれども、いつまでも泣いている男ではない、雄々しく帯を締め直して、枕許に置いた例の手槍を手に取つてみたが、どうしたものか、急にまた気が折れて、手槍を畳の上へ叩きつけると、自分は、ど、

つかと行燈の下へ坐り込んでしまいました。

「いやだなあ」

米友は苦にがりきつて、行燈の火影ほかげに薄うすぼんやりした室内を見廻した揚句に、ギツクリと眼を留めたそれは、床の間の掛軸です。

「こいつだ、こいつだ、こいつが夢に出て来やがったんだ」

米友がこいつだと言ったのは、勿もつ体たいなくも大聖不動尊だいしょうふどうそんの掛軸

でありました。かなり大きな軸であるが、ずいぶん煤すすけ方がひ

どいものであります。しかしながら、右手に鋭剣をとり、左手に

繩索けんさくを執り、宝盤山の上に安坐して、叱咤しつたあんめい暗鳴を現じて、怖ふ三さん界がい

の相なを作すという威相は、その煤けた古色の間から燦然さんぜんと現わ

れているところを見れば、またかなりの名画と見なければなり

ません。

日頃、ここに掛けられてあつたのを、竜之助はもとより見ず、

米友だけが毎日見ていたけれども、この男は別段に不動尊の信者ではありません。

「いやに怖おっかない面つらをしている奴だな」

米友は、時々、こんなことを考えて画像を見るくらいのものでありましたが、今は室内を見廻した眼がギツクリとそこに留まると米友が戦慄げんしょうこくぎようだいじょうとくふじょうみようおうしました。米友をグツと睨みつけている現青黒影大定徳不動明王まぎの姿はまさしくたつた今、夢に現われたその者の姿に紛まぎれもないことです。米友は不動尊の画像を睨めて、我と慄ふるえ上りました。

米友が不動尊の像を睨んでいる時に、裏の雨戸をホトホト叩く音がしました。

「モシ」

微かながらも人の声がしました。

「はてな」

米友が思案に暮れたのは、もしや竜之助が帰ったのではあるまいかと思つたそれが、まさしく女の声であつたからであります。

「もし」

そこで立ち上つて、雨戸の傍へ行つて、

「誰だエ」

「もし、少々、ここをおあけ下さいまし」

「お門違かどちがいじやございませんか」

米友も小声で言いました。しかし門違いにも門違いでないにしても、弥勒寺みろくじの門を入つて人を尋ねるとすれば、ここはその一軒だけです。この深夜に、わざわざここまでとまどいをして入り込む人のあらうとも思われません。

「いいえ」

外の女はこう言いました。それでよけいに、米友の疑問を増したものと言わなければなりません。盲目めくらの劍客と二人して隠れているこの弥勒寺長屋、長屋とは言うけれども近所隣りが無い、まして女の近寄るべきはずのところではありません。しかしながら、おとなう声はまさしく女でありますから、

「誰だい、何の用があつて、誰を訪ねて来たんだ」

「はい、友造さんという方がおいでになりますか」

「友造は……」

おいらだが、と言おうとしたが米友は思案しました。おれを訪ねてこの夜更けあひに来る女やまというのは、全く心当りが無いことではない。かの間の山のお君も、老女のお松も、ここに近いところにいるはずだ。昨日、不意にムク犬がここへ姿を見せた

ことを思うと、或いはそれらの女性のうちの一人が忍んで来たものと思えば思われぬことはない。それで、米友はさいぜんから、戸の棧さんへ手をかけながらも、外なる女の声を、じつと耳に留めていたのだが、それは、お君の声でもなければ、お松の声でもありません。さりとして鐘撞堂新道にいるお蝶の声とも思われぬし、無論、両国にいる女軽業の親方のお角の声とは聞き取れないから、米友は迷っているのです。

「あの、お君のところから聞いて参りました、そうしてムクにそこまで案内してもらいました」

「エ、お君のところまで聞いたつて！」

お君と云い、ムク犬と言うことは、米友の信用を高めるのに充分でありましたけれど、しかもお君と呼棄てにするこの女の正体は、更にわからないものであります。しかし、ここまで来

た以上は、あけてやらないのも卑怯ひきようであると米友は思いました。どうかするとその筋の目付めつけが女を使用して、人の罪跡を探らせることがある。もしそうだとすれば、自分は本来、さまで暗いところはないのだが、一緒にいる先生は、決して明るい世界の人とは言えない。だから、戸を開く途端に「御用」という声が剣呑けんおんではある。あけてよいものか、悪いものか、それでもまだ米友は、暫し途方に暮れていると、

「あなたがその友造さんじゃありませんか、本当の名は米友さんとおっしゃるのでしよう、内密ないしよのお話があるのですからあけて下さい」

外では存外、落着いた声でこう言いました。よし、ここまで来れば仕方がない、まかり間違ったら二三人は叩き倒して逃げてやろうと米友は、足場と逃げ路を見つくりつておいて、例の

手槍を拾い上げ、片手でガラリと雨戸を押し開きました。

「誰だい」

「わたくしでございます」

「お前さん一人か」

「エエ、一人でございます、御免下さいまし」

その女は、男のような風をして、お高祖頭巾こそずきんをすっぽりと被かぶつておりました。

いったい、なんにしても人の家へ上るのに、頭巾を取らないで上るといはずはありません。

女は、このまま失礼と断わつたものの、座敷へ通つても、やはり頭巾を取ろうとはしないで、

「お前さんが、米友さん？」

こう言つて、かなり鷹揚おうような態度でありました。

「そうだよ」

米友は、極めて無愛想に返事をしました。

「お前さんの噂は、お君から聞いておりました」

お君、お君、と自分の家来でも呼び棄てるように言うのが心外でした。それよりもお君の友達だから、やはり自分も家来筋か何かのように話しかけるのが、米友には心外でした。

「ふん、それがどうしたんだ」

「お前さんは怒りつぽい人だということを聞きました、それでも大へん正直な人だということを聞きました」

「大きなお世話だ」

米友はムツとして口を尖とがらしたけれど、女はそれを取合わずに、

「ですから、わたしは、お前さんに尋ねたらわかるだろうと思っ

て来ました、お前さんが知らないはずはないと思つて、わざわざこうして尋ねて来ました、ぜひ、わたしに教えて下さい、わたしに隠してはいけません、お前さんがここに居ることを突き留めるまでずいぶん骨を折りました、本当のことを言つて下さいな」

こう言つて、ジリジリと米友に迫るもののものであります。米友は呆あきれて、じつとその女の面かおを見ようとしました。けれども、いま言う通り面は頭巾で隠してあるのに、わざとその顔をおもて行燈の火影から反そむけようとするのが、どうも面を見知られたくないという人のようであります。そうして突然とは言いながら、こうして夜更けに一人でここへ押しかけて来たことは、よほどの突き詰めたものがなければならぬような権幕も見られます。落着いてはいるけれども呼吸がせわしくて、その用向は、たし

かに物好きや冗談ではなく、真劍の有様が眼に見えるのであります。それですから米友も一概に、それを憤り散らすわけにはゆかないで、

「いつたい、お前は何しに来たんだ、おいらに何を尋ねようと思つて来たんだ」

「さあ、お前さんに尋ねたいのは、あの目の見えない人のこと。あの人を、お前さんはどこへ連れて行きました、それを教えて下さい、お前さんは、きつとそれを知っているに違いない」

「ナニ、目の見えない人？」

米友は眼を円くしました。

「そう、吉原からお医者さんの駕籠かごに乗せて、お前さんがその駕籠に附添つてどこへか行つてしまつたということ、わたしはちやんとつきとめました」

「ふーん」

米友は、そう言つて、女の面を見ようとしたが、女はやつぱり面を見せません。

「さあ、言つて下さい、お前さんが、もしお金が欲しいなら、わたしの実家うちへ行つて、いくらでもお金を上げるから、あの人の居所を教えて下さい」

女は、始終ジリジリと米友に詰め寄るかのような勢いでありました。

「うむ——おいらの知つていゝことかで、教えて上げてもいいことなら、錢ぜにを貰わなくつたつて教えて上げらあな。もし、教えて悪いことだつたら、錢を山ほど積んだつて教えちゃやれねえな。知らなくつても手伝いをして探してやりてえこともあるし、知つていても知らねえと言つて隠さなけりやならねえことかもあるし、

るだろう……だから、お前はいつたい誰だ、どういふ因縁いんねんで、おいらにそんなことを尋ねるのだから、一通りそれを話してくんな。それもそうだが、さつきから、おいらの癩しやくにさわるのは、お前さんが頭巾を被りながら挨拶をしていることだ、家の中で人と話をするには、頭巾だけは取つたらよかりそうなものだ」

こう言つて米友は、手近あんどんな行燈を引き寄せて、意地悪くその女の面へパツと差しつけて、あつと自分が驚きました。

今夜は怖こわい晩である。夢に現われた不動尊は、いまだに米友にはその心が読めない。今ここに現われた現実の人は、言葉こそ優しい女人にょにんであれ、その面貌かおかたちは言わん方なき奇怪なものである。行燈を引き寄せた米友は再びワナワナと慄ふるえました。寧ろむし米友自身の形相ぎようそうが凄じいものになりました。

「おいらはいやだ、お前という人は、やつぱり夢じゃねえのか、

女のくせに、たつた一人でこの夜中に、どういふ由よしがあつて、あの人を尋ねて来たんだ、昼間は訪ねて来られねえのか、そうして話をするに、どうしてその頭巾が取れねえのだ」

こう言つて怒鳴りました。

「米友さん」

女は存外、優しい声でありますけれども、米友の耳には、頭巾はすの外れから、チラと見た夜叉やしやのような面おもてが眼について、その優しい声が優しく響きません。

「米友さん……お前はお君のことを知っているだろう、わたしの身の上がり知りたければ後で、あの子によく聞いてごらん、わたしがこうして頭巾を被っているわけも、あの子がよく知っていますから聞いてごらん、お君は美しい子だけでも、わたしは美しい人ではありませんから……」

「そんなことは、おいらの知ったことじゃねえ、美しかろうと美しくあるめえと、頭巾を被つて人に挨拶するのは礼儀じゃねえ」

「ああ、わたしはここへ礼儀を習いに来たのじゃありません、米友さん、わたしは、お前さんに礼儀作法を教えていただくためにここへ来たのじゃありません、ぜひ聞かしてもらわねばならぬことはほかにあります、お前でなければ知った人がないから、それで、わざわざ忍んでこの夜更けに訪ねて来ました、きつとお礼はしますから、御恩に着ますから、後生ごしやうですから教えて下さい。お前の知っているお君は美しい子だから、誰にでも可愛がられます、わたしは、そうはゆきません、わたしを可愛がってくれたのは、あの幸内と、それから目の見えない人が、わたしは好きなのです、目の見える人は、わたしは嫌いです、目の見えない人がわたしは好きで好きでたまりません、米友さん、後

生だからその人のところを教えて下さい」

女は物狂わしいようになって、泣き出してしまいました。本も  
うらも知ることのできない米友は呆氣あつけに取られて、得意の啖呵たんか  
を切つて突き放すこともできません。そのみならず、この突  
然な、無躰ぶしつけな来客の、人に迫るような言いぶりのうちに、なん  
だか、哀れな、いじらしいものがあるような心持に打たれて、米  
友は憤おこつていいのだから、同情していいのだから、自分ながらわか  
らない心持で、眼を円くしているほかはないのであります。

「おいらには、わからねえ」

米友は無意味にこう言つて、首を左右に振りながら眼をつぶ  
りました。

「わからないことはありません、お前は、きつと知つてゐるはず  
なのに、これほどに言つても、お前はわたしに教えてくれない、

どうしても教えてくれなければ、わたしも了見があるから……  
わたしは世間から嫌われています、世間の人からいい笑い物に  
されています、それは、わたしが生れつきから、そんなであつ  
たんじゃありません、おっか継母さんが悪いんです、継母さんが、わ  
たしをにくんでこんなにしてしまったのです、その前のわたし  
は、きれい綺麗な子でした、誰も、わたしをほ賞めない人はありません  
でした、それなのに、継母さんのためにこんなにされてしまひ  
ました、わたしを見る人は、みんなわたしを嫌います、いい笑  
い物にします、それは無理はありません、ですから、わたしは  
人に見られるのは嫌いです、ですから、わたしがほんとうに好  
きな人は眼の見えない人だけなのです。ね、米友さん、わたし  
の心持がわかったでしょう、わかつたら、教えて下さいな、後  
生だから、あの人のいるところを教えて下さいな、頼みます」

女は平伏<sup>ひれふ</sup>して、米友の前へ手を合わせぬばかりです。しかしながらこれは、いよいよ米友を煙<sup>けむ</sup>に巻くようなものとなりました。

「おいらには、何が何だかよくわからねえが、お前の尋ねるその盲目<sup>めくら</sup>の先生はな……本当のことを言えばこの家にいるんだ」

「エ、この家にな？」

「そうさ、この家においらと二人で隠れているんだが、今はいねえ」

「どこへ行きました」

「どこへ行つたか、おいらにもわからねえんだが、夜になると、おいらに黙って、そつと出し抜いて出かけてしまうのだ」

「まあ、どこへ行くのでしよう、そうして、いつごろ出かけて、いつごろ帰ります」

「いつごろ帰るんだろうなあ、朝になって見ると、ちゃんと帰ってるからなあ」

「あ、それではわかった、きつと吉原へ行くのでしよう」

「吉原へ？」

「お前に知れないように、吉原へ行つて、またお前に知れないように、ここへ戻つているんでしよう」

「そうじゃねえ」

「それでは、どこへ何しに行きます」

「うむ、そいつは、ちつと言いくいなあ」

米友は頭を抱えて、畳の上を見つめますと、女はいつそう強く、

「言つてごらん、何を言つても、わたしは怒らないから」

「うむ、お前はいつたい、あの盲目めくらの先生を、いい人と思つて

いるのか、それとも悪人だと思つていいのか」

「わたしは何だかわからない、善い人だか、悪い人だかわからないけれど、わたしは離れられない」

「あいつは、悪人だぜ」

米友は抱えていた頭を擡もたげて、こう言いましたけれども、女はさのみ驚きません。

「どうして、あの人が悪いの」

「ありや、女が好きだよ」

「エ？」

「そうして、腕が利きいてるよ」

「それは知っていますよ」

「女が好きで、好きな女をみんな殺しちまうんだ——腕が利きいてるから堪たまらねえ」

「米友さん、お前はそのことを本気で言っているの、それを知つて、そうだと知っているの、エ、それを、わたしが知らないと思つてるの」

「うむ——」

米友は何か知らず、力を入れて唸うなりました。女は、米友の近くへ摺すりよ寄つて、

「さあ、言つて下さい、わたしは少しも驚きません、あの人、女を殺したということ、お前が知っているなら言つて下さい、わたしも知つてゐることを言つてみせます」

「うーむ」

米友が再び唸つて、額しわに皺しわを寄せて、深い沈黙に落ちようとする時に、女は躍起やつぎとなつて、真向まともに燈火あかりへ面おもてを向けて、さも心地よさそうに、

「だから、わたしは、あの人が好きなのです、あの方は、平気で人を殺すから、それで、わたしは、あの人が好きです、あの方は、若い女の血を飲みたがっているのでしょう、わたしが傍にいれば、人は殺さないので、女は殺さないはずです、わたしが傍にいないから、それでほかの女を殺してしまいます、わたしと離れているから、それで咽喉のどが乾いて我慢がきれないで、女を殺すんです、無理ありません、そうでしょう、毎晩、出かけるのは、吉原へ行くんじゃないやありません、ここから吉原へ行くんじゃないやありません、ここから吉原まで、あの人に往来ゆききができるわけがありません、そんなことをしたがる人じゃありません、あれは辻斬に出るのです、人を斬りに出るのです、それは今に始まったことじゃありません、甲府にいる時もそうでした、あの方は平気で何人でも殺してしまいます。ええ、わたしだけ

はよく知っています、どこで、どんな人を幾人斬つたといふことまで、ちゃんと帳面に記してあるんですから。それで今晚も出かけたのでしよう、どっちへ行きました、どの方角へ行きました、米友さん、これから、わたしをその方角へ連れて行つて下さい」

二

ちようど、その晩のことでありました。柳橋の、とある船宿の二階で、手紙を読んでいるのは駒井甚三郎であります。

「殿様、あの、お客様が参りました」

取次いだのは、宿のおかみさんらしくあります。

「あ、待ち兼ねていた、ここへ通してもらいたい」

駒井は読んでいた手紙を巻きながら、待っていると、

「御免下さりませ」

おかみさんに案内されてそこへ面を現おもてわしたのは、年の頃五十恰好で、しかるべき大工の棟梁とうりょうと云ったような人柄の男でありましたが、甚三郎を見ると急に改まって、

「これはこれは駒井の殿様でござりましたか、これはお珍らしいところで、思いがけなくお目にかかります」

恭うやうやしくそこへ両手を突いたが、驚きのうちにも、相当の親しみがあるらしい。

「寅吉、ほんとに暫くであつたな」

「いや、もう、ずいぶん思いがけないことでございました、お手紙が届いてから、どなた様かとしきりに思案を致しては参りましたが、駒井の殿様とは、夢にも存じませんことでございま

した」

「まあ、ともかく、こちらへ入るがよい」

「それでは、御免を蒙りまして」

寅吉と呼ばれた棟梁らしい男は、駒井の傍近く膝に行り寄って、頭を下げました。

「相変らずたっしや壮健で結構だな」

「はい、おかげさまで風邪一つ引きも致しませんが、いったい殿様は、その後、どちらにおいであそばしました。江川様にお目にかかった時お聞き申してみましたが、江川様も御存じがないそうでございました、多分、西洋の方へおいでになったんじゃないかと、おっしゃってでございましたが、ここで殿様にお目にかかろうとは、ほんとに夢のようでございます」

「まあ、それを話すと長いことになるがな、拙者は今、房州に

行っている」

「へえ、房州においででございますか、房州はどちらでいらつしやいます」

「房州は洲崎<sup>すのさき</sup>じゃ、もと砲台のあつた遠見の番所に隠れていたのが、仔細<sup>しさい</sup>あつてこのごろ江戸へやつて来た、噂<sup>うわさ</sup>を聞くと、近頃そちは芝の江川のところに来ていそうだから、ぜひとも会つてみたい心持になつて、あの手紙を遣<sup>つか</sup>わしたのじゃ、早速、出向いて来てくれて忝<sup>かたじけ</sup>ない」

「どう致しまして、そうおつしやつて下されば、伊豆が長崎におりましようとも、いつでも出向いて参ります。私はまた小野様か、肥田様か、そうでなければ春山様……といろいろにお案じ申し上げて参りました」

「就いては寅吉、呼び立てたのは、ただ久しぶりでそちに会つて

みたくなつたのみならず、相談したいこともあつてのことじゃ。それより以前に一つ、そちに対して申しわけのないことがある、と言うのは、あの清吉じゃ、あれは房州まで拙者と一緒に行つてくれたが、ここへ来る前の時に、行方知れずになつてしまつたわい」

「エエ、清の野郎が行方知れずになりましたか、あいつは人間が少し愚図おろおろですからな」

「人間は朴直ぼくちよくであつて、腕は、お前の秘蔵弟子みどころだけに見所のあつた男であつたが、不意に行方知れずになつた、手を尽して搜索したが、どうもわからぬ、あの辺の海は危険な海であるから、こことによると、波に捲き込まれたのかも知れぬ、いずれ歸つた上で、また篤とくと搜索をせにやらぬが、それについて、そちに頼みたいのは、そちの弟子のうちで、もう一人、あれに似たような

ものを世話してくれまいか。いや一人より二人がよろしい、そちの見立てでしかるべきものを二人ほど連れて房州へ帰りたいものじゃ」

「よろしうございます、たしかにおひきうけ申しました」

寅吉は、甚三郎の頼みを快く承知する。

「では、きまり次第に、その者をこの家まで向けてもらいたい、この家の主人は、もと拙者の家来筋の者じゃ、不在でもわかるようにしておく」

「<sup>かしこ</sup>畏まりました、二三日中には必ず連れて参ります。それはそうと、殿様には房州で何か、おはじめなさるんでございますか」

「あの海岸でひとつ、スクーネルをこしらえてみたいのじゃ」  
「なるほど、それは結構でございます、殿様の御設計ならば、私

共がなにも申し上げることとはございませんが、材料と手間がいかがでございます、いつそ、石川島でおやりになつたらいかかでございますな」

「万事はあちらで相当に間に合わすつもりじゃ、土地の若い者を集めて、相当に教え込んで使えるだろうから。で、二三の友人に相談もして、その助力も受けることになつてゐるから、秘密というわけにも参るまいが、なるべく表立たぬように、自分共の手一つで仕上げて、そして自分たちの自由に乗る廻せるようにしてみたいと思つてゐる、それには石川島では都合が悪い、戸田へ行こうかとも思つたが、少々遠くもあり、差支えもあつて、ついに房州洲崎の地を選んだわけじゃ」

「それはそれは。そういうわけでございますたら、とりあえず間に合いそうな人を差上げておきまして、おつけ私共すきも隙を

見てお邪魔に上り、殿様のお差図で働かせていただく、私共も、どのくらい修業になるか知れませんが」

「お前が来て見てくれれば何よりだ、遊びに来てもらいたい」

「必ずお邪魔に上ります。それから、なんでございますか、そのお船は、どのくらいの大きさになさる御設計でございます」

「拙者は、今、一二つの設計を持っているのじゃ、安政二年に、お前たちがこしらえたシコナと同じものにしようか、それとも、千代田型に法のつとつて、それに自分の意匠を加えてみようかとも思っている、どのみち、法式は西洋型のものじゃ」

「なるほど。そうしますと無論、軍艦でございますな」

「いいや、軍艦ではない、用心のために大砲を一門だけはのせてみたいが、軍艦にしたいくないのじゃ。人も、さほど多く乗せる必要はないが、さりとて大海たいかいを乗り切つて外国に行くに堪え

るだけの、人と荷物とを容れ得るものでなければならぬ。長さは十七間余、幅は二間半、馬力は六十、小さくとも、その辺でなければなるまいと想っている」

「なるほど」

「まあ、これの一つ見てくれ」

甚三郎は座右の書類の中から、一枚の折り畳んだ絵図面を取り出しました。

「ははあ、お見事なものでございますな」

その絵図面は、駒井甚三郎が自ら引いた西洋型の船の絵図面であります。いま言った通り、スクーネル型の二本柱の船と、それから千代田型の細長い船とが、上下に二つ描かれてあるのであります。

船大工の寅吉、これはずしゅう豆州戸田の人で、姓を上田と言ひ、その

頃、日本でただ一人と言つてもよろしい、西洋型船大工の名棟梁めいとらうりようでありました。

寅吉は机の上に展ひらげた船の絵図面を熱心にながめているし、甚三郎もまた、額ひたいを突き合わせるようにしてその絵図面をながめて、あれよこれよと、説明し質問し、質問がまた説明に代つたりしているうちに——もうかなりの夜更けであります。遽にわかに人の叫ぶ声があつて、たしか第六天の前、それとも柳橋の袂たもとあたりの空気が、ヒヤリと振動したのが、ここまで打つて響きます。

それで寅吉は、我知らず後ろを振向きしました。甚三郎は、なお絵図面の上を見ているが、それでも、耳をすまして何事かを聞かんとしているものようです。

ワツと崩れた人の声がこの時、また、ひっそりと静まり返つ

てしまいました。あまりに静まり返つたために、何となく、あたりいっぱいせいぎに漂う一道の凄気が、ここの一間の行燈あんどんの火影ほかげにまで迫つて来るようでありました。ほどなく、

「ヤア！」

という気合の声と共に、チャリンと合わせたのは、たしかに霜さに冴ゆる刀の響きでした。駒井甚三郎は、絵図を手に取つて首こうべを起して、その物音の方をながめます。ながめたところでは壁です。甚三郎はその壁の一方を見つめてみると、寅吉は、やはり同じ方面を見つめて、押黙つてしまいました。

「ヤア！」

二度目に気合の声があつたのは、それからやや暫く後のことでした。

「斬合い！」

寅吉が身の毛をよだてると、甚三郎は幾分か興味あるものの如く、その物音に耳を澄ましていました。が、やがて、

「面白い、ドチラも辻斬じゃ、辻斬同士が柳橋を中にして斬り合っているのじゃ、命知らずと命知らずが、ぶつかって、あそこで火花を散らしている」

と言いながら微笑しました。

この時代においては、辻斬ということは、そんなに驚くべきほどのことではありません。深夜に一旦外へ踏み出せば、自分が斬られるか、或いは斬られて倒れているものを発見することは、さして難いことではありません。

けれども、船宿の二階に離れていて、霜に冴ゆる白刃の音を、遠音とおねに聞いているというような風流は、ちよつとないことです。本来、船宿の二階というものは、真剣勝負の白刃の響きを聞い

ているべきところではありません。江戸時代の船宿の二階というものは、もう少し違った風流の壇場だんじょうでありました。

潮来出島いたこでじまの十二の橋を

行きつ戻りつ思案橋

昔の船宿の船頭には、潮来節を上手にうたうものがありました。辰巳たつみに遊ぶ通客は、潮来節の上手な船頭をえらんでひいぎ、引付けの船宿を持たなければ通つうを誇ることができませんでした。

偶然とは言いながら、駒井甚三郎は、ここで軍艦製造の相談をしなければならぬのは、駒井その人が無風流なる故ではありません。文化文政の岡場所が衰えても、この時代の柳橋は、それほど江戸っ児の風流を無茶にするものではありませんでした。川開きの晩に根岸鶯春亭おうしゅんていあたりへ逃げて行くほどの風流は、持っていたはずであります。不幸にして、今宵は元の駒井能登

守が、見慣れない絵図面を拡げて、スクーネルの、君沢型の、千代田型のと言っている時に聞えたのが生憎あいにく、常磐津ときわづでもなく、清元きよもとでもなく、況んや二上りにあが新内しんないといったようなものでもなく、霜しもに冴さゆる白刃の響きであつたことが、風流の間違いでした。

「ははあ、殺やられたな、相手は一人じゃないわい、どのみち、辻斬をして歩くほどの乱暴者だから、おたがいに倒れるまで未練な助けを呼ぶようなことがない、ましてやこの際、仲裁に出るものがあるうとも思われぬ、夜番や巡邏じゆんらが通りかかっても、見て見ぬふりして通り過ぎるだろう。こりや幾人いるか知れんが、この斬合きりあひいは長そうじゃ、出て見たらかなりの見物みものであるうわい」

駒井甚三郎は、何か自分ももどかしそうに、寧ろむしその斬合きりあひの音に興味を持って耳を傾けているが、寅吉は、さすがに面かおを

真蒼まつさおにして拳を固めています……かくて暫くする時、この船舶の表の戸に突き当る音、続いてバツタリと人の倒れるような音がしました。

三

ちようど、この晩のこの時刻に、長者町の道庵先生ぢやちようが茅町の方面から、フラフラとして第六天の方へ向いて歩いて来ました。

いつたい、この先生は、こんなところへ出て来なくつてもいい先生であります。なるべくは、真劍の場所へは出したくないのですが、こういう先生に限つて、出るなど言えば出てみたがり、出てもらいたい時には沈没したりして、世話を焼かせる先生であります。

いかに先生だとはいえ、身に金鉄よそおの装いがあるわけではなく、腕に武術の覚えがあるわけではなく、時は、この物騒な江戸の町わがものがおの深夜を我物顔に、たった一人で歩くということの、非常な冒険であることを知らないわけはありますまい。知つてそうしてその危険を冒すおかのは、つまり酒がさせる業わざであつて、先生自身むしようの罪ではありますまい。ただしかし、一杯機嫌で、この真夜中にフラフラと歩き出して前後の危険をも忘れてしまい、ただ無性にいい心持になつてゐるほどに、先生の飲みツぷりは初心うぶなものではないはずだから、何か特別に嬉しいことがあつての上でなければなりません。

先生が唯一の好敵手であつた鰯ぼらはちだいじん八大尽は、あの勢いで洋行してしまつたし、それがために、隣の鰯八御殿は急にひっそりして、道庵の貧乏屋敷に一陽来復の春が来たのはおめでたいが、

単にそれだけの嬉しまぎれに、ほうつき、歩くものとも思われません。

さりとて、また今時分になつて柳橋あたりへ、飲み直しに行こうとするものとも思われぬ。第六天の神主の鑄木甲斐といふ人が、かなり飲ける方で、道庵とも話が合うのだから、これから興に乗じて、その人を喉そののそうという企らみのように解釈するもの、余りに穿うがち過ぎているようです。

これは先生のために、極めて真面目に解釈して、先生が深夜、急病人からの迎えを受けて、切棒の駕籠かごにも乗らず、お供の国公をも召連れず、薬箱も取り敢あえずに駈かけつけて、下地したじのあるところへ病家先の好意で注足つぎたしをし、その勢いに乗じて、長者町へ帰るべきものを、どう間違つたか柳橋方面へうろつき出したと見るのが親切で、そうして至当な観方でありましょう。

いつぞやも言う通り、平常はぐでんぐでんの骨無しみたような先生だが、ひとたび職務のことになると、打つて変つた忠実精勵無類の先生のことだから、天下が乱れようとも、行手に危険わだかまが蟠わだかまろうとも、深夜であろうとも、辻斬つぎが流行はやろうとも、ひとたび病家の迎えを受けた以上は、事を左右に托してそれを謝絶ことわするような先生ではありません——武士が戦場へ臨む心で、こうしてほうつき、歩くのであります。

好い心持で、独言ひとりごとを言いながら、第六天の前まで先生が来た時に、

「えーッ、危ないよ」

路次のところから、警告を与える声がありました。

「誰だい、危ねえと言つたのは誰だい、拙者は長者町の道庵だよ、十八文だよ」

「先生、危ねえ、いま柳橋で斬合いが始まつてるんだ、そつちへおいでなすつちやいけません」

「ナナ、ナンダ」

道庵は酔眼をみはつて、路次口の暗いところを見込むと、縁台の下に隠れて、そこから先生に警告を与えたのは、やはり、先生の名前を知っている地廻りの若い者と思われま

す。それを聞くとどうしたものか、先生の気が忽ち大きくなりまたちました。

「ナ、ナニ、斬合いだ、斬合いがどうしたんだ、ばかにしてやがら、斬合いなんぞにおどつかする道庵とは道庵が違うんだ」

「先生、いけませんよ、そんなことを言つたつて駄目ですよ、さ、むれえが三人で斬り合つてるんだ、早く、こつちへ来て、路次へ隠れておいでなさい。駄目だよ、駄目だよ、そつちへおいで

なすつちや駄目だというのに」

「はばか憚りながら、どこへ出たつて押しも押されもしねえ道庵だ、腕

くらべなら持つて来てみな、そう申しちやなんだが、人を殺す  
ことにかけては、当時、道庵の右に出でる者は無え……道庵が  
長者町へ巢を食つて以来、このかた道庵の匙さじにかかつて命を落した者が  
二千人からある」

「困つちまうな先生、そんなことを言っている場合じゃありま  
せんぜ」

せつかくの親切を無にして道庵先生は、フラリフラリと第六  
天の前へさしかかりました。

そうすると第六天の鳥居の蔭に、ひとかたまり一団になつて息を殺してい  
る人影が、通りかかる道庵を認めて声を立てないで、手を上げ  
てしきりに招くのが道庵の眼に留つたから、道庵もひよいとそ

ちらを向きました。その時に一団の中から、いきなり飛び出して来た一人の男が、いきなり道庵の手首を取つて、だまつて鳥居の方へ引きずつて行こうとします。道庵はその手を振り切ろうとしたが、なにぶん腰が据わらないので、思うようにならなるところを、男はまた一生懸命で、道庵を引張り込もうとします。そうなると道庵は面白半分に、駄々を捏こねる気になつて、足をバタバタさせながら、行かじとします。けれども、道庵を引張りに来た男は、たしかに一生懸命で、これもやはり地廻りの一人でありましょう、道庵をそれと知つたもんだから、自分も怖い中から飛び出して来て、何も知らない道庵のために、手の危険を防いでやろうとする親切であります。

それも口を利くとあぶないから、黙つて遮しやにむに二無二、道庵を引張り込もうとするが、道庵はいま言う通り、ワザと足をバタバ

夕させて、駄々を捏ねるのだから始末におえませぬ。親切に引張り込もうとした男は、いよいよ焦あせつて力の限り引張ると、道庵はまた、いよいよ面白がつて、

「なにがしは平家の侍、悪七兵衛景清あくしちびょうえかげきよと、名のりかけ、名のりかけ、手取りにせんと追うて行く……三保谷みほのやが着たりける、兜の鍔を取りはずし、取りはずし、二三度逃げのびたれども、思う敵なれば遁のがさじと、飛びかかり兜をおとり、えいやと引くほどに……」

面白がつて道庵は「景清」の謡うたいをおっぱじめました。

「先生、謡どころじゃありません、やっていますぜ、やっていますぜ、斬合いが始まつてるんだから、早くこつちへ逃げておいでなさいまし」

ようやく小さな声で、これだけのことを言つて、最後の力で

引張り込もうとしたが、この場合において三保谷の方が、役者が一枚上であつたから始末にゆきません。腕から<sup>すべ</sup>こつて羽織の裾に取りつき、<sup>しころび</sup>鍔引きが草摺<sup>くさずりび</sup>引きになつたけれども、このたびの朝比奈もまた、あまりに意気地のない朝比奈で、五郎時致<sup>ときむね</sup>は、またあんまりふざけ過ぎた五郎時致でありました。

「先生、怪我があつても知りませんぜ、しつかりしなくつちやいけません」

せつかく、飛び出した男が持て余している時に、柳橋の角か

ら、星明りの闇夜<sup>やみよ</sup>に現われた人影が一つ、<sup>そうそうろうろう</sup>蹠々<sup>こなた</sup>踉々として此方

に向いて歩いて来ます。その手にしている秋の尾花のような白刃が、星明りの闇にもきらめいて、足許のあぶないのは、たしかに重い手傷を負うているものと見られます。それと見た男は道庵を突き飛ばして、あわてて第六天の社内へ逃げ込みました。

突き飛ばされた道庵は、あやうくそれを残して踏み直り、これも千鳥足。向うから歩いて来る千鳥足と、こちらから歩いて行く千鳥足とは、同じ足許があぶないながら、たしかに性質が違います。その辺にいつこう御夢中な道庵先生の危ないこと。

暗いところで、よくわからないが、右の手に刀をぶらさげたままで、左の手を以て、右の肩の上をしつかりと押えて、真蒼まつさおな面かおをしてフラリフラリと歩いて来るのは、年の頃はまだ若い、袴を着けたさむらいであります。

であいがしら出合頭に、それとぶつつかつた道庵は、

「やア、危ねえ！」

この時ひとたまりもなく、後ろへひっくり返ってしまいました。けれども、それは、一刀の下にきりふせられたものではありません。鉢合せをして打倒ぶつたおれたままでのことで、道庵が痛い腰を

擦さすつて起き直ろうとした時に、先方のさむらいも同じく後ろに打倒れていることを認めました。しかも、酔っぱらっている道庵は、ともかくも起き直る余裕があるのに、向うへ打倒れたさむらいは、起き上る気力がありません。

「気をつけてもらいたいね」

道庵はこう言つて起き上り、倒れた先方の人のところへ行つて見ると、その人は虫の息です。道庵は、よくそんなところへ出でつくわ会せる男で、いつぞやも伊勢参りをした時に、やはり、こんなような鉢合せから始まつて、宇治山田の米友という珍物を掘り出したのは、この先生の手柄であります。

「そーら見ろ、悪いいたずらをするとな罰が当るぞよ、世界の立て直しだぞよ」

と言いながら、虫の息で倒れている人の傍へ寄つて見て、

「やア、やられたな、右の肩先をバラリズンとやられたな、手傷を押えて、フラリフラリとここまで、やって来たところを、拙者と鉢合せをしたために手傷が裂けて、こうなったのはまことにお気の毒だ、まあ待ち給え、拙者がお手のもので、ひとつ手当をして進ぜるから」

道庵は手負ておいを抱き起して、一方には自分の羽織を脱いで、その肩先の創口きずぐちをしつかりと捲き、血留めをしておいて、さて応急の手当を試みようとしたけれど、遺憾ながら、それはもう手後れでありました。打倒れた途端に、斬られた右の肩先から、ほとんど全身の血を土に飲ませてしまい、道庵先生の羽織一枚は、グチャグチャになつてしまい、みるみる、そのさむらいの面かおは蛾のように変じて、道庵に抱えられながら、虫の息が、ついに断末魔の息となり、やがて眠るが如く絆切こときれてしまいました。

ここで道庵が人を呼ぶか、どうかすればよかつたのだが、この時分は、酔眼いよいよ朦朧もうろうとして、意地にも我慢にも眠くなつて堪らないようでした。斬られたさむらいの屍骸を抱え込んで、どう始末しようという当てがあるでもなく、朦朧たる酔眼を、幾度も幾度もみはつて、

「扁鵲へんじやくの言いけらく、よく死すべきものを活かすにあらず、よく活くべきものを活かさむるなり」

こんなことを言いながらも、多少は正気があると見えて、有らん限りの力を入れて、その死骸をせめて往来の片端へでも運んでやろうと、努力を試みているものようです。しかしながら、それは蟻が一生懸命で生殺なまごろしの虻あぶに取りついていてるように、ズルズルと引張つては、またはなしてしまい、また引張つては離れ、離れては引張り、引張つているうちに自分の腰が砕け、砕

けた腰がまた箝はまると、揉手もみでをして取りつき、右が入つて抱き込んだかと思うと、勝手が悪いと見えて捲き直してみたり、諸差もろざさしになつたから、もうこつちのものと思つてゐる途端に、また自分の腰がグタグタと碎けて、力負けをしてしまつたり、本人は一生懸命のつもりだろうが外目よそめで見れば、屍骸おもちやを玩具にして四十八手のうらおもてを稽古しているようで、見られたものではないありません。

けれども、この独り角力ひとずもうも、もうへトへトに疲れきつて道庵は、屍骸わきの腋の下へ頭を突込んだかと思うと、やがてグウグウいびきを立って寝込んでしまいました。

一方、駒井甚三郎は、船宿の表の戸に突き当つた物音を聞く  
と、沈着な人に似合わず、立ち上つて、それを諫止かんししようとする  
寅吉に提灯をつけさせ、二階の梯子を下りて、表口の戸をあ  
けて外へ出ました。戸をあけて一步外へ出ると、紛ぶんとして血の  
香いが鼻を撲つちます。

甚三郎が提灯を突きつけて見ると、つい土台石の下にのめつ  
ている一つの血腥ちなまぐさい死骸があります。長い刀は一間ばかり前へ  
投げ出しているのに、左の手では手拭を当て、額をしつかりと  
押えて、その押えた手拭の下から血が滲にじみ出して面おもてを染めてい  
るから、その人相をさえしかと認めることはできないが、まさ  
しく相当のさむらいであります。

駒井甚三郎は、傍へ差寄つて検しらべて見ると、すーつと額ひたいから  
眉間みけんまで一太刀に引かれて、あつと言いながら、それを片手で

押えて夢中になつて、ここまで、よろめいて来たものと見えま  
す。よろめいて来て、人の家の戸口と知つて、刀を抛り出して、  
その手で戸を二つ三つ叩いたのが最後で、ここに打倒れて、そ  
のままになつたものに相違ないと思われます。

もはや、どうしようにも手当の余地はないと見た駒井甚三郎  
は、かかわ関り合あいを怖れてそのまま戸を閉じて引込むかと思つと、  
そうでなく、提灯を持つて、スタスタと柳橋の方へ進んで行き  
ました。寅吉も、駒井が出て行くのに自分も隠れていられない  
から、甚三郎のあとを追おうとすると、

「寅吉、お前は危ないから出て来るな」

「殿様こそ、お危のうございますよ」

「出て来てはいかん、しきつ闕より出てはならぬと言うに」

甚三郎は寅吉を抑えて、表へ出さないようにして、自分だけ

は提灯をさげて橋の方へ出直しました。

鬨の中において、戸の間から面かおだけを出した寅吉は、安からぬ色をして駒井甚三郎の後ろ姿を見送っているが、その心配のうちにも、また安んずるところがあるのは、それはこの殿様が、もとより武芸にかけて何一つおろそかにはないが、ことに鉄砲にかけては、海内無双かいだいむそうであるということを知っているからであります。そうして、懐中には、いつもその時代最新式の、外国から渡った短銃を離したことのないのも知っているからであります。

駒井甚三郎は、向うへ歩んで行きながら提灯ちようちんの光で地面を照して、気をつけて見ると血汐ちしおのあとが、ぽたりぽたりと筋を引いているのであります。斬合ちあひいは、たしかに柳橋の上で起っている。どちらがどうともわからないが、その人数は一人ではなく、たしか三人以上の斬合ちあひになつてゐる。もし三人とすれば、

必ずや一方は一人、一方は二人であるに相違ない。自分のいるところの門口へ来て倒れたのは、そのうちのどちらか知らないが、まだ二人はたしかに橋の上に残っているはずである。負傷して橋の上に残っていないければ、どちらへか逃げて行つたものであるろう。逃げて行つたとすれば、その二人で、この一人を討つて立退いたものであろうが、それにしては卑怯である。喧嘩か、意趣か、辻斬か知らないが、二人で一人を斬つて、その最期も見届けずに逃げてしまうのは腰抜けである。それはあるべからざることだから、多分、その二人も傷ついて、そこらに斃たおれているだろう。駒井甚三郎は、そう思ったから、現場を見届けるために橋の上まで来て、提灯を差し出すと、果せる哉かな、橋の欄干にしがみついている一個の人影を認めることができました。

駒井甚三郎は、その橋の欄干にしがみついている人影に提灯

を差しつけて見ると、それもしかるべき、若いさむらいでありました。

前のは、ともかくも向う傷であつたが、これは斬られて後に欄干にしが、みついたのか、逃げ場を失うて欄干にしが、みついたところをやられたのか、後ろ袈裟に、ザツクリと思う壺に浴びせられて、二言にじんともなく息が絶えている形であります。その死物狂いで欄干へとりついたので、木の枝にかじりついた蟬せみのぬけ殻と同じような形であります。

駒井は篤とくと提灯の光で、それを見届けた上に、なお徐ろおもむに橋の上を進んで行くのであります。その進んで行く橋板の上はベツトリと血だらけですから、ややもすればそれにすべにつつて、足をさら浚われようとする間を選んで徐しずかに歩きました。

左には両国橋が長蛇の如く蜿蜒えんえんとしている。右手は平右衛門

町と浅草御門までの間の淋しい河岸で、天地は深々しんしんとして、神田川も、大川も、水音さえ眠るの時でありました。

「駒井の殿様」

堪り兼ねたと見えて寅吉が、あとを慕うて来しました。

「お危のうございますよ」

駒井甚三郎は提灯を差し上げて、寅吉の方を照しましたけれど、その時は、もう来るなど言つてとめはしません。

「あッ」

と言つて、寅吉は、その橋板に流されている血汐に迂りました。お危のうございますという口の下から、自分が危なく打倒れようとして橋の欄干に取とり縫すがつた、ついその隣は、例のしがみついた屍骸でしたから、慄ふるえ上つて飛び退きました。

「駒井の殿様、あんまり進み過ぎて、お怪我のないように」

寅吉は橋を渡りきることができないでいたが、駒井甚三郎は頓着なく、橋の向うの板留まで歩いて行きました。

そこで、ゆくりなく拾い上げたのは一口の刀であります。それを駒井が提灯の光で見ている時、今まで眠れるもののように静かであった大川の水音が、遽にわかにざわついてきました。潮が上げて来たものでもなく、雨が降り出したわけでもなく、水の瀬が開ける音がしたのは一隻の端舟はしけが、櫓ろの音も忍びやかに両国橋の下を潜つて、神田川へ乗り込み、この辺の河岸かしに舟を着けようとしているものらしい。拾い上げた刀を見ていた駒井は、早くもその舟を認めました。刀を照らした提灯の光で、今時分、河岸へつけようとした怪しの舟の何者であつて、どこから来たものであるかを確認しようと思いました。

それを怪しいと見たのはおたがいのことで、ここまで乗りつ

けて来た小舟の船夫せんどうはまた、櫓を押すことを休めて、橋上を屹きつと見上げました。

この深夜に、長い抜刀ぬきみを片手にかざしながら、橋上にただ一人で突つ立っている光景は、舟の中から見ても穏かなる振舞とは見えません——それで、手を休めて、橋上の人をなさん様を眼も離さず見ていたが、この小舟の中には、この船夫一人ではありません。他に一人の客があつて、その客人もまた、船夫と同じような怪しみと熱心とを以て、橋上の人を見つめているのであります。

それがために、せつかく、河岸へ着けようとした舟は河岸へ着かず、神田川を出でて大川に合せんとするところの波に揉まれて漂うています。この怪しい舟の船夫せんどうというのは小柄な男で、一人の乗客かぶというのは頭巾を被った女のような姿の人。申すま

でもなく、船夫はすなわち宇治山田の米友で、お客はとりも直さずお銀様でありました。

こうして橋の上と下とでは、無言のままに睨み合いをしていました。駒井甚三郎は提灯の光で、その怪しの舟と、乗組の何者であるやを見極めようとしたけれども、提灯の光は充分にそこまで届きません。舟の中なる米友は、同じ提灯の光をたよりに橋上の人を見つめていているけれど、提灯の光は朦朧もうろうとして、思うようにその人の面影おもかげをうつしてくれません。

その時に駒井甚三郎は、ふと己おのれの後ろで人の足音を聞き咎とがめたから、橋下をのぞんでいた提灯を振向けました。つい、自分の後ろ十間とは隔たらないところに、またしても一個の人影があります。

それは船大工の寅吉ではありません。寅吉とは全く違った両

国広小路方面から歩いて来たものです。それも駒井のここにいることを認めて、なるべく忍び足で近づいて来たものと見えませんでした。

「誰じゃ」

この時は駒井甚三郎が、猶予なく言葉をかけました。

「そなたは誰じゃ」

その返事は、まだ少年の声であるらしい。

「何用あつて、この夜更けに」

駒井は再び咎め立とがてすると、

「そなたこそ、何御用あつてこの夜更けに」

少年は甚三郎に反問して来ました。

「橋の上が騒がしい故に、出て見たところであるわい」

「橋の上を騒がしたのは、貴殿ではござらぬか」

少年はジリジリと、二三歩進み寄りませう。

「拙者ではない……見受けるところ、そなたはまだ少年のようじゃ、橋の上が騒がしいと知つて、一人でここまで来られたか、それともつれがあつて来られたか」

駒井甚三郎は提灯を高くして、その少年の姿を見ようとしたけれど、やはり充分に光が届かないのが残念です。

「いかにも、私には三人の連れの者がありました、途中においてその者の姿を見失いたるが故に心許なく、これまで追いかけて参りました」

「おおその三人は……ここに斬られている、多分、これらの人たちがそれではないか」

「ええ？」

離れている少年は、その時に、つつと橋板の方まで馳はせ寄つ

て来ました。しかしながら、刀の鯉口は切つて、寧ろ、駒井甚三郎を斬らんとして飛びかかつて来るものようです。駒井は提灯を楯たてに、その鋭鋒を避けんとするものであるかの如く見えます。

「その斬られた人々は、いずれにござります」

「これへおいであれ」

甚三郎は自身、橋の上へ引返して案内しようとする。それと並び寄るかのように少年は、刀の柄つかに手をかけて、

「貴殿はそもそも、いずれのお方でござる」

こう言つて詰問の体ていであります。返答の出ようによつては、たちどころに斬つてかかろうとする事の体でありました。駒井甚三郎は提灯をかざして、やはり、その少年の鋭鋒を避けるよ  
うにしなから、

「拙者はこの附近に住居致す者でござるが、そういう御身は、いずれよりおいでなされた」

そこで、提灯の間に、二人の面が合いました。いずれも覆面はしておりません。微かながら提灯の光は、二人の面差を映し出すに充分でありました。

「おお、其許様は駒井能登守殿ではござりませぬか」

少年は、驚き呆れた音声です。

「宇津木君ではないか」

駒井甚三郎もまた呆れ面です。この少年は宇津木兵馬でありました。駒井甚三郎と宇津木兵馬との会見は、滝の川の西洋火薬製造所以来のことでありました。

二人はまた意外のところ、意外の奇遇を喜びました。兵馬の語るところによれば、兵馬は、ついこの川向うの相生町の老

女の家において、今夜は同宿の三人のさむらいを尋ねて、このところまで来たということであります。

その三人の同宿というのは、某藩の士分の者であるが、近頃、老女の家に寄寓して、番町の齋藤の道場へ通っておりまして。しかるにこの三人が、どうも辻斬がしたくてたまらない様子が見える。近頃しきりに両国橋あたりに辻斬があるとの噂うわさを聞いて、どうも腕が鳴つてたまらないらしい。三人が相談してこの二三日、夜な夜な出歩きをすることが兵馬の眼にもよくわかりました。

兵馬の眼から見れば、彼等はまだまだ辻斬をして歩く腕ではない——別段に、辻斬をして歩く腕けんというものがあるべきはずのものではないけれど、どうも剣呑けんに思われてたまらなかつた。しかし、兵馬は自分も夜な夜な出歩くことが多いことによつて、

彼等の相談に乗る隙もなかつたし、それを忠告する余裕もありませんでした。

今夜、夜更けて染井方面から帰るとて、両国橋の上で、兵馬は、ふと彼等三人とすれ違いになりました。彼等は兵馬を見ると、逃げるようにして通り抜けるから、それを見送つて兵馬はやり過しはしたけれど、また好奇心にも駆られ、心配にもなつて、わざと引返して彼等のあとをつけてみよう、と、広小路まで来たけれども、ついにそこで三人の姿を見失つてしまつたといふことでした。

一旦、郡代屋敷の方面へ行つて見た後に、また引返して、柳橋の方へ出て見ると、その橋上に立っている人がある。提灯こそ提すいげているが、手に抜ぬき刀を携たへている事の体ていが尋常でない。そこで誰すい何かしてみたその人は、元の駒井能登守であつた。

という話の筋を聞いて駒井甚三郎が、なるほどと思ひ、

「橋の上に一人、船宿の前に一人、都合二人だけ斬られている、もしや、そなたの尋ねる人も知れぬ、検分なさるがよい」

甚三郎が先に立つて、提灯を照らして兵馬を導いたところは、まず橋の欄干に蟬のぬけ殻のようになって、しがみついている一人のさむらいです。

「あ、これだ、これに相違ござりませぬ、これは田村左四郎と申す某藩の士でござりまする。ああ、無惨なことを致しました」  
兵馬は眉をひそめて、後ろ袈裟に斬られた田村の無惨な殺され方をながめていましたが、

「さて、もう一人はこちらに、真甲まっこうを割られている」

駒井は橋を渡り返して、かの船宿の前へ来て見ると、前に言う通り、真甲の傷を手拭で押えたまま、刀を投げ出して仰向け

に倒れています。

「あ、これは多賀六郎と申す某藩の者、以前は剎河岸あざりがしの桃井もものいの道場で、相当の腕利うでききでござりましたのに」

兵馬は、やはり無惨極まる思い入れで、その斬られぶりをよく見ておりましたが、

「して、もう一人、余語よごと申すやはり某藩の者がおりましたはず、その者の姿は見えませぬか」

と言って四辺あたりを見廻しました。

「まだ一人あつたとすれば、それは、やはり斬られているのか、逃げたか」

と駒井も不審がつて、そこで三人が一緒になって、もう一人の行方を探そうとして、橋の方へ小戻りして来ました。

それから橋上へ取って返した時分に気がつく、さいぜん橋

の下までやって来た怪しの舟は、もう見ることができませぬ。再び大川へ出てしまつたのか、それとも橋をくぐつて神田川を溯さかのぼつたのか、いつのまにか見えなくなつたけれど、それはこの場合、強しいて探究してみなければならぬほどのことではありません。

駒井甚三郎は、その時にこんなことを言いました、

「拙わ者が甲府にいる時分、あの城下で、ひとしきり辻斬沙汰が多かつた、士分、百姓町人、女まで斬られた、ずいぶん、酷むごらしい殺し方をしたものだ、腕は非常に冴さえていた、百方捜索したが遂にわからなかつた。あとで聞くと、その斬り手はかく申す駒井ではないかと疑うた者があるそうじゃ、駒井を除いては、あれほどに手が利いて、そうして斬り捨てて巧みに姿を隠すことのできようものが、甲府の内外にあらうとは思われぬ、

新任の駒井能登守が、新刀あらみだめ試しのために、ひそかに城を抜け出でて辻斬を試みるのだろう、さもなければ広くもあらぬ甲府城下のことだから、おおよその見当がつかねばならぬはず……というわけで、駒井の身边をしきりに警戒していた者があつたやら。駒井は虫も殺せぬ男のつもりだが、甲府城下ではそれほどに剣呑けんおんがられたことがある。辻斬というものは、一度味を占めるとやめられないものだそうだな、一度が二度、三度となると度胸も据すわつて、毎晩、人を斬らねば眠られぬようになるそううなな」

こんなことを言いながら、橋板の上の血痕をよくよく辿たどつて見ると、その一筋が、平右衛門町から第六天の方やしろへ向いています。それを伝つて行つてみると、第六天の社の少し手前やしろのところの路傍に、物の影が横たわっているのをたしかめました。さ

てこそ！ 近寄つて見るとしかかもその屍骸が一箇ではなく、折重なつて二つまであるらしいことが、まず三人の胆きもを冷しました。それではここまで追蒐おつかけて来て刺違えたのか、ともかくも当の敵かたきを仕留めたものと見える。そう思つてみると、またも三人の度胆を抜いたことは、その死屍の中からいびき屍いびきの声が出たこととであります。これには駒井甚三郎も、宇津木兵馬も、上田寅吉も一方ならず驚かされないわけにはゆきません。いかなる大剛の人でも、斬り伏せられて屍をかく人は無いはずです。また人を斬つておいて、屍をかいて寝込んでしまう人もあるまじきものです。

さすがの三人も、これには驚き入つて、ずかずかと近寄り検しらべて見ると、下になつてゐる一つはまさしく斬られてゐる人ですが、その斬られている人の腋わきの下に首を突込んでゐる他の一

人が、まさに大甎をかいているのであります。何のことだか、さっぱりわけがわからないながら、下になつてゐる屍骸を検分するには、ぜひと、その上になつてゐる甎の主を取り退けなければなりません。

「これこれ、お起きなさい」

兵馬は、その背中を叩いて、身体をゆすぶると、ようやくにして起き上つたその人は、一見して兵馬もそれと知る長者町の道庵先生でしたから、あいた口が塞がりません。

五

その翌朝、練塀ねりべい小路こうじの西の湯というのへ、見慣れない一人の客が、一番に入つて来ました。

この客は差していた両刀を絡からげて、無造作に二階番頭に渡し、着物の帯を解きはじめます。見慣れない人ではあるけれども、この辺は旗本だの、御家人だのというものの屋敷が多いから、こんなお客が早天に飛び込んで来たからとて、大して物珍らしいというわけではないが、両刀こそ差しているけれど、また身なりとてさほどに落ちたものとも見えないが、ただ異様なのは、この客が盲目めくらの人であることです。盲目であるにかかわらず、いつのまにやって来たか、番台では何とも挨拶のないうちに、早くも二階へ姿を現わして、二階番頭を驚かせたことでもあります。

それから、人手も借りずに衣類を脱ぎ捨てて、梯子を降りて浴槽へ行く挙動が、ちよつと盲人とは受取れないようです。入つて来た瞬間は、いかにも病み上りのような弱そうな人に見えた

が、はだか裸体になつた筋骨は、さほど衰えたものではありません。

二階番頭の老爺は茶道具を整理して、炉の上に茶釜をかけたが、ちよつとばかり首をひねりました。朝湯にしても、夕湯にしても、湯屋のお客は、その縄張りかおぶと面触れが大抵きまつたものであります。湯屋の主人と番頭とは、大抵そのお客の面と身分柄とをわきまえているから、たまに新顔の客が来る時は、多少の用心をします。板間かせぎは、どうしてもその新顔の客の中から出るものであるから、その用心もまた無理ではないが、今日のこの早朝の客は、全く新顔であつて、全く別な意味で番頭の目を引きました。

しかしながら、僅かの間を置いて朝湯に飛び込んで来た、吉原帰りらしい二人の御定連ごじょうれんの騒々しい梯子段の上り方で、急に二階番の老爺も興をさましてしまいました。

湯屋の二階は、一種の倶楽部クラブでしたから、新聞の種になるほどの噂は、まずこのところできまざまに評判されました。色里から朝帰りの若い者共は、まずこの湯屋へ立寄つて、家の首尾の偵察ていさつを試みて、それから帰宅する足場としている。こうしてこの定連の朝湯客のなかには、威勢よく飛び込んで、すぐにトントンと浴槽へ降りて行く者もある。湯はそつちのけにして話し込んでしまう者もある。甚だしいのは、前日の将棋の遺恨忘れ難く、朝湯もそつちのけにし、朝飯を顧みる違いとまなく、ついにひるめし午飯の時になつて、山の神に怒鳴り込まれ、あわてて飛び出すものもある。そこで二人三人、知つた面かおが見えると、昨晚の柳橋の辻斬の話であります。前の晩、柳原で女が殺されたことは、この辺は管轄違いか知らん。それとも、昨晚の柳橋の出来事が大きかつたために、それに食われたものか。柳橋の上で侍が三

人まで斬られていたということ、その場へ現われて狼藉者を追い散らしたのが長者町の道庵先生であつたというようなことか  
ら、辻斬に次での道庵先生の評判が呼び物になりました。ところが、威勢よく、その時に二階へ上り込んで来たのが、今も噂の主の道庵先生その人でありましたから、集まっていたものが、やんやと喝采しないわけにはゆきませぬ。

「いよう、長者町の先生」

彼等は、おのおの席を譲つて、下へも置かぬもてなしであります。

「先生、昨晚はまたエライ働きをなすつたそうで、いつもながら、先生のお手並には恐れ入つたものでげす。ただいまも、みんなその噂をしております、なんでも先生は、ああして猫を被かぶつておいでなさるんだが、実は、中国のしかるべき家中の御

浪人で、武芸十八般、何一つ心得ておいでなさらぬのはないという評判でございますよ。本業のお医者さんの方は、かいわい界限きつての名人でいらつしやるし、それに西洋の方の学問まで、ちやあんと呑込んでおいでなすつて、それを知つているともいう面をなさらないところが、お見上げ申したもんだ。いつぞやはまた上野の山下で、もてあま持余し者の茶袋を、ちよいと指先をつまんで締め上げて、ギユウと参らせてしまったところなんぞは、どのくらいやわら柔術の方に達しておいでなさるんだか底が知れねえ。昨晩は昨晩で、また命知らずの浪人が何十人というもの、第六天の前から柳橋へかけて斬り結んでいたところへ、先生が通りかかつて、一声、言葉をかけると、ちりぢり散々バラバラ逃げ去つてしまつたということでございますね、どこへ行つてもその評判で持ちきりでございますよ。実際、あの先生は、ああしてふざけてお

いでなざるけれど、学問といい、武芸といい、まあ昔で言えば由井正雪といったようなお方だが、世が世だから、ああして酒に隠れてふぎけておいでなざるんだ、町内ではあの先生を大切にしなくっちゃならねえ、あの先生こそ町内の守り神だって、みんなでそう言つてたところですよ」

まんざら、おひやらかすとも見えないように真顔まがおになつて、先生を讃ほめ立てたから堪りません。

「そんなでもねえのさ」

道庵先生は、ニヤリ笑いながら頤あごを撫でて、

「まあ、話半分に聞いてもらいましようよ。よく言つたものさ、藪やぶにもこうの者と言つてね、藪は藪なりに、時々功名手柄をするところがおかしいのさ。昨夜なんぞはお前さん、拙者が通り合せなくてごろうじろ、たしかに焼討ちだね。あのなかにはお

前、日本で無双の砲術の名人が隠れていたんだぜ、それがお前さん、舶来のカノーネルというやつを引張り出して柳橋の袂たもとへ据えつけ、これから向う岸へぶつ放そうというところへ、折よく拙者が通りかかって、はばか憚りながら長者町の道庵だ、と名乗りを揚げて、不足であろうが十八文に免じて拙者に任せてもらいたい、こう言つて柳橋の真中へ大手をひろげて突立つたものさ、そうすると、やはりなかには相当のわかつた奴もあつて、よろしい——ほかの人では任せるといふわけにはいかねえが、道庵なら任せてもよろしい——」

「先生、もうたくさんです、そのくらいにしておいていただきましょう」

堪り兼ねたのが両手をかざして、先生の口を抑えようとします。そこで大笑いになりましたが、その間に道庵は大あわてに

あわてて、脱いだ衣裳を柵へ押し込んで鍵もかけず、浴槽へ向つて逃げるが如く駆け下りました。

あとでは、やはり腹を抱えて笑つたものがあるけれども、それでも先生の人徳で、誰もその法螺ほらをにくがるものもなく、あえて軽蔑しようとする者もありません。ああ言つて眼に見えた法螺を吹いては、しよげ返つてしまふところが先生の身上だ、あれがエライところだと言つて、よけいなところへ有難味をつけるものもありました。

ところへ、湯から上つて来た人があります。それはさいぜん、朝湯のいの一歩に入浴した見慣れない盲目めくらの人でありました。いつのまに上つたか、もう柵の中から着物を取り出して帯を締めて、二階番のところへ行つて預けた大小を受取ると、若干の茶代を置いて、煙の如く梯子段を下りて消えてなくなりました。

二階番も最初から怪訝けげんな面であるし、居合わせた定連の者も、呆氣あつけにとられてそれを見送つて、面を見合わせました。

「盲目だね」

「盲目にしてはおそろしく勘がいい」

「梯子段から上つて来て、すーっと消えてしまったところが、眼に残っているような、眼に残っていないような、変な心持だ」

「わたしはまた、ひよつと振返つて見た時に、幽霊！　と思いましたがよ、あの顔色をごらんさない、まるで生きた人じゃありませんね、この世の人じゃありませんよ」

「いやだね、全くいやな気持のする人だ、一目見ただけでゾツとする人だ、あんなのは、キツト戸すきまの透間からでも入つて来る人ですぜ」

「あんなのがお前、辻斬に出るんじゃないか知ら」

「だって、盲目ではね」

「目が明いていたら、きつとやるに違いない、劍難の相というのは、たしかにあんなのを言うんだろう」

「そうだね、あれこそ劍難の相というんだろう、昼の上じや死ねない人相だ、人を斬つて業が祟ごうつたから、それで盲目になつたんだろう」

「そう言えばそうだ、ありや、確かに劍難の相というものだ、人相は争われない」

「全く人相は争われない、劍難の相はどこかに凄味すじみがある、女難の相は鼻の下が長い」

「笑いごとではありません、皆さんが劍難の相とおっしゃったのは、よく当っている、わたしやね、皆さんよりいちばん先に、あのおさむらいが下から上つて来るところを見ました、それか

らこうやって着物を探つて引っかけるところを見ましたがね、右の手首のところを晒さらしで巻いていましたよ、その晒の外れに血が滲にじんでいるところを見て、ゾツとしましたぜ」

「え、え！」

「だから、凄いと思いました。今時分、お前さん、真先がけで新顔の朝湯に来てさ、おまけに腰の物を大事に抱えてやって来てさ、手首に怪我をしてるんですからな、ただの傷じゃありませんぜ。よく殺気を含んでいると言いますがね、わたしや、あの時に直ぐそう思いましたよ、このさむらいは人を斬つて来たんだ、その汚れを落すために、朝湯に飛び込んだんだ、そう思ったから、わたしやいやになって、せつかく裸になりかけたのを締め直して、こうして、つぐんでしまったところですよ」

「へえ———そうかも知れませんか」

一同が面を見合せた時に、けたたましい音を立てて梯子段を駆け上つて来たのは、道庵先生であります。無論、素裸すっぱだかです。その時、先生は、いつもの先生とは違つて、すさまじい権幕をして、

「どこへ行つた、どこへ行つた」

と言つて、衣裳棚の前で、てんでこ舞をしている先生の片手には、手拭かと思うと、そうではない、晒の切れを引きずつているが、その晒の切れは、ところどころ血の滲にじんだ細い切れであります。

定連じょうれんの朝湯の客は、この物狂わしい先生の挙動を、寧ろむしおかし

しがつていたが、先生は大急ぎで着物を引っかけて、帯を締めると、湯銭も茶代も、そつちのけにして、梯子を下りて表へ飛び出してしまいました。裸で飛び出さなかつたのが見つけ物もので、

煙草盆を蹴飛ばさなかつたのが勿怪もつけの幸いです。

「油断も隙もなりやしねえ、どうもおかしいと思つたんだ、なんだか横顔にチラリと見覚えがあるから、こいつ、おかしいなと思つたんだ——野郎、伊勢の国のことを忘れたか、船大工のうちで、拙者が目をかけてやつたのを忘れやすまい、江戸へ出て来たんなら、出て来たと拙者のところへ、一言ひとことの挨拶があつても悪い心持はしねえ、あの目がよ、あれでじいつと心がけをよく養生をしていりゃあ、どうやら物になる眼なんだが、あの心がけじゃ物にならねえや、いい気味だ、あん畜生——いい気味はいい気味だが、今、どこに何をしているんだ、ああして朝湯に来るんだから、この近所にいるんだらう、近所にいるんなら近所にいるで、とかく近所に事勿ことなかれ……ところが、どうだ、悪いことはできねえもんだなあ、この晒の切れが、ちゃんと流し

元に落っこつていたやつを、人もあろうにこの道庵に見つけられちまった」

何か重大な発見でもしたかのように、道庵は息せききつて走りつづけているけれども、一向、何を追っているのかわからない。四辺あたりをキョロキョロ見廻したけれども、それらしいものは何者も見えません。

さきに、掻かき消すように朝湯を抜け出でた盲目の怪人は、四ツ角に待たしておいた手駕籠に乗って、いずこともなく飛ばせてしまったその後のことであります。

六

しもにた  
下仁田街道から国境を越えて、信州の南佐久へ入った山崎讓

と七兵衛は、筑摩川の沿岸を溯さかのぼつて、南へ南へと走りつづけま  
す。この二人の行手は説明を加えるまでもなく、南条、五十嵐  
らの浪士のあとを追つて行くものであります。しかしてまた南  
条、五十嵐らの浪士は、が、ん、り、き、の百をところの案内として、  
甲府城をめざして進んで行つたことも明らかであります。彼等  
は、甲府の城を拠点として、容易ならぬ陰謀を企くわだてんとしてい  
ることも明らかであります。

それを察した山崎らは、事の発せざるうちに、その巢窟くつがえを覆  
してしまわなければならぬ——蓋けだし、南条、五十嵐らは強力ごうりきに  
身をやつして都合五人で、この山道へ分け入ったけれども、必  
ず何れかに根拠地があつて、そこでひとたび合図をすれば、な  
お幾多の同志が続々と集まつて来ることにはなつてゐるだろう。  
また山崎こそは単身で、あとを追いかけたようなものだが、甲

府の地へ足を踏み入れた時は、勤番の武士は一呼いっこして皆、その味方になるべきはずである。

しかしながら、どう間違つたものか山崎と七兵衛との二人は、ついに南条、五十嵐らの一行を突き留めることができないうで、甲府の城下に着いてしまいました。山崎も七兵衛も、その用心にかけては優劣のない方ですから、同じ道を通つたならば、彼等に出し抜かれるはずはない。道を違えたものか、或いは横道をして外そらしたものか、それはとにかく、早く甲府の城下へ到着することが先手である、と思つたから二人は、無二無三に甲府の城下へ到着しました。

城下へ着いて見たが、甲府城の内外には別に変つたこともない。今や勤番支配の駒井能登守もおらないし、組頭であつた神尾主膳もないが、そんなことは、別段にこの二人に交渉のあ

ることではありません。

「山崎先生」

「何だ」

「久しぶりで甲府の土地へ足を入れて、はじめて思い出した事がありますよ」

「それや何事だ」

「ほかの事じゃございません、百の野郎がここの土地へ、いい寝かし物をしておいたことを、いま私が思い出しました。おそらく、百の野郎も忘れていやがると思いますが、そいつをひとつ取り出して来て、旦那のお目にかけましようかね」

「何だい、その寝かし物というのは」

「そりや刀でございます、名刀がひとふり一振かくしてあるんでござい  
ます」

「ナニ、名刀？ 名刀なら有つても決して邪魔にはならねえが、名刀にも品がある、お前たちのいう名刀は、あんまり大した代物しろものではあるまい」

「それがなかなか素敵で、出処が確かなものなんですよ」

「古刀か、新刀か。在銘のものか、ただしは無銘か」

「古刀のパリパリで、たしかやすつなと言つていましたよ」

「やすつな？ やすつなもいろいろあるからな、出羽でわにもあれ

ば、下坂しもさかにもあるし、薩摩にも、江戸にもあるんだ、出来のい

いのもあるが、そんなに大したものじゃなからう」

「そんなんじゃないやございませぬ、因州鳥取あたりにそのやすつなというのはございませぬかね」

「因州鳥取にやすつなという刀鍛冶は聞かねえが……そうそう伯耆ほうぎの国に安綱があるが、こりやあ別物だ」

「それぞれ、その伯耆の安綱でございますよ」

七兵衛がこういうと、山崎讓は、

「ふふん」

と鼻の先であしらい、

「伯耆の安綱といえは古刀中の古刀で、大同年間の人だ、名刀おにまる鬼丸を鍛えた刀鍛冶の神様と言われる大名人だ、伯耆の安綱がそんなにザラにあつて堪るものかい」

七

山崎は、テンで七兵衛のいうことを受附けなかつたけれど、七兵衛は確信あるものの如く、

「論より証拠、その品を持って来てお目にかきましょう」

と言つて、甲府城の大手の前で山崎と別れました。山崎に別れた七兵衛は、あれから一直線に甲府の市中を東に走つて、まもなく酒折村さかおりむらまで来ると、そこで本街道を曲つて入り込んだのが、酒折の宮であります。

酒折の宮の庭へ入つて見ると、松林の間に人が集まつてさわ噪いでいます。

日本武尊が東征の時、ここに行宮あんぐうを置いて、

新治にひはり、筑波つくばを過ぎていくよ幾夜か寝つる

と歌を以て尋ねた時、傍しやくの燭しやくを持てるものが、

かがなへて夜には九夜このよ、日には十日とをかを

と答えたという事蹟がある。

ここに立てる石碑のうちには、本居宣長のもとおりのりなが「酒折宮寿詞」さかおりのみやよごとを

平田篤胤ひらたあつたねの筆で書いたものと、甲州の勤王家山県大弐やまがただいにの撰した

漢文の碑もある。七兵衛は、左様な委くわしいことは知らないけれども、この社やしろが由緒ゆいしよある社であるということは心得こころずかているはずで。右等の碑文が、さほど好事家こうずかの間に珍重ちんじゆうがられているという理由は知らないが、いずれ俳諧師はいかいしかなんその風流人が、石摺いしずりを取っているのだらうと見当をつけました。

これらの連中からわざと遠廻りをして社の裏へ出て、暫く様子ようすをうかがっていると、

「エエ、宝暦十二年、壬午じんに夏四月、山県昌謹撰とあるが、宝暦十二年は、いったい今から何年の昔になるのじゃ」

「左様な、宝暦は俊明院殿の時代で、ええと、今からおよそ、一百三年、或いは四年前に当る——」

こんなことを言つて風流人は、紙に巻いたものを携え、ゾロゾロ松林の中を出て行つてしまいました。

そこで七兵衛は神社の表へ廻り、参詣をするふりをして扉をあけて、社内へ入り込むと足場を見はからつて、梁はりを伝わって天井の上へ身を隠してしまいました。

これは申すまでもなく、さいぜん山崎讓の前で誓った、伯耆の安綱の刀というのを取り出しに来たものであろう。その伯耆の安綱の名刀というのは、お銀様の家、藤原家に祖先以来伝わる名刀であつて、それをお銀様に頼んで幸内が持ち出し、幸内はその刀のために、神尾の惨忍な手にかかつて一命を落とし、その刀はまた神尾の手からが、んりき、の百の手にうつり、百は流鏑馬やぶさめの夕べを騒がして、七兵衛と共にいずこともなく逃げ去つたそれでありませう。

あの後、二人は、この名刀を、この神社の天井裏へ今日まで隠して置いたものと思われる。まもなく身体中煤すすだらけになつて

出て来た七兵衛は、小脇には油紙に包んだ細長い箱を抱えていました。伯耆の安綱は、やつぱり無事でここにいたものらしい。

七兵衛が箱を抱えて再び社の前へ出て来ると、思いがけなく縁に腰をかけて、煙草たばこをパクリパクリやりながら澄まし返っているものがあります。それが余人ではない、がんりきの百蔵でしたから、

「がんりき、来ていたのかい」

七兵衛も呆れ面あきがおです。すばしつこいのは今にはじめぬことだが、かくまで澄まし返って、脂下やにさがつていられると癩しやくです。

「兄貴、御苦労、御苦労」

七兵衛の出て来たのを見て、銀張りの煙管きせるを縁の上へ抛ほうり出して、片手を伸べたものです。

「ふざけるない」

七兵衛が叱りつけると、が、ん、り、き、はニヤリニヤリと笑い、

「兄貴も思いのほか人が悪いや、弱い者を苛めつこなし、人の物を横取りは風ふうが悪いね、なにもお前と、おれの間だから、欲しけりやあそうと言っておくんさい、ずいぶん譲つて上げねえ限りもねえのだ、だまつて持つて行かれると心持が悪い……そうしてまた兄貴はこれを持ち出して、いつたいどうする気なんだエ、失礼ながら、このなかみの有難さが、兄貴にはまだわかるめえ」

「百、お前の言う通りだ、このなかみの有難さは、俺の眼では睨にらみきれねえが、ぜひこいつを拝みてえという人があるんだから、ちつとばかり貸してもらいてえ」

「うむ、そう話がわかりさえすりやあ、ほかならぬ兄貴に貸借しみをするような、おれではねえが、まあもう少し待つてもら

いてえというのはほかじゃねえ、おれの方にも、この品を一目  
拝みてえという人があるんだ、それを先口せんくちにして、それが済ん  
でから、兄貴の方へ廻すとしてようじゃねえか」

「そいつはいけねえ、先口と言えばこつちに割があるんだ、こ  
れ見ねえ、この通り、蜘蛛の巣だらけ煤だらけになって、骨を  
折つてようやく取り出して来たものだ、くわえ煙草で懐ろ手を  
している奴に渡せるものか」

「そりやまたよくねえ、立つてるものは親でも使えということ  
があるじゃねえか、おれだつてなにも兄貴をこき使つて、くわ  
え煙草で澄ましていようという不了見じゃねえが、一足後れた  
のがこつちの不運さ、そんなことを言わずに貸してもらいてえ」  
「一足後れたのが手前の不運だから、諦めるがいいや、今日の  
ところは兄貴に譲らなくちゃならねえ」

「ところが、そういかねえのだ、約束をきめて来たんだから、持って帰らねえと、がんりきの面つらが立たねえというものだ、どうか弱い弟を憐あわれんでおくんなさいまし」

「そう言われるとこつちも同じことだ、これを持って帰らねえと七兵衛の沽券こけんが下る、まあまあ兄貴に譲れ」

「そうなると兄貴、おれも意地だから、腕にかけても……と言  
いてえが、兄貴は両腕そろっているが、おれは悲しいことに一  
本足りねえ、そうかと言って、みすみす兄貴に譲って引くのも  
業腹ごうはらだから、ここでうまく、馴れ合つちまおうじゃねえか。と  
言うのは、兄貴の見せてえという人も、おれが見せてやりてえ  
と言った人も、おおよそ筋はわかつているんだ、その人たちは  
なにも一本の刀を望んじやいねえ、だいそれた謀叛むほんぎ気のある先  
生方なんだから、長くその手先になって働いてみたところが、

ばかばかしいくらいのもんだ。だから兄貴、ここいらで見切りをつけて、二人が馴れ合つて、こいつを坊主持ちということにして、江戸へのしてしまおうじゃねえか。江戸へ持つて行つて、こいつをうまく売り飛ばしやあ、五百や千両の小遣こづかいにはありつける代物しろものだ、あんな人たちに附いて謀叛の加勢をするよりは、この方が、よつぽど割だぜ」

南条、五十嵐らの志士は、甲府城を乗つ取つて大事を起さんとし、山崎讓はまた彼等の陰謀の裏を搔いて、根を覆えそうとされている間に、おのおの、その一方の手引をして来た七兵衛、がんりきの両盗は、その方は抛り出して、伯耆の安綱を持つて、これから江戸へ飛び出そうという妥協が成立してしまいました。二人は、この名刀を坊主持ちにして、例の甲州街道を、都合よく縫つて通ります。二人の足を以てすれば、ほとんど瞬く間

に江戸へ飛んでしまふのだが、その途中どう道を枉まげたものか、その翌朝、二人の姿を高尾山の峰の上で発見するようになりました。

二人は高尾山上の薬王院へ参詣しようというのでもなく、山頂に鎮座するこの山の守護神、飯綱権現いづなごんげんの社前へ一氣に上つて来ると、社の前に例の箱入りの名刀を供えて、二人とも跪かまつて柏手を打ち、恭うやうやしく敬礼しました。

「南無飯綱大権現」

七兵衛がこう言つて拝礼すると、

「南無甚内殿、永護靈神様」

とが、んり、きが続けます。次にか、んり、きが、

「南無飯綱大権現」

と言つて跪ひざまずくと、七兵衛が、

「南無甚内殿、永護靈神様」

と言つてハタハタと手を拍うちます。こうして二人が、立つたり跪こいたりして、祈念を凝こらす言葉を聞いていると、一方が飯綱大権現という時は、一方が南無甚内殿といい、一方が南無甚内殿と言う時は、一方が飯綱大権現というのであります。

この二人のやつらが、殊勝な面かおをして神様に拝礼することですから、かなり奇怪なものであるけれど、いったい飯綱権現は、どうかするとこんな連中の信者を持ち易い神様であります。飯綱の本尊は陀だ祇ぎ尼にてん天てんということであるが、その修験者は稲いな荷かりとも関係があつて、よく狐を遣つかつて法術を行うということでもあります。飯綱の法術は人を惑わすものであるというところから、変幻出没を巧みにしようという輩やからは、この権現の特別な加護を蒙こうむりたいものらしい。七兵衛とが、んり、きとが、途中の気紛れに

しろ、こうして飯綱権現へ願をかけてみようとする筋合いは読めないことでもないが、ちよつとわからないのはそれに続く、南無甚内殿、永護霊神様という神様の名前であります。甚内殿という神様は、どこにあるのか。また飯綱権現の一名を永護霊神とは呼ばないはずです。

二人は、殊勝な面をして、飯綱権現に祈祷を凝らしておいて、神前に備えた安綱の名刀を、まず七兵衛が取り上げておしいただいてから、

「どうだい、こんな名刀を甚内様に持たしたら、ずいぶん人を斬るだらうなあ」  
と言いました。

「うーん、こりゃ人斬庖丁にや勿体もっていねえんだ、伯耆の安綱なんて刀は、神様に備える刀で、人を斬る刀じゃねえとよ。滅多に

人を斬るには村正がいいね、村正でやつは、なんとなく凄味があつていいね」

が、ん、り、き、が、こ、う、い、う、返、事、を、し、ま、し、た。

こんなことを言つて二人は、山頂の飯綱権現の社から下りて来ました。見受けるところ、二人がわざわざ道を枉まげたのは、単にこうして飯綱権現の前へ安綱を、見せびらかしに来ただけであるようです。

二人が例の刀箱を持つて高尾山を下りながら、が、ん、り、き、の百蔵が、七兵衛に向つて、一つの動議を提出致しました。

「どうだい、兄貴、こうして坊主持ちも根っから新しくねえ、これから江戸へ着くまで、二人で腕つくらべをやろうじゃねえか、おたがいに出し抜いて、せしめた方が、この刀を物にするよということにしようじゃねえか、売り飛ばして山分けにするよ

りは、その方が柄がらに合つて面白かろうぜ。もし、どつちの手にも落ちなかつた時には、こりやいつそのこと、鳥越の甚内様へ持つて行つて、さつぱりと納めてしまおうじゃねえか、どのみち、伯耆の安綱なんて刀は、誰が持つたつて持ち切れる刀じゃねえ、持ちきれたにしたところで、差料さしりょうになる品じゃねえんだ、二人で腕だめしをやつた上に、甚内様へ持つて行つて綺麗きれいに納めると、甚内様の供養にもなるし、こちとらの罪滅ぼしにもなろうというものだ。どうしたもんだ、兄貴」

が、んりきからこの動議を提出されると、七兵衛は苦笑いをしながら、

「そいつは面白かろう、手前てめえを相手に腕くらべも大人げねえ話だが、甚内様へ奉納なつとくというのは、いいところへ気がついた」

そこで七兵衛も納得なつとくしたらしい。高尾山から江戸までは、こ

の連中にとつては、ほんの一足であるが、その一足の間、伯耆の安綱の刀を<sup>ま</sup>的にして、二人が腕くらべをやつてみようというようないたずらは、今に始まつたことではないが、さいぜんから二人の口に上る甚内様というのは何物か。それは今までに見えなかつた人の名であるに拘らず、この碌ろくでもない二人ともが、甚内様なるものには相当の敬意を払つてゐることがわかります。山の上では、甚内様、永護靈神様といい、ここでは鳥越の甚内様と言いました。もし、二人のうちのいずれにもこの伯耆の安綱の刀が落ちなかつた場合には、それを鳥越の甚内様へ持つて行つて納めるといふことには、二人とも異議がないのであります。よつてここに、鳥越の甚内様なるもののい、われを一通り、説明しなければならぬ。

浅草の鳥越橋の西南に、御書院番のこいでひょうじ小出兵庫（二千百石）と

いう旗本の屋敷の中に、二人が今いう甚内様の社があるのです。

神に祀まつられるほどの甚内様とは何人ぞ。それは英雄にもあらず、また義人にもあらず、一箇の盜賊に過ぎないのであります。姓を高坂こうさかといつて、名は甚内。父は甲陽の軍師高坂弾正であるということです。

「天晴あつぱれ手練のこの槍先、受けてはたまらぬ大切だいじの幼な児……」

という二十四孝の舞台面は、かなり高坂弾正の器量を上げるように書いてあります。そのはじめ、容貌を以て信玄に愛せられたところを以て見れば、また非常な美男子であつて、その後、ほしな「保科弾正やりだんじよう槍弾正、高坂弾正にげだんじよう逃弾正」を以てあえて争わなかつた

ところは、沈勇にして謀はかりごとを好む人傑の面影を見ることもできません。武田信玄の股肱ここうとして、一二を争う智将であつたことは疑うべくもない。

その高坂弾正に一人の遺子わすれがたみがありました。幼名を甚太郎といひ、後に甚内と改めたその人がすなわち、鳥越の永護靈神として、半ば実在の人となり、半ば荒誕こうたんの人となり、奇怪な盜賊として祀らるるに至りました。

父が没してこの遺子は、祖父の高坂対馬つしまに伴われ、没落の甲州をあとにして、摂州芥川あくたがわに隠れて閑居して居るところへ、祖父の知人であつた宮本武蔵が訪ねて来て、夜もすがら語り明かした時に、祖父の対馬が甚内を武蔵に預けました。そのとき甚内は、まだ甚太郎といつて、年僅かに十一歳であつたといふことです。

十一歳にして宮本武蔵に預けられた甚内は、その時から武蔵に従つて江戸に下り、武蔵が神田お玉ヶ池の近傍に道場を開いた時（武蔵がお玉ヶ池へ道場を開いたことがあるかどうか考えないで伝説をそのまま借用すると）、そこで武蔵から真免流の免許皆伝を受けました。それは甚内が二十一歳の時のことであるということですよ。

その時分、甚内は人の活胴いきどうを試みたく、ひそかに柳原の土手へ出て、往來の人を一刀に斬り倒していたが、或る時、飛脚を斬つて金を奪つてから、ついに辻斬が盗賊にまで進んだ。それより悪行が面白くなり、辻斬をしては金を奪い、その金で鎌倉河岸の風呂屋女に耽溺たんできしていたが、その悪事が師なる宮本武蔵の耳に入つて破門された。そこで諸国の遍歴を志し、その門出に参詣したのがこの高尾山の飯綱権現の社であつた。その社の

前で、名を甚内と改めて、生涯のある目的を祈願した。それから相州の平塚在に暫く足を留めて、そこで盜賊の首領となった。その後、箱根山へ隠れて強盜の張本となった。高坂甚内は、宮本武蔵に就いて劍道の奥儀を究めた上に、強勇にして力量がある。ことに水練に達して久しく水底に沈み、水の中を行くこと魚の如くであつたと言われている。加うるに身体は不死身であつて、一切の刀劍も刃が立たないということでありました。

その頃、「日本三甚内」とうたわれた三人の甚内があつた。三人ともに同名で、そうして同じく兇悪なる盜賊であつた。右に言う高坂甚内をその随一とし、もう一人は、庄司甚内——である。これは吉原を初めて開いた人であるが、前身はやつぱり盜賊で、劍槍けんそうに一流を究め、忍術に妙を得て、その上、力量三十人に敵し、日に四十里を歩み、昼夜眠らずして倦むことなく、

それに奇妙なのは盗賊ながら日本を週国して、孝子孝女を探り、堂宮どうみやの廃すたれたのをおこして歩いたというところが変っている。それともう一人は、飛沢甚内——これも同じく剣術、柔術、早業に一流を極め、幅十間の荒沢あらかわを飛び越えること鳥獣よりも身軽であったところから、自ら飛沢と名乗った。これが捉まった時に、大久保彦左衛門の命乞いによって死罪を許され、身持ちを改め、苗字を富沢とかえ、横目の御用ごうむを蒙り、古着屋商売をして無事に天命を終えた。その住宅附近が後に富沢町となった。

かくて高坂甚内は、箱根山に籠こもって悪事を働いていたが、詮議が厳しく、箱根山の住居もなり難く、そこを立退いて諸国を徘徊はいかいしていたが、やがて再び江戸に舞い戻ると赤坂に住居を構え、例によつて辻斬、強盗のほかには、表面は剣術を人に教え、内実は無頼の徒を集めて博奕ばくえきを業としていた。悪行いよいよ募つて、

そのころ牛込御門内に住居していた先手役青山主膳さきてやく（千五百石）の組くみ与力同心よりきどうしんが召捕りに向つたところ、同心二人まで深傷ふかでを負い、与力からも辛き目に遭つてほうほうていの体で逃げかえつた。それを聞いて齒嚙みをした主膳は、自ら召捕りに向わんとしたけれども、叛逆謀叛人でない限りは奉行自身に召捕りに向うという例はなく、さりとて無敵の悪人であるから、ウカと手を下し、味方を損ずるのも愚であると召捕りの方法を思案しているうちに、甚内おこりが瘡わずらを患い出したということ聞き込んで、押入つてついにこれを捕縛することができた。それで牢の中へ入れて、病氣が癒なおつた後に改めてお伺いの上、浅草元鳥越橋際において死罪に行うことになった。ところが、生来の不死身であつたところから容易に刀剣が身に立たない。よつて甚内が日頃所持していた槍を取寄せて礫はりつけにかけてしまった。——その後、引廻しの者

の先へ拔身の槍を二本立てる。その一筋の槍は、高坂甚内はりつけを磔はりつけにかけて槍であると言ひ伝えられている。こうして高坂甚内なる無類の兇賊は一生を終つたけれど、その兇賊が神に祀らるるに至つた理由はほかにあるのです。

右の高坂甚内は、寛永の中頃から正保年間までの間の人で、その時分の南の仕置場きわは、本材木町五丁目にあり、北の仕置場は、元鳥越橋の際きわにあつたということです。甚内が鳥越橋でおしおき処刑になる最後の時の言葉に、瘡おこりさえ患わなければ、召捕おられるようなことはなかつたのだ、我れ死すとも魂魄こんぱくをこの土どに留め、永く瘡に悩む人を助けんと言ひながら、槍に貫かれて死んだということ、それから甚内様に病氣平癒を祈り出す者が多くなつた。その願書には男女の別と年齢と、いつごろより患わが出したかということと、何卒この病氣癒させ給えという祈願と

を認め、したた上書うわがきには高坂様、或いは甚内様と記して奉る。病氣は瘡に限ったことはなく、ほかの病氣でも瘡と書いて願いさえすれば治る。願が満ちて病氣が癒った時は、鳥越橋から魚の干物と酒を河の中へ投げ込んでお礼参りをする。縁日は毎月の十二日で、例祭は八月十二日、甚内が処刑せられた日ということになつてゐる。

二人のいう、甚内様、永護様という変態な神様の縁起えんぎは、大よそこういうつたようなもので、二人は例の伯耆の安綱を坊主持ちにして、高尾の山の飯綱の社から、浅草鳥越まで行く間に、その名刀の処分をきめようとするのであります。

けれども、これは東海道の道筋などとは違つて、何を言うにも十里内外の道中ですから、二人の足では横町を走るくらいのものであるから、出し抜こうにも、出し抜くまいにも、あつけない

もので、江戸の市中へ入ってしまいました。

江戸の市中へ入って、まもなく二人の姿は昌平橋の袂たもとへ現われました。いつぞや貧窮組が起った時に、貧民が群集して、お粥かゆを煮て食べたところに、今日も人だかりがあります。その人だかりの真中に大きな万燈まんどろがあつて、その下で口上言いが拍子木を叩きながら頻しきりに口上を言っています。

### 安房の国

清澄の茂太郎は

幼い時に

父母に死に別れ……

口上言いが、甘いような、憐れつぽいような、一種異様な節で、歌ともつかず、口上ともつかぬことを言っていました。

が、ん、り、き、の、百、蔵、は、それを見ながら、ふと万燈の表を見る

と筆太に、

「清澄の茂太郎」

と書いてある右の方へ持つて行つて、

「両国橋女軽業大一座」

とあつたから、ちよつと妙な氣持になつてゐると、七兵衛が、

「百、ありや、お前の女房がやつてるらしいぜ」

「そうだなあ」

が、ん、り、き、も、なん、だ、か、ムズがゆいかおような面つきで万燈をな

がめてゐると七兵衛が、

「甚内様は、後廻しにして、両国へ行つてみようか」

「そうよなあ」

「久しぶりで会つてやりたかろう」

「そういうわけでもねえのだが、あいつがこうやつて、俺の方

に渡りをつけずに、花々しいことをやり出したとすると、ちつとばかり腑に落ちねえところがあるんだ」

「だって、札附きの無宿者のあとを追蒐おつかけて、いちいち相談をするというわけにもいかなかるうじやねえか」

「そりやそうだが、あいつの器量で、これだけのことをやり出したとすると、後立てがあるに違えねえ、あいつに相当の金を出してやろうという後立ては、まんざら色気のねえ奴とも思われねえんだ、そうだとすりや、どういう心持で、あいつがその御厚意を受けたか、その辺がちつと聞きものだ」

「こいつは、ちつとばかり嫉やける」

が、んりき、がムズがゆい面をしていると、七兵衛があざ笑いました。

その晩のことでありました。両国橋の女軽業もハネて、楽屋の真中に大柄などて、らを引っかけて立膝きせるをしながら、長い煙管きせるで煙草を輪に吹いているのは、一座の棟梁とうりょうのお角であります。

「わたしは、これから柳橋まで行つて来るから、あの子が帰つたらどこへも出さないでおくれ、お迎えがあつても、なんとか言つて断わつておくれ」

誰にともなく、こんなことを言いつけたが、それでもまだ落着いて煙草をのんでいて、立とうともしません。

傍に茂太郎がいなくて、ここにあの子と言つたのは、その茂太郎のことでありましょう。茂太郎が今宵もしかるべき客筋から招かれたから、出してやったあとで、お角は、こ

うしてひとりで、物案じをしているらしい。

「どうも、今日のお客は変だよ、後から行ってみようとは思ったけれど、それもおかしいから、ああはしてやったものの、なんとなく気が揉めるのはどうしたんだらう、行ってみようかしら。それも、あんまり腹を見られるようだし、そうかと言って、相手がどうも尋常のお客ではないらしいから、ほうっておいてもしや間違いが……間違いといったところで、相手がやつぱり女のお客だから、取って食おうというわけでもなからうけれど、なんだか、わたしや、今日に限って、あの子を人に取られてしまうような気がしてならない。柳橋の殿様へもお伺いしなければならぬんだが、それよりもあの子の方が気にかかる。といつて、あの子が帰ってからお伺いしたんじゃ、殿様に恐れ多いし……いやになっちまうね。稲ちゃん、稲ちゃん、そこにおいでなら、

ちよつと来ておくれ」

「はい」

幕帳まくばりで仕切つた楽屋の後ろから、かなり美人の部に属する女軽業の娘が面かおを出すと、

「あのね、茂太郎を呼んで下すつたという今日のお客様は、どんな人だったか、お前知つてるでしょうね」

「あの、棧敷さじきにおいでなさる時に、ちらりとお見かけ申しましたが、切髪でいらつしやるけれども、なかなか品のよい、美しいお方でございました」

「お前、御苦労だが、若い衆をつれて、ちよつと迎えに行つて来てくれないか、わたしはこれから外へ出かけるんだが、あの子が帰っていないと心配になるんだから、お客様の御機嫌を損ねないようにお話をして、早く帰していただくようにね」

「<sup>かしこ</sup>畏まりました」

「近いところだけれど、このごろは物騒だから気をつけてね」

お角は、わざわざ茂太郎を迎えにやっておいても、まだ何か心配が残っているらしく、柳橋へ行こうと言いいい、まだ煙草を吹かしながら、

「なんだか、その切髪のお部屋様らしいお方というが気にかか  
る」

と言いました。

茂太郎が多くの婦人客から可愛がられて、その席へ呼ばれるのは今に始まったことではないのに、今日のお客に限って、お角が留守の間に、楽屋のものをうまく籠絡ろうらくして、茂太郎を拉らっして行ったもののように思われてならない。何か特別に、茂太郎に野心があつて、物ずきな若い御隠居の美人が、誘惑を試みた

ように思われてならない。いつもならば、そんなに心配になることではないのに、前後の事情を聞いてみれば、おかしいことが多い。お角はそのことを、いろいろに思案していたが、やがて、荒つぽく火鉢の縁を叩いて煙管きせるを投げ出し、どてらを脱いで帯を締め直しました。ようやく、その柳橋の殿様とやらへ伺候する気になったものと見える。

お角が軽業小屋を出た時分に、雨が降り出していました。

下足番が蛇の目の傘を差しかけて、送つて行こうというのを、お角は断わって、傘だけを受取つて外へ出ました。

お角がこれから訪ねようとするのは、柳橋の船宿にいる駒井甚三郎もとの許であります。ついこの間、その界限で辻斬沙汰があつたところだけれど、まだ宵の口ではあるし、両国から柳橋まで、ほんの一足のところですから、お伴ともをつれなくつても心配では

ありません。

お角は派手な着物を着て、それに薄化粧さえしているようです。こうしてお角が柳橋に駒井を訪ねるのは、今に始まったことではありません、三日に上げず宵のうちに駒井を訪ねても、そんなに長話はしないで帰ります。駒井もまた、お角の訪ねて来ることを好まないではないらしい。ただ何のために、こうして、しげしげお角が駒井を訪ねて来るのだから、また駒井ほどの人が何用あつて、しばしば、お角のような女を近づけるのだから、その辺が、どうも腑に落ちないようです。そこで、もとは駒井の先代の家に仲間奉公をしていたというこの船宿の亭主と、おかみさんとは、その噂をして、お角が来るたびに小首を捻ひねつていたのであります。

駒井の殿様ほどの人が、あんな女を相手になさろうはずはな

いと思うけれども、そこは、あたりまえに考えてしまうわけにはゆかない。あれほどの殿様が、甲州をしくじつておいでになつたのも女のためであつた。その相手の女というのは、女もあるうに身分違いの女であつたということ、わずかに、その賤しい女一人のために、あれほどの地位を棒に振つて、半生涯を埋めてしまうような羽目に陥つておしまいになつたのが情けない。

お家柄なら、御器量なら、男ぶりなら、学問武芸なら、何として一つ不足のないあの殿様は、その上に世にも美しい奥方をお持ちでありながら、その奥方はお美しい上に、やんごとなき公卿様の姫君でいらせられるというお話であるのに、それが、好んで身分違いの女をお愛しなさるといふことこそ、恋は思案のほかである。えらいお方ほど、女にかけては脆いものか知らん。それとも駒井の殿様は、あんなお優しい御様子をしながら、

やっぱりい、かも、の食いでいらつしやるのかも知れない。そうして世の常の女では食い足りないで、好んでお角のような女をお求めになるのかも知れない、というようなことまで船宿の夫婦は想像してみましたけれど、まさか、どういふ御関係でございまずと聞いてみるわけにもゆかず、そのままにしておりました。

お角はまた、どんな心持で駒井甚三郎をしげしげと訪ねるの  
か知らん。そのしげしげと訪ねるうちにも、お角としては念の  
入り過ぎたほどに、おめかしをして、乳の下あたりの動悸どうきを押  
えながら、そわそわとして通う素振そぶりが、よつほどおかしいもの  
です。さりとしてこの女が、駒井甚三郎に恋をしかける女ではな  
い。また男ぶりに、ぽーうと打込むというような女でもない。  
だから、しげしげ駒井のところへ通うとしても、露骨に言つて  
しまえば、駒井の懐ろを当て込んで、その信用を取外とりはずすまいと

心がけているのでありません。

駒井甚三郎は落魄らくはくしたけれども、まだ大事を為すの準備として、相当の資金がいずれにか蓄えてあるはずである。ことによると、お角が両国橋へ旗揚げの資本も、駒井が所持金の一部を割いて貸し与えたのかも知れない。ただ、転ころんでもただは起きないお角が、駒井甚三郎の男ぶりに打込んで、これに入れ上げようとして通うものではなく、かえって駒井を利用するの意味で御機嫌を伺っているのだということだけは、どちらにもよくわかつてはいるはずです。

お角は蛇の目をさして、柳橋の袂へかかりました。

お角が柳橋の袂まで来ると、頬冠ほおかぶりをして、襟のかかった絆纏はんでんを着た遊び人体ていの男が、横合いから、ひよいと出て来て、いきなり、お角の差している傘の中へ飛び込んだから、お角も驚き

ました。

「何をするの」

「お角、久しぶりだな」

それは玄治店げんやだなの与三郎もどきの文句でありました。その文句

でお角が気がついて、

「おや、百さんじゃないか」

「うむ、百だよ」

と言いました。この頬冠りこそ、が、ん、り、き、の百蔵です。

「なんだつてお前、こんなところにいたの、両国へ訪ねて来ればいいじゃないか」

「両国へ訪ねて行つたんじゃ、バツの悪いことがあるから、ここに待ち合せていたんだ」

「雨の降るのに、傘もささないで」

「柳の下に、お前の来るのを、ぼんやりと待っていたんだ」

「わたしはこれから、ちよつとそこまで用足しに行つて来るから、お前さん小屋へ行くのがいやなら、そこいらで一杯やりながら待っていておくれ」

「そいづもいやだ、お前の行くところへ一緒に行きてえんだ、そうでなくつてお前、雨の降るのにこうして、柳の下に立ってられるものかな」

「だつて、わたしは、お前さんと一緒じゃ行かれないところへ行くんだから」

「だから、折入つてお伴ともが願いたいんだ、亭主と一緒にには行けねえところへ、相合傘あいあいがさで乗り込もうという寸法が、面白いじゃねえか」

「お前さん、何かい、やに気を廻しているね、わたしのこれから

行こうとするのは、そんなわけじゃありませんよ、後暗いことなんぞはありやしませんよ」

「誰もお前に後暗いことがあつたとは言わねえ、だから一緒に出かけて、先方のお方にもお目にかかつて、お前がいろいろお世話になるんならお世話になるように、俺の方からもお礼を申し上げておきてえのだ」

「あいにく、それがお前さんとは、ちつとばかり話の合わない人なんだから、お目にかかつたつて仕方がないよ」

「話が合うか合わないか、話してみなけりや判らねえや」

「だって、先方は殿様だもの」

「おや、殿様だつて？ どのどうした殿様だか知らねえが、お前が特別の御鼻<sup>ごびいき</sup>にあずかつている殿様へ、おいらがお礼を申し上げて悪かろう道理はなかるうじゃねえか」

「それにしたつてお前、あの殿様とお前さんとは、あんまりけた桁が違い過ぎるからね」

「なるほど、このが、ん、り、き、と、何とやらの殿様とは、あんまり桁が違い過ぎるけれど、女軽業の親方と駒井能登守とは、あんまり桁が違わねえのかい」

「まあお前さん、それを知っているの、駒井の殿様を御存じなの」

「ばかにするな、甲州勤番支配の時分から先刻御承知の殿様だ、鉄砲が大層お上手だそうだけれど、女にかけては根っから二本棒の殿様だ、身分違いのロクでもねえ女にひっかかって、あつたら家柄を棒に振ってしまった殿様なんだ。どこをどうしたか、それをこのごろお前めえが引っかけ物にしているというところが、いつまでが、ん、り、き、の耳へ入らずにいますと思つてゐるのだ。

そりや痩せても枯れても、もとは三千石の駒井能登守、お前の腕で絞つたら、まだずいぶん絞り甲斐もあるだろうが、そんな気のいい殿様を、お前のようないかもの、二度三度絞らせておいちや、見ても聞いてもいらねえ、お目にかかつて御意見を申し上げようと思つているのだ」

が、ん、り、き、は、こ、う、言、つ、て、歩、き、出、し、た、か、ら、お、角、も、仕、方、が、な、し、に、傘、を、さ、し、か、け、て、二、人、は、相、合、傘、の、形、で、柳、橋、を、渡、り、ま、し、た、。

が、ん、り、き、か、ら、こ、う、言、つ、て、せ、が、ま、れ、る、と、お、角、も、困、じ、果、て、て、し、ま、い、ま、す、。

無論、いかげんのお座なりでござまかした<sup>お</sup>了せる相手ではなし、そうかと言つて、駒井甚三郎に引合わせようなどは以てのほかです。会わせないと云えば、こだわりをつけるに相違ない。お角も、この男にだけは尻尾を押えられていると見えて、しょう

ことなしに相合傘あいあいがさで歩き出してはみたものの、橋を渡りきつてしまえば甚三郎の宿は近いのですから、先へ進む気になれませんか。

「行つても仕方がないから帰りましょうよ、小屋へ帰つて、ゆつくり話をしようじゃありませんか」

こう言つて賺すかしてみただけども、無論おいそれと応ずる男ではありません。

そこで二人は、橋の欄干に添うて、押問答をしております。

この時、他の一方の橋の袂たもとから、また一組の相合傘が現われました。その相合傘は、こちらの相合傘とはだいぶ趣ことを異にしています。こちらは蛇の目の傘であるのに、あちらのは買立ての番傘でありました。一本の傘の下に二人の人が、雨を凌しのいでやつて来るのは同じこと。またその二人が、一方が男であり、一

方が女であることも同じだが、あちらのは、女の人がお高祖頭巾こそずきんで覆面かおをしているのに、男の方は素面すめんです。お高祖頭巾の女の面かおつきはわからないけれども、素面すめんでいる男の方は、一目見てもそれとわかる宇治山田の米友に紛れもありません。

米友はあの通り背が低いのに、お高祖頭巾の女は人並よりこころもち高いくらいですから、この相合傘はあまり釣合いが取れません。第一、宇治山田の米友というのが相合傘の柄ではありません。お高祖頭巾の女がその番傘をかざして、米友は気の毒そうに例の杖をついて、その傘の下に歩いて来ましたが、柳橋を渡りかかると、怪訝けげんな目をして橋の上をながめます。それから神田川の水の流れを、何か思案ありげにながめて渡ります。「ね、あの晩、この橋の上に立っていた人は、わたしはたしかに見たことのある人のように思いました」

お高祖頭巾が米友に向つてこう言いました。このお高祖頭巾の女というのが、藤原のお銀様であることは申すまでもありません。お銀様がそう言ったから米友は領うなずいて、

「そう言われると、おいらもなんだか見たことのある人のような心持がするんだ」

米友も、以前、舟を漕いで来たあたりを見下ろして返事をしました。この不釣合いな相合傘が、橋の半ばへ進んで来た時に、「御免なさい」

橋の欄干に立ちもやつて押問答していた一方の相合傘とすれ違いになつて、傘と傘とが軋きしり合いましたから、どちらでも御免なさいと言いました。

御免なさいと言いながら、傘を傾けておたがいに面おもてを見合わすと、

「おや、お前は米友じゃない？ 友さんじゃないか」

と言つたのはお角の声であります。そう言われて米友はギョツとしました。前にも言う通り、この女軽業の親方お角だけが、宇治山田の米友にとつては唯一の苦手であります。かなり大胆不敵の米友も、お角に一言いわれると身がすく、むようになるのは、前世の宿縁というものか知らん。

「あッ」

と言つて、さすがの米友が舌を捲いて、面かおの色を変えてたちどまりました。

「まあ、久しぶりじゃないか、米友さん、お前はここのごろどこにいるの」

舌を捲いている米友をお角が発見したのは、おそらく甲斐の国石和いさわの袖切坂以来のことでありましょう。あの時にお角は、

米友を発見して、転んではならない袖切坂の途中で転びました。

その時にお角は、鼻緒の切れた下駄を藪やぶの中へ抛ほうり込んで、さも口惜くやしそうに、「友さん、わたしがここで転んだことを、誰にも言つちやいけないよ」と念を押しました。その時に米友は、「うむ」と固く承知すると、お角はなお、「言うて承知しないよ」と馬鹿念ばかねんを押しました。そこで米友は再び、「うむ」と力を入れて返事をする、お角は、「けれども、お前はキット言うよ、お前の口から、このことがばれるにきまつているよ、もしそういうことがあつた時は、わたしはお前をただは置かない……ただは置かないと言つても、わたしよりお前の方が強いんだから、してみると、わたしはいつかお前の手にかかつて殺される時があるんだろう、どうもそう思われてならない」その意味がわからないから米友は、「何、何を言つてるんだ」と眼を円くすると、

「転んだところを見た人と見られた人が、もし間違つても男と女であつた時は、どつちかその片一方が、片一方の命をとるんですとさ」

お角がこんなことを言つて自暴やけのような気味であつたことを米友は、もう忘れてしまつてゐるに相違ない。しかし、お角の方では、多分それを思い出しているに相違ない。

ここでめぐり会つた米友をおかしいと思うと共に、それと相合傘をしていたお高祖頭巾こそずきんの女の人を、お角は不審に思わないわけにはゆきません。ところが、お高祖頭巾の女の方では、さいぜんから、ちゃんと心得たもので、頭巾の中からお角の面を見据えるようにしていましたので、お角もなんだか気味が悪く思いました。

「おや、あなたは……」

今度はたしかにお角の方がギョツとしました。お角に呼び留められた米友は、てんで気を吞まれてしまったが、この覆面の女に見据えられたお角は、物怪ものけにつかれたように立ち竦すくんだのは稀れに見る光景であります。

米友にとってはお角が苦手であるように、お角にとってはお銀様が苦手であります。米友は、お角から言葉をかけられても頓とみには返事ができません。お角は、お銀様に正面から見据えられて、しどろもどろです。

この三スクミの体ていを傍から見ているが、んり、きの百蔵は、委細を知らないから、なんとも口出しがならず、川の流れを横目に見ていました。

「お角さん、お前さんはどこへ行くの」  
と言ったのはお銀様であります。

「はい、そこまで、ちよつと用足しに……」

お角としては怪しいほど神妙に返事をしました。

「お連れがおありなさるの」

「いいえ……」

と言つたけれども、それは甚だまずい言抜けに過ぎません。

「もし、御用がないのなら済みませんが、そこまで、わたしと一緒に来て下さいませんか」

お銀様からこう言われたのが、この場合、お角にとっては勿怪もつけの幸いであつたらしく、

「はい、お伴ともを致しましょう」

と言つてしまいました。それで納まらないが、んり、きの百蔵が向き直るとお角は、それにカブせるように、

「百蔵さん、このお方は、もと、わたしのお世話になつた御主

人様のお嬢様ですから、わたしはちよつと御一緒に行つて参ります、それで今晚はあそこへ行くのはやめましよう、直ぐに帰りますから、両国へ行つて待つていて下さい。友さん、お前も両国へおいで」

そこで相合傘が、また二つにわかれしました。

お角のさして来た蛇の目の傘には、お銀様が入り、お銀様のさしていた番傘を米友に渡すと、米友は、それを受取つて不承不承に、が、ん、り、き、の、上、へ、差、し、か、け、ま、す。

蛇の目の傘は両女を容れたまま、もと来た方へ動き出したから、こうなつてみるとが、ん、り、き、も、それを追蒐おいけて袂かを引くのもみつともないとあきらめたのか、だまつて見送つていただけでした。

「や、こりや、どうも兄さん有難う」

ようやくのことで、番傘を差しかけてくれている米友の好意に気がついてみると、がんりきも動き出さなければなりません。動き出したところで今度は蛇の目の傘ではなく、番傘で、そうして相合傘の主も、得えたい体の知れぬ河童かっぱのような男だから、多少うんざりしないわけにはゆかない。しかしながら、がんりきはさすがに如才じょさいないところがあるから、金助のように見てくれだけで頭ごなしに米友を侮辱するようなことはありません。

「兄さん、お前さんは、どつちへおいでなさるんだね。わたしや、そこいらで、ちよつと一杯やりたいんだが、なんなら附合つておくんなさいな」

と優しく米友を誘いました。

「おいらは、そうしてもいられねえんだ、一杯やるんならおめえひとりでやんねえ、傘はおめえに貸してやらあ」

こう言つて米友に番傘を差しつけられたから、さすがのが、  
りきも苦笑いをしないわけにはゆきません。せつかくの相合傘  
の相手が振替えられた上に、その振替えられた相手から匆はねら  
れる始末だから、いやはや、色男も台なしという体ていでありまし  
た。そうして詮せん方なく苦笑いをしながら、

「それでも兄さん、わたしが傘を借りてしまつたら、お前さん  
は濡れるんだらう」

「おいらなんぞは濡れたつていいやな、土団子つちだんごじゃあるめえし」  
米友がこう言いました。米友が土団子じゃあるめえしと言つ  
たのは、洒落しやれでも警句でもないだけに、おかしいところがあり  
ます。どちらかと言えば米友は、土団子のような人間でありま  
すから、が、ん、りきもおかしく思いながら、

「土団子でねえにしても、お前さんを濡らしちや気の毒だ。そ

れじゃあ、わたしはそこいらで一杯やることにしますからね、兄さん、御苦労だが、そこまで送ってやっておくんなさいな。

ナニ、どつちでもかまわねえんだ、あいつらが両国の方へ行つたから、同じ方へ行くのも癩しやくだ、代地だいちの方へ行きましようよ」

こう言つてが、んりきが、橋の上を歩き出そうとすると、

「遠慮をしなくつてもいいやな、傘は貸して上げるから、一人で勝手なところへ行きな、おいらは送つて行くのは嫌だよ」

「だって、兄さん、濡れたつて詰らねえじゃねえか」

「いいよ、おいらは濡れたつてかまわねえんだ、ズブ濡れになつた方が、気持がいくらいなものだ」

「やけ自暴なことを言いつこなし」

「自暴なんぞを言やしねえ」

「そんなことを言わずに、おとなしく相合傘という寸法で行こ

うじゃねえか。一人で差したる傘なれば、片袖濡れようはずがない、なんぞは乙なもんだが、フラれて、自暴で、ズブ濡れなんぞは気が利かねえ、兄さん、相合傘とやりましようよ」

が、ん、り、き、は強<sup>し</sup>いて米友を、相合傘に捲<sup>し</sup>き込もうとするけれども、米友は頑として聞かない。ぐずぐずしていると傘を抛りつけて行つてしまひそうですから、相合傘の押売りなんぞは気の利かないことこの上なしだと、が、ん、り、き、も呆<sup>あき</sup>れ返つてもてあましている途端に、フイと氣のついたことがありました。

「おい、兄さん、ちよつと待つてくれ」

米友を呼び留めたけれども、米友は矢も楯も堪らなくなつていました。開いたなりの傘をそこへ抛り出して、勝手にしやがれという態度で、跛<sup>びっこ</sup>足の足を引きずつて、雨の中をさつきと駈け出してしまいます。

が、ん、り、き、は、い、よ、い、よ、テ、レ、た、も、の、で、苦、笑、い、が、止、ま、ら、ず、ぜ  
ひに及ばない面かおをして、橋の上でグルグル廻っている番傘を片  
手で取押えて肩にかけ、米友の走り去った方面を見送つていま  
したが、やがて、あきらめて、橋を渡つて代地あたりの闇に消  
えてしまいました。この時分のこと、例の船宿の二階で、書き  
ものをしながら、お角の来るのを待つていた駒井甚三郎は、約  
束の時間に至つてもお角の姿が見えないから、なお暫く待つて  
いたけれども、音沙汰がありません。そこで、書きものを始末  
をして立ち上ると、緞子どんすの馬乗袴うまのりばかまを穿き、筒袖の羅紗らしやの羽織を  
引っかけ、大小を引寄せて、壁にかけてあつた大塗笠おおぬりがさを取卸し  
ました。これからいずれへか出かけて行くものと見えます。出  
かける前に、お角に会つておきたい用件があるのでしよう、も  
しやと再び机の前に坐り、火鉢の上に手をかざして、更に消息

を待っているもののようにでしたが、お角の姿は見えないし、こ  
とわりの使もやって来ないから、もうあきらめたものと見えて、  
大小を取って手挟たばさみました。駒井甚三郎は、近々ちかぢかに房州へ帰ら  
なければならぬ。このほど江戸へ上つて来たのは、洲崎すのさきの海岸  
で船を造らんがために、その費用と、材料と、大工とを求めん  
がために、来たものであることは申すまでもありません。お角  
も茂太郎も、それと一緒にや遣つて来たものの、駒井にとつて  
は、それは偶然の道連れに過ぎないが、お角や茂太郎にとつて  
は、駒井甚三郎は再生の恩人であります。駒井の役に立つこと  
ならば、何を置いてもつとめなければならぬし、もし甚三郎  
が急に立つものとするれば、やはり何を置いても見送らなければ  
ならぬはずです。

机竜之助は、あの晩から再びみろくじ弥勒寺の長屋へは帰りませんでした。染井の化物屋敷へも姿を見せた形跡はありません。練塀ねりべい小路の湯屋を出たのはたしかに、その人であつたに相違ないけれど、早駕籠はやかごの行先はわかりません。

けれども、天にかくれようはずもなし、地にくぐろう術すべもないから、日ならずどこかへ姿を現わすにはきまつています。姿を現わさないにしても、いずれにか志す所の安住の地があればこそ、駕籠を備うたものであろう。駕籠屋とても、めくら滅法界に人を載せて走るといはずはありません。その落着くところと、与えらるる酒料さかての胸算用を度外にして、物好きに人を載せて走るといふことはありません。駕籠屋をつきとめて見さえ

すれば、大概はわかることではありますが、その駕籠屋が朦朧もうろうに  
ひとしいもので、いずれの町内から運んで来て、いずれへ向つ  
て走ったか、それを尋ねると煙の如くになつてしまします。さ  
りとて今更、甲州でもあるまいし、神尾主膳をたよつて行くで  
もなし、宇治山田の米友に介抱されるでもなし、明るい日は一  
寸も独り歩きのできない身になつて、その昔のように、鈴鹿峠  
を越えて、上方かみがたの動乱の渦に捲き込まれようとする勇氣もなか  
ろうし、よし勇氣があつたにしたところが身体が許さないし、  
今は京都で威勢を逞たくましうしている、かの新撰組の手が江戸へ舞  
い戻つてでも来るようなら、そのうちにはおのずから竜之助を  
援護する者も出て来ようけれど、今のところ、そんなあてはな  
し、早駕籠で飛ばしてどこへどう落着こうとするのだから、その  
見当は、どうもわかり兼ねます。それでも、お銀様との間に意

志の疏通が出来ているならば、どこかで謀しめし合わせて二人で身を隠すものとも思われるが、お銀様は、あれからああして、米友を案内にして心当りを探しているくらいだから、ここ暫く、二人の間の縁えにしの糸が切れていると見なければなりません。そうしてみると、机竜之助の落ち行く先はいよいよ想像がつかなくなります。

いろいろ思いめぐらしてみると、思い当るところが、たった一つあるにはある。机竜之助には一人の男の子があつたはずで、その名は郁太郎といって、それを養っているのが水車番の与八であることは、もう久しいものであります。そう言ってみればなるほど、急に里心がついて、我が子に逢つてみたくなつたかも知れない。紀伊の国竜神の奥においても、そのことを見えぬ眼の夢に見て、血の涙をこぼしたことがあるはずです。甲斐の

国躑躅つっじヶ崎さきの古屋敷でも、峠を一つ越えて甲斐と武蔵の境を抜けさえすれば、そこにわが子の面影おもかげを見ることを、人に語つて涙を呑んだこともあるはずです。江戸へ着いて、いずれの時からそれを思い起して、帰心きしん矢の如きものあるべきは、情においても、理においても、当まさにしかるべきところがあるが、今では、もう義理にも人情にも泣こうという涙は涸かれて、ただただ血に渴く咽喉のどが拡大し、夜な夜な飽くまで人の血を貪り飲むの快味に我を忘れ、我を荒すさましめているに過ぎなからう。今時分、里心に駆ふるられて故郷へ帰つてみたつて、そこには何の興味もあるべきはずはない。興味はあるべきはずはないけれども、この際、何とはなしに帰りたくなつたものと見れば論はないが、肝腎の早駕籠は甲州の裏表の街道、いずれをも飛んで行く形勢はなく、意外千万のことには、その夜の大引け前になつて、竜之助

は杖をついて、吉原の大門内を忍びやかに歩いていました。

お銀様は吉原の廓くわわのうちを探していたけれど、その時分には竜之助はあまり吉原へは立入らなかつたようです。

今日この時分にここへ入り込んだ竜之助の姿は、あまり人目にはつきませんでした。茶屋から行こうとするのでもなく、以前神尾に連れられて行つた万字楼をさして行こうでもありません。茶屋と妓楼ぎろうの軒下を例の通り忍びやかに歩いて、巴屋ともえやの前へ来ると立ち止まりました。そこで、彼が巴屋の暖簾のれんを押分けて入ってしまったきり、出て来ないのは不思議です。

竜之助の姿が巴屋の暖簾の下で消えると、まもなく、

「おおすみ大隅さん、大隅さん」

と誰やらの呼ぶ声が聞えました。

「あいよ」

二階の一間で返事をしたのは、若い女の声であります。

「按摩さんが参りましたよ」

「あ、そうですか」

まもなく番新がそこへ連れ込んだのは、按摩さんとは言い条、決して机竜之助ではありません。廓くわへ出入りするあたりまえの按摩を、番新があたりまえに引張つて来たのに過ぎません。まもなく連れ込まれた按摩は、中でハタハタと肩の療治にかかりながら、世間話をはじめているのが、よく聞えます。

「万字楼しろたえの白妙さんは、かわいそうなことを致しました、ほんとお氣の毒でございますよ、まあ、なんて運が悪いことでしょう」

「万字楼しろたえの白妙さんが、どうかなすつたの」

「花魁おいらんはまだあれをお聞きになりませんか。柳原の土手で、あ

の花魁が殺されてしまいましたよ」

「え、柳原の土手で、あの白妙さんが殺されたって？ そりや嘘でしょう」

「いいえ、嘘なんぞは申しません、あの花魁が御鬘ごひいきの旦那にひかされて、矢の倉の親御さんのところへお帰りになったのは、つい近頃のことでごございましたが、お礼参りだといって柳原の、杉の森の稲荷様へ御参詣になった帰りに、やられてしまいました」

「へえ、ずいぶん、怖ろしいことを聞くものですね、まあ、どうしてそんなことになったのでしょうか」

「このごろは、江戸の市中へ辻斬ということが流行はやって、行当りバツタリに殺やられる人が何人あるか知れませんが、ほんの近いところですけども、一人で夜歩きをなされたのが、あの方の

落度おちどでございませぬ、その帰りにやられてしまつたんでござい  
ます。それでも、人の噂には、あれは辻斬ではなからうという  
ことでもございませぬ、辻斬ならば、スツパリと抜打ちかなにかに  
やるんでしようけれど、あの花魁えぐのは抉えぐつてあるんだそうです  
から、何か遺恨いしんがあつて、つまり恋の恨みだろうと言つて、専もつぱ  
らの評判でございませぬよ」

「いや、いや、そんな話は、もうよしましよ、今時、まだ恋  
の恨みで人を殺すような男があるのか知ら」

「そりゃ、ありますともさ、いつになつても、この道ばかりは  
別でございませぬからね」

按摩がうっかりこんなことを言つた時に、面かおがダラリと伸び  
て、口が耳まで裂けたようでしたから、この部屋にいる人が、み  
んなゾツとしました。

そこへ、白い羽二重を首に巻いて、十徳じつとくを着た、坊主頭ぼんずがしらの、かなりの年配な、品のよい人が不意に姿を現わし、障子をあける音もなしに入つて来たから、眼の見えない按摩のほかは、新造しんぞうも禿かむろも一度に狼狽ろうたいして、

「御前様ごぜんさま、ようこそ」

と言つて手をつきました。無論、当の花魁の大隅も、按摩をやめさせて居ずまいを直したものです。

ところが、どうでしょう、一度に狼狽して敬意を表した部屋中の人々が、

「おやおや」

と言つて面を見合わせたが、その面は、いずれも土のようになつていました。

「たしかに御前様がおいでになりましたね」

新造が言うと、

「ええ、たしかにおいでになりましたよ」

禿かむろが返事をしました。大隅もまた、

「まあ、どうしたのでしょうか」

呆あきれた上に、齒の根が合わなくなっているようです。取残さ  
れているのは按摩さんだけで、それは、きよとんとしてせつか  
くの話の腰も折られ、療治の手をやめさせられて、ほんとうに  
手持無沙汰で控えていました。

眼の見えるもの三人は、たしかに入つて来た、白羽二重を首  
に巻いて十徳を着た坊主頭を見たのです。だから、慇懃いんぎんに手を  
ついて、めいめいの頭まで下げたのに、下げた頭を上げた時分  
にはその客はいないのです。入つて来たのが、いかにも突然で  
あつたのに、消えてしまったのが、またあまりに突然です。前

の話があつて、ゾツとして寒がつているところへ、それですから、惣身そうみに水をかけられたような思いです。

前代の大隅に熱くなつて通つていた浅草のある寺院の住職がありました。法体では吉原へ通えないから、大抵は医者のような姿をして通つていました。この寺は裕福な寺であつて、この住職は大隅のためにはずいぶん金を使つたものです。大隅は表面じょうず上手にもてなしたけれど、内々はずいぶん悪辣あくらつな金の絞り方をなしたものと見えます。

「大隅さんは、あんなことをして罰が当たらないでしょうか、坊主を欺だますと七代祟たたるということだから、後生ごしょうが怖ろしい」と蔭口を言われたこともありましたが。しかし、いよいよ熱くなつていた坊さんは、それでもいつこゝう悔ゆる気色けしきがなく、ひきつづいて通つていました。

今も、心安く、すうつと大隅の部屋へ素通りしたものと思つていると、その姿が見えないというわけです。

「御前様のお面かおが真蒼まっさおでした」

禿が唇を顫ふるわして言いました。

「そう言えば、肩のところに血にじが滲んでいたようでした」  
それつきり、ものを言う者がありません。

「大隅さん、大隅さん」

やや暫くたつて障子の外から呼ぶ声で、一同が息を吹き返したようなものです。

「大隅さん、あなたをお名ざしのお客様をお通し申しました、御初ごしょかい会かとお聞きますと、そうではないとおっしゃいます、お馴染なじみかとおたずね申しても、そうではないとおっしゃいます、お一人で、ずっとお通りになりましたから、常のお客様と存じまし

たところが、お目が御不自由のようでございます、まあ、とにかく、お迎えにおいで下さいまし」

廊下に立って誰とも知らず女の声で、こう言う者があつたから、大隅は立ち上りました。

大隅を名ざしで来たのは竜之助であります。初会ということでもなし、馴染ということでもないから、多分、二度目でありましょう。してみれば、いつのまにか、一度はこの家の、この女と会つたことがあつたのに違いない。

しかしながら、ほんの訪ねて来たというだけで、二人は別れ別れになつてしまいました。大隅は自分の部屋へ来て、気分が悪いと言つて寝てしまいました。竜之助は疲労がはなはだしいと言つて、他のいずれかの部屋で寝てしまいました。

その間には、芸妓、ほうかん 帮間を揚げて盛んに騒いでいる客もあり

ます。一つの間、たつた一人で、しきりに義太夫を語っている者もあります。ひそひそと内密話ないしよばなしをしている者もあります。急がしそうに手紙を書いている人もありました。

竜之助の寝ているところへ、廊下を通つた番新が、そつとあけて、屏風の中を覗のぞいて、無事に寝ていることを確かめて安心して行つてしまいました。不寝番ねずのばんが油を差しに來た時も、ちよつと驚かされたけれども、やつぱり無事に眠つているものだから、安心して行つてしまいました。

寝返りを打つた途端に、右の手の傷がヒリリと痛んだために夢が破れた竜之助は、こんしんからの深い息をついて、痛む傷を押えようともせず、見えない眼を見開きました。さいぜん注つぎ足して行つた行燈あんどんのあかりが、明るくその網膜にうつつて來ました。夜が明けても眼が見えないし、昼になつても眼が見

えない。寝ても見えないし、起きても見えない。横になつても、縦になつても、見えない眼は、やつぱり見えない。

そもそも今夜、こうしてここへ、女の名を覚えていてやつて来たのも、裏を返すというような遊蕩気分あんこくに駆られて、やつて来たわけではあるまい。すべてが闇黒であつて、ただ人を斬つてみる瞬間だけに全身の血が逆流する。その時だけがこの男の人生の火花なのだから、恋とやら、情とやらいふものは、もう無いものになつてゐるはずです。

美しい女もないし、醜い女もない。恋せられたつて、愛せられたつて、それがどれだけでも骨身にこたえるものでもあるまい。金で買われる果敢はかない一夜の情に堪能たんのうして、それで慰められて行くなれば、何のたあいもない！

この男にとつて最も悲惨なのは、夜中に夢が破れることです。

その夜中に夢が破れた時、お銀様がいれば辛うじて、その裂け目をお銀様が繕うてくれました。宇治山田の米友と一緒にいた時は、その率直な一種の真実味が彼を慰めてくれました。それでも堪えきれない時に、一刀を帯びて人を斬りに出かける。

夜半に夢が破れた時には、その破れ目の傷口から、あらゆる過去が流れ出すのです。

与八に抱かれて行ったその子供が、雲に乗って天上へ舞いのぼると、その雲が火になつて燃え出すのは、堪え難い執念です。

今までの過去という過去が残りなく、そこへ並べられる最後に、その中へ現われるのは、いつも我が子の郁太郎の面影でありました。我が子の面影のみは払おうとして払うことができません。消そうとしても消すことができません。まさに親の因果が子に報うべき現世の地獄を、眼のあたりに見せらるることが

苦しくないではない。幾度か、故郷へ帰つて、その見えぬ眼に、わが子を抱いてのち死にたいと思ひ立つたけれども、今となつては、もうそんな心持はないらしい。

四隣あたり、人定まつた時に、過去のことと人と思ひ出すことが彼にとつては、ひたひたと四方から鉄壁で押えつけられるように苦しい。枕許の水差を引寄せて、水をグツと一口呑んだ時に、つい隣の部屋で、思いがけなく短笛たんできの音が起りました。

一口飲んだ水さえが、火となつて胸の中で燃えるかと思われ、る時に、短笛の音は、一味の涼風となつて胸に透とおるのです。

この真夜中に、隣の部屋で尺八を吹き出したものがあります。竜之助の持っている風流といえばおそらく、尺八がその唯一のものでありましょう。それは父の弾正が好んで吹いたものであります。それを学んだ竜之助は幼少の時から、それだけは心得

ておりました。伊勢から東海道を下る時に、たしか浜松までは、その一管の尺八に余音よいんをこめて旅をして来たはずです。浜松へ来て、お絹に逢つてから尺八を捨てました。少しく光明を得ていた眼が、再び無明むみょうの闇路やみじに帰つたのも、その時からでありました。

父から尺八を教えられる時に、竜之助はよく、尺八のいわれを聞かされたことであります。臨濟りんざいと普化ふげんじ禅師との挨拶の如きは、父が好んで人に語りもし、竜之助にも聞かせました。竜之助には、そのことがわかつたような、わからぬような心持がしていました。父が、よくすべてを禅味に持つて行くことを竜之助は、むしろ反感を懐いだいていました。普化禅師の物語を聞かされた時も、冷淡に聞き流してしまつたもので、尺八そのものの音色ねいろには、どうかすると我を忘れることもあるのが、自分なが

ら不思議と言えば不思議であります。

気のせいかな知らん、このとき隣室に吹いている尺八の音色が、又なく微妙なものに響きます。吹く人の技わざの拙つたなからぬことも、吹かれている尺八そのものの稀れなる名器であるらしいことも、竜之助は聞いて取ることができました。

吹いている曲は、たしかに「恋慕れんぼ」と思われる。

尺八を吹いているのは金伽羅童子こんがらどうじで、歌をうたっているのが制多伽童子せいたかどうじです。

二人は双子ふたごでありました。もとはしかるべきさむらいの子であつたとかいうことですが、みなし児いへになつてこの家に引取られ、実の名もあるにはあるが、この楼いへの者は二人を呼ぶに、金伽羅、制多伽の名を以てして、その実の名を呼ぶ者がありません。かつて素人芝居しろうとしばいがあつた時、この楼の主人が文覚勧進帳もんかくかんじんちやうの不

動明王に扮して、二人がその脇侍の二童子をつとめたところから、その名が起つたものであります。

二人は、ここの家に拾われて、掃きそ、うじや、庭の草取りや、追廻しをつとめていました。天性、二人は音楽が好きで、楼の人の学ぶのを見まね、聞まねに、さまざまの音曲を覚えています。人定まつた後に誰もいないような部屋を選んで、二人はこうして、笛を吹き、歌をうたうのが何よりの楽しみであります。

「ねえ、金伽羅さん、今度はすががきをおやりよ」  
とすすめたのは、歌をうたつていた制多伽であります。

「制多伽さん、このお隣には人がいるのよ」

金伽羅童子は、尺八を膝に置いて返事をしました。

「え、人がいるの、お隣に？」

「ええ、病氣なんでしょうよ、はじめのうちは大へん苦しがつ

ていたんですけれど、そのうちに癒つて寝てしまったようですから、それで、わたしは笛を吹き出しました。あんまり吹いたり、歌ったりして、せつかく寝た人を起すと悪いね」

「そう、でも、病気が癒つて寝てしまったんなら、いいでしょう、すががきをもう一つおやりよ、わたしは歌わないで、だまつて聞いているから」

「そうしましょうか」

やがて、また、しめやかな尺八の音が起りました。

「ウーホフ、ホウエヤ……」

こんどはすががきを始めました。淀みもなく三べん吹き返したすががきは、子供の歌口とは思われないほどに艶のあるものです。

「うまいね、金伽羅さん」

制多伽は、その短笛の音色に心から感心して賞<sup>ほ</sup>めると、賞められた金伽羅は無邪気に嬉しがつて、

「あんまり賞めないで頂戴、笛がいいんだよ、笛のせいで、よく吹けるんだね」

「金伽羅さん、こんどはおかぎきをおやりよ、ね、おかぎきをやって下さいな」

「やりましょうかね。では、おかぎきをやるから制多伽さん、お前、おうたいなさいな」

「あ、歌いましょう」

隣室の人を驚かすことを怖れて、歌わないと言った誓いを忘れて、二人はまた興に入<sup>い</sup>ってしまいました。

岡崎女郎衆

岡崎女郎衆

岡崎女郎衆はよい女郎衆

岡崎女郎衆はよい女郎衆

二人を知っている者は、それでよかろうけれども、二人を知らない者にとっては、壁を隔ててするその会話は、一種異様なものに聞えます。まことの金伽羅童子、制多伽童子がこの場へあまくだ天降りして、戯れ遊んでいるのではないかとさえ思われるほどに、世間ばなれがしています。

思いがけなくその幸福を受けたのは机竜之助でありました。

次の間で天童の戯れ遊ぶことによつて、この世からなる地獄の責めを免れました。「恋慕」を聞き、すががきを聞き、「岡崎女郎衆」を聞いているうちに、いつかは知らず恍然うっとりとして、夢とうつつの境に抱き込まれました。いいあんばいに、ほとんど一日を寝通して、その日の黄昏たそがれにこの家を出て行きました。駕籠かご

に乗つて帰る途中で、昨夜の金伽羅童子と制多伽童子のことが  
思い出され、あの尺八の音色が忘れられません。

歌の声の可憐なのが、耳許についているようです。

そこで、駕籠の中から、駕籠舁かごかきに向つて注文しました、

「尺八を一本求めたいが、新しいのでもよし、古いのでもかま  
わない」

やがて、その望みが叶うて、とある道具屋で、駕籠舁が一本  
の煤色すすいろした尺八を求めてくれました。

駕籠の中で竜之助は、その尺八の歌口をしめしました。そこ  
で、昨夜の「恋慕」が吹いてみたくなりました。金伽羅童子が  
吹いたためり、かりを、真似るともなく真似て吹いていると、自分  
ながらいい心持に吹けてたまりません。

三返しまで「恋慕」を吹いて、それから獅子踊の前歌にかか

りました。それを吹きはじめると、いよいよゆうべ聞いた金伽羅童子の冴さえた笛の音が、そのまま、この笛に乗り移ったかと思われるほどです。そうして、あの制多伽童子のそれに合せて、うたっている声まで、ありありと、そこにひびいて来るようです。

身をやつす、賤しずが思いを、夢ほど様さまに知らせたや、えい、そりや、夢ほど様に知らせたや……

自分の吹いている尺八と、金伽羅童子の尺八と、制多伽童子の歌とが全く一つであつて、二つとも、三つとも思われません。浅ましや、賤が身は、ただ一夜で落ちて、名を流す、えい、そりや、一夜で落ちて名をながす……

あまり面白いので、

ヤリ、ヤリ、ヒヒ、ヤリエウホフ

と吹いて行くと、

それとても苦しいござらぬ、若いが一たびあるにこそ、えい、そりゃ、枯木で花が咲くにこそ……

どうしてこんなに面白いのだからわからない。自分で吹いて、自分の音色に聞き惚れていると、金の鈴を振るような制多伽童子の音声が、常住不断に耳もとで鳴りひびいています。心なき駕籠屋も、心して駕籠を揺れないように昇かっいで行くものらしい。

鎌倉の御所のお庭で、十七小女郎がしゃくを取る、えい、そりゃ、十七小女郎がしゃくをとる……

しゃくをとるはいいけれど、いったい、この駕籠はどこまでやるつもりだ。

お角があゝの晩、おそく両国の小屋へ歸つて来た時分に、まだ茂太郎が歸つていませんでしたから嚇からとしました。

小屋の者どもを叱りつけて、迎えにやっただけでも、そのお客はとうに歸つてしまつたとのこと。お角が、むしやくしやに腹を立てたのは無理がありません。こうなつては、たしかにかどわかされたと見るよりほかはない。大切だいじの大切の一枚看板を外されては、明日からの人気にさわる。人気よりも、損得よりも、出し抜かれたことがお角としては口惜くしい。ことに相手が女であるとのこと、しかるべき切髪の、まだ水々しい女であつたということが癪とにさわつてたまらない。その女は若党らしい男をお伴ともにしていて、茂太郎を連れ出して、船で柳橋の方へ乗り出したということです。負けな気性のお角を、それと知つ

てしたとか、知らずにした悪戯いたずらか、こればかりは容赦ができないと、お角は齒嚙みをして口惜しがりました。

朝になると、染井のお屋敷から参りましたという使の者が、

「へえ、御免下さいまし、染井のお屋敷から、こちらの太夫元へお言伝ことづけがありました、というのはほかじゃございません、こちらの小屋に出ておいでなさる茂太郎さんというのが、どうしたもののやら、昨晚、迷児まよいごになつて、染井のお屋敷のお絹様をたよつておいでになつたそうでございます、お絹様も、不憫ふびんに思召して、昨晚はあれへお泊め申して、よくよく事情をお聞き申してみまするといと、両国の女軽業おんなかるわざの一座に出ておいでなさるといふことですから、こちらの太夫元に、もしお心当りがございましたら、早速お引取りにおいで下さるようにと、こういう使の趣で、早々とやつて参りました」

それを聞いたお角が、夜具を匆<sup>は</sup>ねのけて、

「いずれ御挨拶を申し上げますから、帰って下さい」

使の者は、ニヤリと笑って帰りました。

なんというばかばかしいことだろう、すっかりあの女に鼻毛を讀まれてしまった、どうしたらこの仇<sup>かたき</sup>が打てるだろうと齒ぎしりをしました。ほんとうにそうです。お角として、これから染井の屋敷へ出かけて、あの子を引取りに参りましたと言って、お絹の前へ手が突けるものか、突けないものか。さりとて引取りに行かなければ、向うは、茂太郎を人質に取って、これ見よがしのおもちゃにするにはきまっています。第一、あの呼び物がなくなつては、今日からの一座も打てないじゃないか。お絹という女は虫唾<sup>むしず</sup>の走るほどキザな奴だ、嘔んで吐き出してやりたいほどイヤな奴だと、お角は腹が煮えくり返ってたまりません。

ブンブンして弟子たちに当り散らしているところへ、

「お早う、親方はおいでか」

と言つて、やつて来たのが七兵衛であります。

ここへ七兵衛が来合させたことは、お角にとつては仏様でありました。口惜くやしまぎれに七兵衛に向つてこのことを語り出すと、七兵衛が面白がつて、

「そいつは面白い、そういうふうには仕かけられたんでは、こつちもそのつもりで喧嘩を買わなくつちやならねえ。しかしお角さん、お前がムカツ腹でどなり込んで行つた日には先方の思う壺だ、なんとかいい知恵はねえものかなあ」

七兵衛が面白半分はんぶんに頭をひねつて、小膝をぽんと打ち、

「いい知恵が一つ湧いて来た、それをお前さんに授けるから、上手にやつてごらんさい。その知恵というのはこういうわけ

なんだ、当人のお絹さんへぶつかつちやいけないよ、あれはたかをくくつたように見せかけておいて、搦手からめてから、神尾の大將を責めるんだね。その責道具というのはこういう仕組みにするといい、まず、神尾の殿様へ使を立てて、このたび、ぜひ殿様にお目ききを願いたい掘出し物が出ましたとこう申し上げるんだ、それは何だと来る、お腰の物でございませす、刀でございませすとこう申し上げます、刀は誰の作だとお言いなさるにきまつている、それはほかではございませす、伯耆ほうぎの安綱でございませすと申し上げますと、きつと神尾の殿様の眼の色が変るに違いない、そこを付け込んで……ところで、その伯耆の安綱は、もともと神尾の殿様のお持物でございませすから、決して代金をいただこうとは存じませすんが、お言葉に甘えまして、ただ一品ひとしなの望みがございます、その一品と申しますのは、お絹様のお手許に

おいでなさる子供を、決してお絹様のお手からいたただこうとは存じませぬ、殿様のお手ずから……こんなことに持ちかけてござらん」

それをお角は大喜びで、ことごと悉く吞込んでしまいました。

七兵衛は、お角に知恵を授けてから、持つて来た箱入りの品物を手渡ししました。これが伯耆の安綱でありましょう。この時の安綱は、まだ鳥越の甚内明神へは納めないであつたものと見えます。甚内様へ納める代りに、お角の手に預けて、その後幕を見ようともしない七兵衛は、この小屋を立ち出でてどこへ行くかと思れば、品川へ出て、東海道を真一文字に走せ上りはます。

お松が、ひとりで気を揉もんでいるのみではなく、宇津木兵馬のこの頃は、誰が見ても変つてきたことがわかります。

第一は金銭に困っていること、第二は外へ泊つて帰ることが多いこと、この二つは近來になつて、ことさらに眼に立つようになりました。

それを、誰よりもいちばん早く見て取つたから、お松の気を揉むのは無理のない話です。

宇津木兵馬はこのごろ、吉原通いが面白くなりました。

あの時のように、東雲しのめと二人で碁を打っているだけでは納まらなくなりました。東雲が勤め気を離れて兵馬を可愛がるようになる、兵馬の心が漸く熱くなつてゆきました。

兵馬の傍にはお松という者もあり、お君のような美しい女も

いるのに、兵馬はそれに心を取られることがありませんでした。京都にいた時も、新撰組の連中と島原界限にずいぶん出入りもしたけれども、ついで、その道に溺れるということがありませんでしたのに、ここへ来て東雲に打込むようになったのは、全く思案のほかと言わなければなりません。

人間が純良であるだけに、打込むことが深いと見え、女は商売柄、いくらかの余裕もあり、手管てくだがあつても、兵馬は突きつめた心で、その言うことの全部を信用してしまいます。生一本きいっほんに打込むようになると、自分が愛するだけ、他から愛してもらわなければ満足ができないものになつてみると、相手はこの上もない大敵であります。幾人の男にも自在に許すことのできる立場にいる女を、恋の相手として持つことほど、気の揉めることとはいいはずです。落ちて行くところは、他人には指一本もさ

させずに、己おのれの一人の愛情で包んでしまわなければならぬ  
ということだが、それをするには、この女を身み請うけして、生涯  
を保証するということが第一の問題になつてゐるけれど、それ  
は兵馬の力では覚束おぼつかないことで、女もまたそれを兵馬には期待  
してゐないのです。もしそんな場合に立至れば、兵馬でなくて  
もほかに心当りの客は、いくらもありそうなものです。今のと  
ころ、女は兵馬を可愛がり可愛がられて、勤め気を離れてゐる  
というだけの気分ですけれども、兵馬には、もつと突きつめて、  
「世の中は金と女が敵かたきなり、早く敵にめぐり逢いたし」——いつ  
ぞや辻まくら講ら積らで聞いた冒頭の歌が、ひしひしと迫つて来るよう  
です。

兵馬に浴びせていた可愛ゆい言葉を、兵馬が去ればまたほかの  
人に惜気もなく浴びせる。兵馬を可愛がった情けを、また今宵こよひ

はほかの人に許してしまうのだ。さりとては、あんまり浅ましいと兵馬は帰りがけに、泣きたいほどに悶もだえました。

この苦痛に翻ほんろう弄されて、へとへとになつて相生町の老女の家へ帰つて見ると、自分の部屋に人が一人いて、無遠慮に兵馬の机へ寄りかかつて物を書いています。

「おお南条殿、いつお帰りになりました」

それは南条力でありました。

「やあ宇津木君、どこへ行つていた」

どこへ行つていたと言われた兵馬は、

「つい、そこまで」

と勢いのない返事です。

「君、面かおの色がよくないぞ」

南条はその爛らんらん々たる眼で、兵馬の面をジロリと見て、

「君が意氣銷沈いきしょうちんしていると娘たちが心配する、それに君、あまり外泊はせん方がよろしいぞ」

「……………」

兵馬はグツと詰まりました。

その時に南条力は、書きかけていた筆をさしおいて、膝を兵馬の方に向き直らせ、

「君のことだから、そうばかげたこともすまいけれど、はたで見ているものは相当に気を揉むらしい。気を揉ませぬようにしてやってくれよ、周囲まわりの者に気を揉ませるのがいちばん毒じゃ」

南条は光る眼をすずしくしてこう言いました。その言葉の節々ふしふしが何もかも心得ているもののように、真綿で首を締められるように苦しくもあるが、この人だけに頼もしいところもあります。

思案に余った上、兵馬はついに今の胸の中を、南条力に向つ

て打明けました。

それを聞いていた南条力は、

「してみると、その気の毒な女を救うてやりたいが金が無いということに帰するのじゃな。ぐずぐずしていれば他人が引き抜いて持つて行くかも知れぬという怖れおそもあるのじゃな。ともかくも傾城けいせい一人を身請けするというからには、相当の金がいるはずである、よほど遊んだ金を持つている奴でなければできないことじゃ。宇津木君、君がそんなことに関係したのは柄ではない、よろしく見殺しにするに越したことはないのだが、君もここまで切り出して拙者に相談を打つからには、退引のつびきならぬ義理もあるのだろう、乗りかかった船で、ぜひに及ばぬ羽目になっているのだろう、ここは一番、拙者が肌をぬいでやろうかな」  
こう言つて莞爾かんじとして笑いました。兵馬にとつてはこの一言

が頼もしいような、擦くすくつたいような感じがしました。けれども、冗談じょうだんにしろこの男が一肌ぬいでやろうと提言してくれたことは、非常なる心強きで、思わず息がはずむと、

「ところで、その傾城を身請けして、いったい当人はどうするつもりじゃ、宿の女房にでも据えようとするのか、ただしは困い者にもしておこうというのか……まあいいわ、その辺はあらかじめ聞いておくべき必要はない。しかし拙者が肩を入れるとしてもだ、世間の金持の遊治郎ゆうやろうのするように、大金を抛ほうり出して、馬鹿を尽した引かせ方はせぬつもりじゃ。少々悪辣あくらつな手段をめぐらすつもりだが、結局は理窟りくつに合つて行くやり方をして見せる。つまり正面から掛け合つては、埒らちが明かない上に金がかかるから、それで悪辣の手段を講じておいて善後策を上手にやる。その悪辣の手段というのは、女を盗み出すことじゃ、女

を盗み出して、おやもと親許を説き落してそれから談判させるのだ。女を盗み出すことは拙者に任せるがよい、親許を説き落すことも、拙者に任せるがよい、それがために要する多少の金銭も、拙者が君に免じて立替えてもよろしいが、宇津木君、その交換条件という意味ではないが、君に一つ頼みたいことがある」と言いました。なるほど、やりそうなことである。南条ならば部下の二三の浪士を差向わして、女を盗み出させるくらいは朝飯前である。そうしておいて威力と和解と両方面から事を纏まとめることも、この男としては容易たやすい仕事であると思いました。それで兵馬は内心、非常に喜ばしく思つて、一も二もなく南条に信賴することに決めました。況いわんや南条から交換条件の意味であつてもなくても、頼むと言われて、それを躊躇する気なぞは更さらにありません。その時に南条がおもむろに言いました、

「君に頼みたいことというのは、拙者共の仕事をするのにとかく邪魔になる奴が一人ある、水戸の浪人で山崎讓と行って、鹿取流の棒にかけてはなかなかの達者だが、君の力でそいつをひとつ片づけてくれまいか」

意外にも南条の頼みというのは、宇津木兵馬の力によって、山崎讓を暗殺させようとのことでありませう。

その翌日の夕方になつて、兵馬が、ついまたふらふらと迷うて行く足どりは、吉原の方面であります。

昨夜もここで夜を明かして、今朝帰つたばかりであるのに、またしてもこの門をくぐらなければならぬように仕向けたのは誰が悪い。

兵馬が行つた時に東雲しののめにはほかの客があつて、兵馬は暫く待

たせられました。

兵馬は待たされることの、いつになく永いのを感じました。自分を待たせておいて、相手になつて今宵の客というのは何者であろうなどと考えました。

兵馬は実際、自分だけがこの女から可愛がられているつもりでいるのです。外の客はあつてもそれは勤めの習いで、その女との本当の愛情は二人の間にもみあるものだと思つて居るのです。ただ二人の間に不足なのは、金銭が有り余るというわけにゆかないだけのこと、他に金銭を山ほど積むお客が幾らあつたとて、二人がおたがいに可愛がるほどの愛情は湧いて来るものではないと思つて居るのです。遊女に迷うているものの自惚うぬぼれには誰もありそうな心持ですけれど、兵馬のはそれがいかにも初心うぶでした。しかしながら、自分がこうして待つて居る間に、

恋しい女が他の客の相手になつてゐるかと思えば、決していい気持はしません。

そのうちに東雲は、兵馬の許へ帰つて来ました。兵馬が悶えもだているほどに女は気にかけてはおりません。

「兵馬さん、わたしは近いうちに身請みうけをされるかも知れませんかよ」

と例の通り無邪気な愛嬌をたたえて言いました。

「エ、身請けをされる？ 誰に」

兵馬は足許から鳥の立つように驚かされました。

「そんなに吃驚びっくりなさらなくてもようございますよ、たとえ誰に身請けをされても、あなたとお会いすることのできないようなところへは参りませんから」

東雲の申しわけは、兵馬にとっては少しも申しわけになりま

せん。それでも女は、兵馬に充分の好意を示しているつもりで、  
逐一ちくいちその身請けの話というのを兵馬に向つて物語りました。

その話によると、日本橋辺のある大問屋の主人が、東雲を身  
請けをしようということに話が進んでいるのだそうです。今宵  
来ていたのはその客であろうと思われます。かなりの老人であ  
るとのことだが、この女を身請けしていずれかへかこ困つて置くつ  
もりらしい。女も、それをまんざらいやとは思つていないらしい。  
い。もとより色でも恋でもないが、その通りの老人だから、世  
話になつてゐるのも長いことではあるまいし、世話になつてい  
るうちも首尾さえすれば、どこでも兵馬を迎えて会うことができ  
るからというような都合で、かえつてこの廓さとにいるよりは勝  
手であるとの事情が唯一の理由となつてゐるようです。

兵馬はそれを聞いて甚だあきた慊らない。慊らないのみならず、い

まさら浅ましきを感じずにはおられません。人の力で自由にされたものに、そつと忍んで逢瀬おうせを楽しむというような気にはなれません。女がそれをあたりまえのことのように心得、むしろ手柄のように思っていることが、兵馬には齒痒はがゆくてたまりません。世話になつて身を任せる人と、可愛がつて楽しむ人とを區別して、平気でその間を取つて行くことは、この社会に生い立つた女には、ぜひもない觀念かと思えば浅ましい。かりそめにも二人の間に本当の愛情があるならば、この際その商人とやらの身請け話を断わらせて、自分の力で万事をしてやらなければ、女の面目を立ててやることも、自分の面目を立てることもできないのだと思われてたまりません。そこへ来ると、自分になければならないことは、右の大商人とやらが積んで身請けをしようとするだけの金を、自分も持つておらなければならぬこと、

そうでなければ南条力の力にたよつて、非常手段を執行するのみです。その時に兵馬は、南条から頼まれた義理合はずくの交換条件を思い起しました。

「どうあつてもこのままには置けない、よろしい、山崎讓を手にかけてよう」

ついに兵馬の決心がここまで上りつめ、多年の仇敵に向ける刃を、己れには罪も恨みもない、むしろ新撰組以来の誼みのある山崎讓に向けようとする兵馬の心には、天魔が魅入りました。

十三

竜之助を尋ねあぐんだお銀様は、染井の化物屋敷に帰つて、土蔵の二階で写経を始めています。針の先で自分の左の指を刺

して、そこから滲にじみ上る血汐を筆に染めて、法華經ほけきょうを序品じよぼんから写しはじめました。

今宵もまた、行燈の下で針を出して、左の人差指を刺しました。軟らかいふくらみへ針を立てると、ポツチリと茱萸ぐみのような血が湧いて来ます。お銀様はそのチクリとした痛みと共に湧いて出る血を、さもいい心持のように眺めてから仕事にかかります。

一カ所で足りない時は、一カ所を刺します。指の先では食い足りないと思つた時は、二の腕をまくり上げて針を立てます。どうかすると滲み上つた血が筆に余つて、ダラダラと腕を伝わつて流れることもありすけれど、お銀様は一向それを気にするではありません。こんなことをして、法華經二十八品ほんを写し終る時分には、お銀様の身体の血は一滴も無くなつてしまふかも

知れません。お銀様はそれを承知なんでしょう。それでも不意に書きかけた筆をさしおいて、梯子段はしごだんの上り口を見返るのは、どうも人が上つて来るような気配がして、トントンと梯子段の途中まで上つて来ては、そこで立ち止まっているものがあるように思われてならないからです。

昔、なにがしの聖ひじりが経文を写しはじめると、悪魔が苦しがつて邪魔に来たということでありますが、お銀様の発心ほっしんを妨げる悪魔がそこまで来て、経文の功力くりきで上へ昇れないのかも知れません。けれどもお銀様はそれを悪魔だとは思っておりません。たしかに梯子段の下まで来た人がそこで迷うて、二階まで上りきれないものだろうと思つています。その人というのは竜之助ではありません。竜之助とは全く別な人が下まで来て迷うて、ここへは上りきれないものだと思われてならないのです。お銀

様が写経の心願を起したのは、甲府の躑躅ヶ崎つっじ さきの古屋敷で、神尾主膳の残忍な欲望の犠牲となつて虐殺された幸内の菩提ぼだいを弔とむらわんがために始まつたのが、中ごろから、法文をうつす殊勝な心よりも、今はかえつて針で肉を刺す痛快味が、お銀様の身にこたえるようになりました。

「お嬢様、乱暴なことをなすつてはいけません」

「いいのよ」

幸内の抑える声が出たかと思うと、お銀様はいつそう反抗的に、針を二の腕へブツリと強く刺し込みました。

「あ、痛！」

自分ながら、あんまり強く刺し込み過ぎたのを驚いて、あわてて引き抜こうとしたはずみに、ポツリとその針がなかばから折れてしまいました。ただ折れたんならいいけれど、半分折れ

たのは肉の中に食い止まっついて、折れたその半分だけが自分の指先に残りました。そこで、さすがにお銀様もハツとしましたけれども、折れた半分の針はどうしても抜くことができません。口を当てて吸い取ろうとして空しく努力しました。幾度口を当てて吸い上げても、お銀様の舌に磁石の力が備わっていない以上は、肉の中に残った針を引き出すことはできないのです。できないのをお銀様は、自棄やけに吸い上げ吸い上げたものから、滲み出る血を、すっかり口中に吸い取りました。紙を開いて、それを吐き出して見ると、白紙の上に牡丹の花を散らしたように真赤な血です。

その時に人の気配がして、いつのまにかお銀様の背後うしろに立っていたのは、悪魔でもなければ、幸内でもありません。それは真蒼まっさおな面かおをした竜之助でありました。

お銀様はそれを見るや、

「お帰りあそばせ」

肉に食い入っている針のことは忘れて、喜び迎えました。

けれども竜之助は、お銀様が今まで何をしていたか、いま何をしたのだけを見る事ができませんから、いよいよ冷然たる上に冷然たるもので、じつと突立っているうちにも、いつもと違っているのは、右の手に一本の尺八を携えていることです。

この人は今まで、どこに何をしていたのだろうということはお銀様もまだ尋ねはしません。竜之助もまたそれを語ろうともしません。尺八と刀とを荒っぽくそこへ投げ出した竜之助は、手さぐりして夜具をはね返すと、その中へもぐり込んで寝てしまいました。お銀様は眼を凝らしてその挙動をながめていました。

その沈黙が暫く続いてから後、

「もし、あなた」

お銀様は枕許へ坐つて優しい言葉をかけました。この時も返事はありません。

「針がここへ刺さつて痛くてたまりません、誰か抜いて下さる方があればいいのに」

お銀様は独言ひとりごとを言いました。それでもなんともし挨拶がありません。

「半分、この肉の中へ折れ込んでしまつていますのですから、とても抜けやしませんね、どんな大力の人だつて、この針ばかりは抜き取ることはできやしません、抜かないでおくと、きつとここから肉が腐りはじめるでしょうよ、そうしているうちに、この手を切つてしまわなければ、身体中が腐つてしまひましょ

う、悪いことをしてしまいましたね」

お銀様は、独言を言つて、折れた針の創きずから滾々こんこんと湧き出す血汐を面白そうにながめています。竜之助はそれを聞いているのか聞いていないのか、相変らず死んだもののように寝込んでゐるのは、よくよく疲れきつたものと見えます。

「もし、あなた、私の身体からだが腐つてもいいのですか」

お銀様は物狂いでもしたように、荒らかに竜之助を夜着の上から揺ぶりました。それでも答えがありません。

「わたしはこうして血を絞つてお経を書いています、もし、わたしの身体がここから腐つていいのなら、わたしはもう、この血でお経を書きません、書きかけたお経は反古ほごにしてしまいます、この血で歌を書いてしまいます。あなた、お経を書いた方がいいでしょうか、それとも、歌を書いた方がいいでしょう

か。お経の有難味は、わたしにはまだ本当にわかりませんけれど、歌の面白味はどうやらわかっていきますから、いつそお経をやめて、歌にしたいのです。信心をはじめて途中でよすと、二倍の崇りたがあるということ、よく世間で言いますから、せつかく血で書きかけたお経をやめてしまえば、怖ろしい崇りがあるでしょう。法盛んなれば魔もまた盛んなりと何かの本に書いてありました、人が善心を起すと、きつと悪魔が片一方から妨げに来るそうです。この針の折れたのは、悪魔の仕業しわざにちがいないと思います、悪魔が針の形に化けて、お経を書くわたしの手の中に食い入りました。これが取れなければ、いくらお経を書いても駄目なんでしょう。もし抜けるものならこの針を抜いて下さいまし、わたしの身体が、悪魔のために腐ってゆくことがおいやならば、この針を抜いて下さいまし。あなた

は刀を使うことはお上手ですけれども、この短い針の折れ一本を、どうすることもできませんまい。おお痛いこと、ヒリヒリと痛みます。それでもこの痛みはなんだかい心持よ。もう一本、ここへ針を刺してみましよう、ようござんすか、あなた」

お銀様は、また一本の針をつまみ上げました。

その時に、土蔵の前の車井戸の輪がギーツと軋きしりました。誰か水を汲みに来たものと見えます。その車井戸がギーツと軋る音を聞くと、お銀様はゾツと身の毛をよだてました。お銀様は夜中に車井戸の軋る音を何よりも嫌います。その音がいやだから一旦はゾツとしたけれども、すぐにつまみ上げた第二本目の針を、なんの躊躇ちゆうちゆうなく、ブツリと左の二の腕へ刺し込みました。真紅な血汐の粒がホロホロと湧き上りました。お銀様はそれをチクリチクリと深く刺し込みます。その度毎に少しずつこたえ

てゆく痛みが、なんともいえない快感を与えるものらしくあります。

その時、車井戸の音がまたキリキリと鳴りました。それと同じにけたたましい物音が、井戸側のあたりで起りました。

「おのれ夜中、やちゆう人の住居をうかがうとは怪けしからん奴じゃ、誰に頼まれて何しに来た、それを言わぬと、この井戸の中へ投げ込むからそう思え、さあ、誰に頼まれて何しに来た、真直ぐに言え」

こう言つて罵ののつてゐるのは、ほかならぬ神尾主膳の声であります。しかも主膳が、酔っぱらつて酒乱になつてゐる時の声であります。その言うところを察すると、何か怪しの者を捉まえて、それを井戸側まで拉らし来きたつたものらしくあります。お銀様は針の手をとどめて耳を傾けると、

「いいえ、決してそういうわけではございませぬ、わたくしは怪しい者ではございませぬ、安房の国、清澄山から出て参りました弁信と申す盲目めくらでございませぬ、この通り眼が見えないものでございませぬ、清澄山からこのお江戸へ出て参りまして、ほかに稼業かぎようもございませぬから、少しばかり習い覚えしました平家琵琶を語つて、門附かどづけを致しておりますのでございませぬ。ごらんなさい、この通り袋に入れて背負つておりますのが、その平家琵琶でございませぬ。ほんとうに拙つたない業わざでございませぬから、収入みらいりも至つて少のうございませぬ、それでも皆様のお情けで、どうやらその日の暮しに差支えないだけは御報謝をいただきますんでございませぬ。ただいまは本所の報恩寺長屋に御厄介になつてゐるんでございませぬ、長屋でも皆様が、わたくしが眼が不自由なものでございませぬから、可愛がつて、いろいろと世話をして下

さいますんでございます」

こう言つて申しわけをしているのは、まだ年の若い、なるほど、名乗つてゐる通りの盲法師であるらしい声であります。ところがこの神妙な申しわけは、頭からケシ飛ばされてしまいました。

「黙れ、黙れ、嘘を言うな、貴様はニセ盲目めくらだ、誰かに頼まれてこの屋敷の様子を探りに来たものに相違ない、琵琶であれ、三味線であれ、門付けをして歩くほどの者が、この淋しい染井あたりへ、うろついてどうなるのじゃ、本所からここまで、どう間違つても盲目の独り歩きひとができる道ではない、真直ぐに白状せねば、この井戸の中へ生きながら叩き込むがどうじゃ」

これは主膳の声ではなく、福村の声のようです。彼等はこの盲法師を、どこまでも偽物にせものと信じてゐるらしい。何者かの頼み

を受けて、この化物屋敷の内状を探りに来たものと信じているらしい。

なるほど、そう疑えば疑われる余地がないではありません。門附けをして歩くと言いながら、田舎いなか同様なこの染井あたりへやって来るといふのもわからない。また盲目の身で、本所からここまで流して来たといふのも充分に不審の価値はあるのであります。それからまたこの化物屋敷の内状というものが、実際、嫌疑をかけられて探られた場合に、痛い所がないとは言えない住居であります。それを引捕えてきゆうめい糺明しようといふのは、主膳の仕業しわざとしては有り得べきことに違いないが、それにしても、生きながら井戸へ投げ込むというのはあまりに惨酷である。さすがにお銀様も、いい心持でそれを聞いているわけにはゆきません……ところで盲法師の申しわけは、少しく意想ほかの外であり

ました。

「それには仔細がございます、わたくしが、こんなところまで迷い込みましたのは、お屋敷の御様子をおうかがいしようなんて、そんなわけではございません、尺八の音色ねいろに聞き惚れて、ついついここまで参りましたのでございます。その仔細と申しますのは斯様かようでございます、わたくしが今晚、町を流して参りますと、ふと尺八の音が聞えました。わたくしは眼が見えませんから、音を聞くことが好きでございます。音には御承知の通り、宮商角徵羽きゆうしやうかくちゆうなどの幾通りもございます、また双調そうじゆう、盤渉調ばんしやちゆう、黄鐘調おうしきちゆうといったような調子もいろいろございます、それをわたくしは聞きわけるのが好きでございます。そのほかに音というものは、人の心持によって変化が起るものなんでございます。心に悲しみを持った時は、喜びの調べを吹きましても喜びには

響きません、心に楽しみを持ったときは、よし、悲しい音を吹きましても、その悲しみの中に喜びがあるのでございます、身体すこやかの壮健な時に吹く音と、病氣の前に吹く音とは違っております。失礼ながら、あなた方がお聞きになつては少しも違わないとおっしゃる音を、わたくしが聞けば違つたと申すことがございます。人に災わざわいの起る前にはその音を聞いていると、ひとりでにわかることがあるのでございます……それでございますから、わたくしは、気にかかる物の音色は、聞き過ごしに致すことはできないのでございます。そこで、今晚、聞きました尺八の音色は、近ごろ珍しいものでございました。わたくしはその音色を聞きながら、いろいろと想像を致しまして、つつい、こんなところまで、おあとを慕つて来たようなわけなんでございます。と申しますのは、その方は駕籠かごの中で尺八を吹いてお

いでになりましたんですが、わたくしと同じことに、眼の見えないお方なんでしょう。眼の見えない方の吹くのと、眼の見える方の吹くのは、私にはよくわかるのでございます。ところが、同じ眼の見えないに致しましても、そのお方の眼の見えないのと、私の見えないのは性質たちが違うんでございますね。わたくしの眼は、全くつぶれてしまった眼でございますが、その方は、どうかするとあきます、再び眼があくべきはずのもの、あかせて上げることができないのでございます。それですから、わたくしの眼は、全く闇の中へ落ちきった眼でございませけれど、そのお方は、天にも登らず、闇にも落ちない業わざにからまれた眼でございます。それに、わたくしが、どうして方も不思議でたまらないと思いますのは、前に、わたくしはその方と一度、逢ったことがあるんでございます。どうしてそれが

わかつたかと申しますと、駕籠の中で咳をなすつた時に気がつきました。いつぞやの晩、神田の柳原の土手というところを通ります時分に、わたくしは怖いものに出会でくわしました、怖ろしいことをして、人をなぶりころ弑殺しにしているお方がありました、その方が、つまり今夜、尺八を吹いて、駕籠に揺られてこちらの方へおいでになった方なんでしょう。その尺八のうちに、本手の『鈴慕れいぼ』というのを吹きになりましたね。俗曲の『恋慕れんぼ』とは違いました、『鈴慕』と申しますのは、御承知でもございましたよ。うが、普化ふげぜんじ禅師の遷化せんげなさる時の鈴の音に合せた秘曲なんでしょう。だそうでございませう。わたくしはその方がお吹きになった『鈴慕』を聞きまして、下総小金ヶ原の一月寺のことを思い出しました。あれは普化宗の総本山でございませう。今はおりますか、

どうですか、そこに尺八の名人がその時分おいでになりました、以前、私はその方から『鈴慕』を聞かせていただいたのが忘れられません。その時の心持と、今晚の心持とが同じことでございます、人間界を離れて、天上界にうつる心持というのはこれかも知れません。尺八の音ねに引かれて、知らず知らずわたくしはここまでおあとを慕つて来て、ついに、お屋敷の中まで紛れ込んでしまいました。そういうわけでございますから、決して怪しいものではございません、どうぞお見のがし下さいまし」

一息に語りつづけてしまった弁信の長物語に、抑えつけていた者も呆あきれたらしいが、言葉が途切れると急に撥はね返って、

「お喋しゃべり坊主だなあ貴様は。聞かれもしないことまで、よくツベコベと喋るお喋り坊主だ。音がどうあろうと、尺八が鳴ろうと鳴るまいとこつちの知ったことかい、貴様をスポーンとこの

井戸の中へ抛り込んだら、それこそいい音がするだろう、人間界から天上界とやらへ舞い上ったものを、スポーンと井戸の中の地獄へ逆落しさかおとにかけると、それで三界をめぐり歩いたことになる、まあ、この井戸の中へ入れ」

神尾主膳はこう言つて、またこの盲法師めくらほうしの首の根を押えて吊上げようとしています。酒乱とは言いながら、ほんとうにこの盲法師を井戸の中へ投げ込むつもりと見えます。

「あ、ほんとうに、わたくしを井戸の中へ投げ込んでおしまいなさるのですか、御冗談に、わたくしを嚇おどかしてごらんになるのじゃございませんか」

盲法師はいまさら慄ふるえ上つたようです。

「知れたことよ、貴様ぐらいの小坊主がちょうど投込みごろの小坊主だ、スポーンと投げ込んでみたい、古井戸や坊主飛び込

む水の音、スポーン」

神尾主膳は悪戯あくぎやくを弄ろうしながら盲法師を抱き上げたものらしい。

この時に盲法師は悲鳴を揚げました、

「そりゃ、あんまりお情けないことでございます、お屋敷うちへ足を入れましたのは、いかにも、わたくしが悪いのでございます、お叱りを受けましても、お仕置を受けましても、お恨みには思いませんが、井戸の中へ投げ込みなされるのは、あんまりヒドウございます、それほどの罪ではございません、存じませんことでもありますし、何を言いましても、眼が見えないんでございますから、ついつい、こんなことになりました、どうか、お助け下さいまし、井戸へ投げ込むことだけは、おゆるし下さいまし」

盲法師は必死になつて神尾の毒手から免れようとして、井戸桁いどげた

にとりついていているもののようにです。盲法師とは言いながら死力を出して争うてみると、神尾も無雑作むざうさには投げ込むことができなないと見えます。しかし、ここうなつてみると、神尾の悪癖はいよいよ嵩こまじてくるばかりで、いくら盲法師が事情を訴えても、悲鳴を揚げても、それでは許してやるという気づかいはない。それのみならず、彼が悲鳴を揚げてもがけばもがくほど、かえつて神尾の残忍性を煽あおるようなものであります。幸内を虐殺したのも、安綱の刀が欲しいとはいふものの、一つはこの残忍性がしからしめたものであります。井戸桁に取付いている盲法師の弁信は、それとは知らず、声を噎からして悲鳴を揚げました、「人は死んでも思いというものが残ります、わたくしだけではございません、あなた様に祟たりが出来ず、わたくしを井戸へハメると、あなた様が地獄に落ちますぞ」

もとより、斯かよう様な警告に怖れる神尾ではありません。遮二無二、弁信を引捉えて井戸へ投げ込もうと焦あせります。弁信は、そうはさせじと死力を出して相争うこと前の如くであるが、結局、盲法師は神尾の敵ではありません。ついに井戸桁にし、がみついた両の手を撈もぎ離されてしまいました。得たりと、神尾は両の手で抱きすくめて、弁信を浚さらい上げました。

「あ、誰か助けて下さい、盲法師の弁信を生きながら井戸の中へ投げ込んでしまいます、弁信はそれほどの罪をつくった者ではございません、このお方が無慈悲でございます、このお方は非道でございます、誰か助けて下さる方はありませんか、一生のお願いでございます、後生ごしやうのお頼みでございます」

ほとんど断末魔の叫びに等しいこの声が、土蔵の中にいるお銀様をはじめ、寝ている竜之助の耳を驚かさないうけにはゆき

ません。

「あなた、あれをお聞きになりましたか」

「ああ、聞いています」

竜之助は辛うじて答えましたけれども、起き上つてその急に赴こうとする気色はありませぬ。かえつてお銀様が立ち上りました。

神尾の残忍と兇暴とを知りつくしているお銀様は、この場合に、自分の力でどうすることのできないのを知らない道理はなはずであるのに、それでもじつとはしておられなくなつたものと見えます。

今、お銀様が立ち上つた足許に触れたのが一管の尺八であります。今までは忘れていました。

「ああ、外の盲法師とやらが、尺八を吹いておいでになつたと

いうのは、あなたのことでございましたね、それなら、あなた、助けに行つて上げて下さい、あなたの尺八の音に聞き惚れて、あとを慕つて来たのだと言つているではございませんか」

お銀様は尺八を片手に持つて、再び竜之助を動かしました。この時、外では盲法師の悲鳴が三たび響き出しました、

「わたくしには、どうしてわたくしが、これほどの目に遭わなければならぬのですか、それがわかりません、お助け下さいまし」

井戸の車がミシミシと軋きる音を聞いていると、盲法師は神尾の暴力を必死にこらえて、井戸の縄にとりすがつてゐるもののようにです。神尾主膳は、無茶苦茶に残忍性が嵩こじて、口も利きけないほどに昂こ奮ふんしているらしく、ただ鼻息のみが荒く、力を極めて一人の盲法師を井戸の中へ投げ込もうとしているものよ

うです。そうさせじと争う力は、盲目めくらの小坊主ながら侮り難きものと見えて、神尾が力を極めてやっても、ややもすればもてあますほどの抵抗力があります。最初は神尾の腕にとりすがつてみたが、それを撈もぎ離されると、今度は着物に取付きました。その着物が破れると、今度は井戸桁に取付きました。井戸桁に取付いたのを撈ぎ取られると、今は頼みの綱の井戸繩に、しっかりと抱きついて、物哀れな悲鳴を揚げています。死を怖るることかくの如く、生に愛着することかくの如くなればこそ、神尾の残忍性はいよいよそれに興味が乗ってきます。弁信が素直に殺される気ならば、神尾は、さまで問題にしなかつたかも知れません。それにも拘らず、弁信はいよいよ悲鳴の限りを加えて、

「死ぬのがいやなんではございません、死なねばならぬわけが

わからないのでございます、殺されるのが怖いものではございません、ここで殺されるほどの罪を、わたくしはまだ作つた覚えがございません、死ぬとおっしゃればいつでも死にます、わたくしが死んで、ひとさまが助かりますようなことならば、いつでも死んでお目にかけます、また、わたくしの過去の罪と、現世の罪が重いから、こうして殺すのだとおっしゃるならば、幾度でも殺されて、罪ほろぼしを致しますでございます、けれども、今晚、こうして……見ず知らずのあなた様のために、なんにもわけがなくて、ただ、お屋敷のまわりをうろついていたという廉かどだけで、生きながら井戸の中へ投げ込まれました、私には死んでも死にきれませぬ、どうぞ、お助けなすつて下さい、どうしてもお殺しなさるならば、私が死ぬるようにしてお殺し下さいまし」

必死になつて悲鳴を揚げれば揚げるほど、神尾の残忍性に油を加えるものに過ぎません。過去世も未来世もあつたものでありません。神尾はついに金剛力を出しました。その力で、わずかに取とりすが継つていた一条の井戸繩の手が離れました。

「あれ——」

凄すさまじい音を立てたのが、この世の別れであつたかなかつたか、

弁信はついに井戸の底へ、生きながら投げ込まれてしまいました。た。

「あつ！」

これと共に絶叫して、後しりえに墮どうと倒れたのが神尾主膳であります。

お銀様は我を忘れて、土蔵の二階から倉の戸前まで一息に駆け下りてしまいました。

二階から駈け下りたるお銀様が、倉の重い戸前をあけるには、かなりの暇がかかりました。

ようやく、それをあけて井戸端まで来て見ると、後ろに倒れた神尾主膳は、福村の手によつて頻りに介抱しきされています。介抱している福村は、度を失うてあわてきつているのがあまりにおおきおおきよう大仰おおきです。

「早く、何とかしてくれ、誰でもいい、早く何とかしてくれ、大将が死んでしまふ、この傷を見るがいい、始末が悪い、この傷を見るがいい」

福村は神尾を抑えたり抱えたりして、うろたえ廻っているのを、お銀様は冷笑気味で後目しりめにかけて、弁信が投げ込まれた井戸へ近づこうとしたが、井戸の屋根の柱につるしてあつた提灯の光が、あいにくに、怪我をしたという神尾の面おもてを照らしてい

ます。神尾主膳の面は、左右の眉の間から額の生際はえぎわへかけて、牡丹餅大ぼたもちだいの肉を殺そぎ取られ、そこから、ベツトリと血が流れているのです。福村があわて迷うてて、こ舞こまをしているのは、その大怪我のためであることがわかりました。

この点においては、お銀様は冷やかなものでした。神尾の額の大怪我は、むしろ痛快至極なものだと思いました。だから、いくら福村があわてようと噪さわごうと、いっこう驚かない。神尾が苦しむのは当然であつて、ところもあるうに額の真中へ刻印を捺おされたことの小気味よさを喜ばないわけにはゆかないが、それにしても、咄嗟とつさの間に、神尾がこの大傷を受けて倒れたのは、何に原因するのか、それがわからないなりに井戸の車の輪を見上げると、釣瓶つるべの一方が、車の輪のところへ食い上つて逆立ちをして、釣瓶の一方が見え、釣瓶の一端に、

神尾の額から殺ぎ取られた牡丹餅大の肉片が、パクリと密着くつついているもののように見えました。

お銀様は、そこでホツと息をついて、同時に胸の溜飲りゅういんを下げました。ははあ、これだなと思つたのでしよう。盲法師が下へ投げ込まれるとその重みで、一方の釣瓶が急転直下すると一方の釣瓶が海老えびのようにハネ上つて、そうして、その道づれに神尾の額の肉を、牡丹餅だけを殺いで持つて行つてしまつた。

それだと思つたから、お銀様はいよいよ痛快に堪えませんでした。痛快というよりはこの時のお銀様は、まさしく神尾主膳の残忍性が乗りうつたかと思われるほどに、いい心持になりました。うめき苦しむ神尾にも、驚き騒ぐ福村にも、冷然たる白い歯をチラリと見せたきりで、井戸桁へ近寄つて、一方の繩をクルリと廻してゆるめると、海老のようにハネ上つている一

方の釣瓶が少しく下つて来たから、手を高くさしのべてそれを取り下ろして見ると、お銀様の想像した通りに、神尾主膳の額の肉片は、べつとり釣瓶の後ろに密着くっつくしていました。

お銀様は、その肉片と神尾主膳の面おもてと、うろたえ騒ぐ福村の挙動を見比べながら、徐しずかに縄を引いてみると手ごたえがあります。そこで釣瓶を卸して、両かいなの腕の力をこめて綱を引いてみると、いよいよ重い手ごたえがあります。生きてはいまいけれども、この綱の重みによつて見ると、いま投げ込まれた盲法師は、井戸の底でまだこの縄に取付いていることはたしかです。盲法師は最後の死力で、縄に取りついたまま、その手をはなさないでいるものらしい。そうだとすれば、この縄を手繰たぐることによつて、その死骸を引き上げることまでできる、とお銀様はそう思ったものらしく、全力をこめて縄を手繰り出しました。

小坊主とはいえ、人間一人を引き上げることは、女一人の力にはかなりの重荷です。それでもお銀様のこの時には、思いがけない怪力が加わったもののように、誰の助けを借りもせず、井戸の車が動きます。

その時に竜之助は蒲団ふとんの上に起き直つて、枕許の煙草盆を引き寄せて、長い煙管きせるで煙草を喫のみはじめました。

あわて騒いでいた福村は、神尾を肩にかけて、ようやくその場を退去してしまつたあとには、お銀様が力をこめて井戸繩を手繰る音が、ミシリミシリと重く軋きしつて、お銀様は一尺引き上げては休み、二尺引き上げては息をついている様子が手に取るようです。好きでもない煙草を吹かしながら竜之助は、茫然として事の経由を考えています。いつたい、あの盲の小坊主なるものが奇怪千万であると思つているのでしよう。

「坊さん、しつかりして下さい、怪我はありませんか」

これはお銀様の声でありました。その時に、重い車井戸の軋りは止んで、

「はい、有難うございます、どこも怪我はございません」

意外にも、これはハッキリとした小坊主の声。してみれば、たしかに一旦は井戸へ投げ込まれた小坊主は、生きて再び浮び上ったものに相違ない。竜之助はそれを怪しみました。

「どなたか存じませぬが、おかげさまで命が助かりました、一旦、地獄へ落ちたわたくしが、またこの世に生れることになりました。あなた様のおかげでございます。でございますけれど、こうして再びこの世へ生れ更かわつて参りましたが、業ごうが尽きない限り、この世もあの世も同じことの地獄でございます」

小坊主は凄せい焉えんたる声で、こんなことを言い出しました。さき

ほどから聞いていれば、この小坊主の言うことが、いちいち癩にさわらないではない。お銀様も今の言葉を幾分か不快に思つたらしく、

「そんなことを言うものではありません、地獄は怖ろしいところですよ、この世はまだまだ捨てたものではありませんよ」

お銀様は叱るように言いました。

「私も、つい今までは左様に思いましたけれど、今となつてみると、地獄も、そんなに怖いところではないと思ひましたよ」

小坊主はこう言つて減らず口を叩きました。減らず口ではなけれども、なんとなく小憎らしい口に聞えました。それは、さいぜんは、あれほどまで苦しがつて、絶叫したり、号泣したりして死ぬことを厭いとい、助けられんことを求めていたのに、助けられ、救い上げられてみれば、かえつてすましたもので、さ

のみ感謝の意を表しているとも思われなからです。感謝の意を表さないのみならず、むしろ、洒蛙しやあしやあ洒蛙として、よけいなことをしてくれと言わぬばかりのすまし方であったから、お銀様も面白くなく、そんなら地獄へお帰りなさいと言ってやりたいほどのところを、黙っていると、いい気になつて盲法師が、「ついで、今までは、私も、どうかして助かりたいと思ひました、生きておりたいと思ひましたけれど、井戸へ落ちてしまつた時に、生きていたとか、助かりたいとかいう心持が、すっかりなくなつてしまいました、大へん良い心持になりました、ですから、私は、井戸へ落ちましてからは、助けてくれとも、生かしてくれとも、一言も申ひことしませんでした。幸いに、身体には怪我は一つも致しませんで、しつかりとこの繩を握つておりましたから、水の底へも沈みはしませんでした、わたくしの身体は

半分だけ水の中へブラリと下つて、半分は水の上に浮き上つておりました、その時、わたくしはどつちでもいいと思ひました。再び地の上へ浮き上れなければ、水の底へ沈んでしまつても、嬉しい心持で往生ができると思ひました。そうしてゐるうちに、わたくしの身体が少しずつ上へ上へと引き上げられるようでございます……その時も私は、どちらでもよいと思ひました」

小坊主の言葉を聞いている竜之助は、煙草盆の縁で煙草の吸殻をハタキます。

その後、染井の化物屋敷へ、また一個の怪物が加わることになりました。その怪物とは、めくらぼうし盲法師の弁信であります。

二階には竜之助とお銀様とが住んでゐるところに、弁信は階下の板の間に一畳の畳を敷いて、その上に安んじていました。土蔵の二階には窓があるけれども、下には窓がありません。尋

常の人では昼も燈火あかりを点ともさなければ堪くらえられないところへ、盲法師の弁信は平気で座を構くえました。

そこで翌日からの弁信の仕事は、琵琶の手入れをすることです。昨夜の井戸端の騒さわぎで、弁信の平家琵琶の上部は滅茶滅茶に毀こわれました。弁信は一挺ひとつの鑿のみと若干の材料とを借受けて、手細工で、それをコツコツと修繕に余念がありません。

「この平家琵琶ばかりは、好く人はばかに好きなんでございませ、嫌いな人は見向きも致しません、それで、よく世間の人が、平家は江州鮎しゅうしゅうぶなのようだと申します、好きな人はどこまでも好きでございませ、嫌いなものは、てんで見向きも致しません、そこを申したんでございませうね。わたくしが、この琵琶を習いはじめましたのは……」

お喋り好きなこの小坊主は、余念なく毀れた琵琶の手入れを

しながらも、人の足音さえ聞えれば何がな語り出すのであります。人が耳を傾けようものなら、自分の素性来歴までも事細かに喋り出そうとするのだが、ここにはお銀様と、それから屋敷の召使のほかには、あまり近寄るものはありません。相手が無くなるかと平家の文章を、ひとりで口吟くちげんんで、曲の歌い廻しが思うようにゆかない時は、幾度も謡い直しています。そのくせ、琵琶修繕の手は少しも休むものではありません。ただ搦はかがゆかないだけで、どこをどう直しているのだから、この分では、一面の琵琶修繕に半年もかかるかと思われるほどのていたらくです。

「へへエ、やるというほどでもございませんが、好きなものでございませうからね。三味線も、ちよつとばかりならお相手を致しましょう。私に琵琶を教けんぎょうえてくれました。検校が、何でも心得のある人でございましてね、その人から調子だけを教けんぎょうえていただ

きまして、あとは自分で工夫すると、どうやら当りがつくのでございませうから、追々と、いろいろの音曲をやってみたいところう思つてるんでございます。お寺にいては、そういういろいろのものをやるわけには参りませんから、在家ざいけにおりますうちに、あれこれと手を出しておきたいと思つてゐるんでございます。それでは芸人になるとおこごとが出るかも知れませんが、私は芸人でよろしうございます、とても名僧智識となつて、衆生しゅじょうさいど濟度を致すようなことは、私共の及ぶところではございませんから、芸人となつて、いろいろの面白い音曲を皆様にお聞かせ申し、皆様をお喜ばせ申すことができれば、それで結構でございます。ですから平家琵琶は、あまり多くの人好きが致しませんもの故に、琵琶をやめていつそ三味線に移ろうかと、このごろはそう思つてゐるところでございました。それ故、こうしてこわ毀れた琵琶



のを一つ、お相手を致してみたいものでございます」

誰もいないのに弁信は、こんなことを言いながら、暗澹たるあんたん土蔵の中の隅つこで、しきりに鑿のみを揮ふるつておりました。

その翌日から、この土蔵の中で、思いがけない合奏の音が聞えました。

その合奏も、世の常のお行儀のよい合奏ではありません。机竜之助はあちらを向いて短笛たんてきを弄もてあそぶと、それと六枚折りの屏風一重を隔てたこちらで、お銀様が箏そうの琴を調べます。そうすると二階の下の暗澹たるところから、盲法師の弁信が三味線の音をさせるのです。三人とも、離れ離れにいて、それぞれ勝手の形を取り、勝手の曲を奏かなではじめた時が、合奏のはじまる時であります。始まる時に何等の合図もなく、三曲のうちの何れかの一方が音締めねじをすると、期せずして他の二人が、それぞれの

楽器を取り上げるのであります。

「千鳥の曲」を吹きはじめた時は、竜之助はなんとも言われな  
い心持になりました。

しおの山

さしでの磯に

すむ千鳥

君が御代をば

八千代とぞ鳴く

と歌った後に、後歌あとうたの「淡路島かよう千鳥の……」が続かなく  
なりました。それと同時に、お銀様も、はたと琴の音をやめてし  
まいました。

下にいた盲法師の弁信もまた、絃いとを半ばに断絶しなければな  
らなくなりました。そこで、せつかく合奏に興の乗りかけた「千

鳥の曲」は曲の半ばで立消えになりました。

それでも三人のうち、誰ひとり、文句を言うものはありません。最初に曲をやめたのは竜之助でありましたけれど、聞いたところでは、三人申し合せて同時にやめたものようであります。陰深いんしんな土蔵の中は、無人の境のように静まり返って、やや暫くの後に、

「何か傷心しやうしんのことがございましたね」

弁信法師が、やつとのことで、下から上へ向けて言葉をかけました。

二階からは、早速の返事がありません。

「傷心のこと」というのは、少しくし、やれた言葉であります。傷心という言葉を、文字で現わさずに音で現わしたから、二階の二人も、ちよつと戸惑いをして、そのままに受取ることができ

なかつたのかも知れませんが。

そこで弁信は、三味線をさしおいて、琵琶の修繕にとりかかりました。

「いかがでございませぬ、先生、明晩あたりは町へお出かけになつてござらんになりませぬか、お伴を致ともしましやう。あなた様が短笛を鳴らしてお出かけになりますならば、私が……左様、琵琶はまだ出来上りませぬし、三味線では、うつりが悪うございませぬから、私も、やはり短笛を吹いてお伴を致しましやう。明晩はお天気もよろしうございまして、それにお月夜でございませぬ。時々、外へおいでになることがおたがいさまに保養でございませぬ。月に浮れて、お江戸の市中を、尺八の音を流して歩くのは、風流ではございませぬか」

弁信がこう言つて相談をかけると、

「出かけてもいいな」

というのは竜之助の返事でありました。

けれどもその明晩は、そのことが実行されませんで、それから三日目の晩、この二人の盲目が相連れて、染井の屋敷をふらりと出かけました。竜之助は、そのころ市中を歩く虚無僧こむそうの姿をして、身には一剣をも帯びておりません。弁信は例のころも、を着て、法然頭ほうねんあたまを網代笠あじろがさで隠しておりました。二人ともに杖は持たず、同じような尺八を携えて出かけました。土蔵住居の屈託から、こうして、かりそめの風流を試みるつもりであるが、それにしてもあいにく、今宵はまだ月がありません。

お銀様は二人の出歩くことを、あえて異議を唱えないのみならず、なにくれと仕度をしてやって送り出したものです。それは、弁信が附いて行くことが何となしこころだのに心持みになるし、それ

と、今宵に限って竜之助が、身に寸鉄を帯びずして出て行くということに安心したものと見えます。

## 十四

ちょうど、その晩のこと、甲州街道を新宿の追分まで上つて来た一組の荷馬があります。五頭の馬に、それぞれ荷物を積んで馬方が附添い、最後の一頭のから尻には、三度笠の合羽かっぱの宰領さいりょうが乗っていました。その宰領の背恰好せかつこうが、どうやら山崎讓に似ているのも道理、声を聞けば、やっぱり山崎讓です。

「おい、久造、おれは、ちよつと思ひ出したことがあるから、これから内藤の屋敷内へ寄つて行かにやならねえ、お前、御苦勞だが、代りに宰領をやつてくれ、前の四頭よっつは拘かまわねえから新宿

の間屋場へ抛り込んで、このから尻だけは今夜のうちに、江川の邸へ着けてえんだ、よろしく頼むぜ」

山崎がこう言うと、馬の側にいた屋敷出入りの飛脚らしい五十男が、

「ようございます、たしかに、私が今夜のうちに、新銭座の江川様へ、このお馬だけはお届け申すことにしますから、旦那様、どうかごゆつくりと御用をお足しなさいまし」

快く引受けたから、山崎は馬から飛んで下りて、

「それじゃあ頼む。それ、この笠をかぶりな、合羽も引っかけて行くがいい、この提灯にはそれ、江川の印があるから、消さねえようにして行ってくれ」

「旦那、それには及びますまい、この菅笠で結構ですよ」

「それでねえ、二度笠が定法だから、冠って行くがよかろう、江

川の邸で笑われても詰まらねえからな」

「それじゃ、お借り申すことに致しましょうかな」

「それで、お前のその菅笠をおれに貸してくれ、合羽はおたがい  
いにそれでよかろうじゃねえか」

山崎讓は身代りの印として、久造には自分の冠っていた三度笠を渡し、自分は久造の菅笠をかぶり、江川の印のついた小田原提灯を渡して、新宿の追分から一行と別れてしまいました。

山崎がこうして宰領をして来たのは、甲府の城下から、しかるべき要件があつて来たものに相違ないが、内藤家の屋敷内に知る人があつて急に思い出した用事から、それへ廻るといふのは実は嘘で、山崎にはこの新宿に、ちよつとしたなじみ馴染の女があつたため、ここへ来て、ついそれに会つて行きたくなつたものらしい。

ところが、この夜に限って大きな間違いが出来てしまったのは、その身代りの宰領が、四谷の大木戸へかかった時分に、何者とも知れず闇の中から躍り出でたものがあつて、やにわに馬上の宰領をきつて落しました。よほど腕の冴えていたものと見えて、一刀にきつて落された宰領は、二言ともなく息が絶えてしまったものです。人々があつと騒ぐ時には、もう曲者の姿はいずれにも見えませんでした。非常な早業であり、非常な手練であつたが、止めを刺す余裕がなかつたものか、その必要を認めなかつたものか、きり捨てたまま姿を隠してしまいました。懐中の物を奪おうでもなし、荷駄の品物に手をかけようでもありません。何の恨みあつて、この宰領を手にかけたものだか、その要領の程が誰にも合点がゆきません。

馴染の女と話をしていた山崎讓は、無論、このことを知ろう

はずがありませんが、その噂は忽ちたちまちにして耳へ入りました。

「お代官の江川様へ行く馬方が、大木戸で斬られた」

それを聞くと山崎は、着物を振って立ち上りました。

「どいてくれ、どいてくれ、親類の者がやって来たんだ、どいてくれ」

一足飛びに大木戸まで来て、人だかりを突き退けて前へ出て、ちようど検視の役人が取調べの真最中へ、臆面おくめんもなく面かおを突き出して、

「遅かった、遅かった、一足遅かったよ、済まねえことをした。

お役人衆、これは拙者の連れの者に相違ござらぬ、拙者が宰領で甲府の城内から、ついそれまでやって来たのが、僅かの行違いでこんなことになりました、委細の申し開きは拙者が致しますが、ともかく、この者の傷所を見せて下さい、どうも合点が

いかねえのだ」

山崎は検視の役人に簡単な挨拶をして、ずっと宰領の死骸に近寄つて、提灯ちようちんの火をつきつけて、仔細にその斬口を調べたものです。太股に一箇所と、肩から袈裟けさがけ、実に冴さえた斬口です。

全く人違いで斬られたものに相違ない。違われた本人は気の毒だが、違えて斬つた者は、たしかにこれを山崎讓と信じて斬つたのに違いない。

こういうことにかけては、山崎は、ここに出張したお役目の役人よりは、遙かに観察が鋭くなければならぬはずです。そこで唯一の証人であった馬方を捉えて、その前後の模様について訊問を試みました。

馬子の答うるところを綜合してみると、第一その斬り手は大兵だいひょう

ではなかったこと、むしろ小兵こひょうの男で、覆面をしていたこと、斬った後に失策しまった！ というような叫びを残して行ったこと、その声は細い声であったというようなこと、それらのことが、ほんの取留めのない参考になるだけで、なお四辺あたりを提灯の光で隈なく探して見たけれど、証拠になるべきものは塵一つ落してはありませぬ。

その晩、江戸の西の郊外を只走りひたばしに走っているのは、宇津木兵馬であります。

兵馬の挙動は尋常ではありません。その髪は乱れているし、その眼は血走っているし、第一、どこまで走るつもりか、その見当さえついていないようです。

道を誤れば、月の入るべきところもないという武蔵野の、西の涯はてまで走らねばならぬ。川越、入間川を経て、秩父根まで走

らなければ、道は窮することなき武蔵野の枯野の末です。

とある森の蔭に立つて、兵馬は天を仰いで見ました。その宵はまだ星もありません。このあたりには人家も見えません。たしかに道を過あやまつたものと思いましたが。よろよると自分を支える力を失うが如く、大きな木の根に腰を卸して、ほつと深い息を吐いて俛うなだ首れてしまいました。

兵馬はまさしく道を過つたものです。その道は、行けども涯はてしのない武蔵野の道ではなく、自ら為すべきことの道を過つたものと見なければなりません。

四谷の大木戸で宰領を斬つたのは誰であろう、兵馬の仕業しわざであります。それを山崎讓と見誤つて斬つたのがオゾましい。兵馬には山崎讓を斬らねばならぬなんらの恨みがあるのではない、それは南条力に頼まれたからです。南条とても、山崎に私の怨

みがあるわけでもなんでもない、彼は大事を成すの邪魔物であると思えばこそ、兵馬の手を借りて片付けさせようとしたものです。それはもちろん、頼まれたりとして承諾すべきことの限りではないのを、かくも兵馬が引受けて手を下すようになったのは、浅ましいことに女ゆえです。南条力の主義や主張に共鳴して、一臂いっぴの力を貸すということであればまだ名分もあるが、事実は、どう言つても女のためであるのを争うことができませぬ。

南条らの一味は、その以前から山崎が江戸へ出るということを探り知つて、それを老女の家まで合図をしました。その合図によつて兵馬は、大木戸あたりに待ち構えて、ついに物の見事に馬上の者を斬り捨てたけれども、それが物の見事に間違ひであつたということを知つたのは、誰よりも斬つた本人の兵馬が先です。隙すきがあつてもなくても山崎讓である、そう容易たやすく斬れ

るとは思つていなかったのに、案外なのはその馬上の人です。ほとんど藁人形を斬るよりも容易く斬れてしまいました。たとえ無意味にしろ、山崎ならば斬つて斬りばえもないではないが、馬に乗つて世渡りをして、妻子を養つてゆくだけの男を斬つたところで何になる。それらの妻子や親族の者の歎きの程も思いやられる。斯か様な愚劣極まる殺生をするために、劍を学んだはずではなかった。いろいろと我が心に弁解を試みて、人を斬ることは何でもない、無用の人を斬るために、夜な夜な辻斬をして歩く者さえある、間違つて人一匹殺めたことぐらいは物の数ではないのだ、と兵馬は強いて自分の心を落着けようとしたけれど、世の中にこのくらいばかばかしい人殺しはないものと思われてなりません。そのばかばかしい人殺しを甘んじてやつて来た、自分というものの馬鹿さかげんこそ底が知れない。ああ、

どうして我ながらここまで本心を失うたものかと、それを思い来つて無念に堪えられないで兵馬は、火のように燃え上る頭を抑えました。

こうして兵馬が燃えさかる頭を抑えている時に、どこからともなく短笛の響が起りました。眼をあげて見ると、いつしか月が東の空に出ています。

人の姿は見えないが、笛を弄ぶもてあそ風流の人は、わぎと月の上らないうちに、武蔵野の外を吹きめぐろうとするものらしい。この短笛の音色が兵馬の頭ずねん燃に、一陣の涼風を送らないという限りはありません。兵馬には、その人が何の心あつて、何の曲を吹いて来るのだからそれはわかりませんが、その音は柔和にして濃こまやかな感情を含んでいる。なだらかにして夢幻むげんの境を辿たどるようである。一転すると悲壮沈痛にして、抑えがたき感慨こもが籠る。

朦朧もうろうとして春の宵の如きところから、寥々りょうりょうとして秋の夜の月のように冴え渡つて行く。

よいんじようじよう

余音嫋々としてその一曲が吹き終つた時に、ようやく人の足音と話の声が聞え出しました。

「下総の、小金ヶ原の、一月寺というのへ行つてごらんになると、今でもあの門前に石碑いしぶみが立つてございます、わたくしには読めませんが、読んだ人の話によりますと『骨肉同胞たりと雖いえども、案内人無くして入ることを許さず』と刻んであるようでございます。一旦、あの寺へ入りました以上は、父母兄弟でも、案内人に許されなければ、面会ができないものとなつていたのでございませうが、それが昔は『骨肉同胞たりと雖も、山門に入るを許さず』とあつたのだそうでございます。つまり、昔のは、父母兄弟でありましようとも、案内人が有りましようとも無かりま

しようとも、いったん寺へ入ったものには面会を許さないとい  
う、宗門しゅうもんの掟おきてなのでございました。それを近頃ひびになつ  
て白河樂翁さんというお大名が、それではあんまり酷い、とい  
うので、案内人無くして入ることを許さず、と改めさせたのだ  
そうでございます。これはどちらがよろしいでしょうかね、宗  
門の方から申しますと、『骨肉同胞たりと雖も、山門に入るを許  
さず』という、卵うの毛けも入れない厳しいところに情けがあるん  
だそうでございます、また世間普通の人情から申しますと、樂  
翁公のなされたように融通をつけるのが道理だと申すものもご  
ざいます。あなたはどちらがよいとお考えになりますか」

兵馬が見ると、月を背にして歩んで来る二個ふたつの人影がありま  
す。前のは背の低い網代笠あじろがさをいただいた小坊主と覺しく、後ろ  
のは天蓋てんがいをかぶって、着物は普通の俗体しやくたいをしている男のよう

す。

この二人がそこまで来た時に、お喋り坊主しゃべが遽にわかに突立ってしまいました。

「もし、そこにどなたかおいでになりますようですが、どなたでございます」

こう言つて見咎みとがめたのは無理もないと、兵馬も思いました。

行き暮れて、こんなところに、ただ一人、物案じ顔に休んでいるのを、通りかかった者が見ればギョツとするのも無理はない。兵馬はそこで、とりあえず返事をしました、

「ごらんの通り、このあたりで少々道に迷いました」

「左様でございましたか」

それでも小坊主は動いて来ませんでした。そして突立ったなりに暫く耳を傾けて、

「まだ、お若い方のようでございますな、どちらへおいでになろうとおっしゃるのでございます」

「浅草の方へ出たいと思います」

「浅草へ？ それは飛んだ方角違いでございます、と申し上げたところで、私も実は浅草へ参る道は存じませんのでございませぬ、そちらへおいでになつては違います、今、ちようど、お月様が上つたようでございますからね、そのお月様の上つた方へと歩いておいでなさいまし、そう致しますと、ほどなく人家がございます、人家についてよくお聞きなさいまし、なんでも、お月様のお上りになつた方へとおいでになれば間違ひはございません」

お喋り坊主は親切にこう言つて、道案内をして聞かせましたけれど、やつぱり歩いては来ないでそこに突立っています。

「有難うござる、それでは、あの月をめあてに尋ねて参りましよう。して、この辺は何というところでござろうな」

兵馬は立ち上りながら、こう言つて尋ねてみると、お喋り坊主が、

「何というところでございますか、私共にもわからないのでございませうが、ずっと参りますると染井から伝中でんちゆうの方へ出ますんでございませう、もつとも浅草へ参りまするには、染井、伝中へ出では損でございませうから、その辺に、ずっと左へ切れる道がございませうと存じます、それを尋ねておいであそばすがよろしうございませう、多分、巢鴨こうしんづかの庚申塚こうしんづかというところあたりへ出る道があるだろうと存じますが、私共はごらんごらんの通り眼が不自由なものでございませうから……」

なるほど、どうも様子が訝おかししいと思つたら、盲人であつたか、

道理こそさいぜんから口だけ親切で、身体に気を許さないのがわかつた。そこで兵馬はお喋り坊主に会釈えしやくをしながら、その傍を通り抜けると、それと離るること三間ばかりのところに、天蓋をかかげて月を見ている人があります。

多分、月を覗いているのだらうと兵馬は思いながら、その人の側を、ずっと摺り抜けて通りました。通り抜ける途端に、風を切つて何物かが落ちて来ると覺えたから兵馬は、ひらりと身をかわしたけれども、口惜くやしいことに、かわしきれませんでした。右の肩を打たれようとしたのを、肩を開いたために、それが落ちて来て、刀の柄つかにのせていた手の甲すべを這はつて、右の小指はっしを発止はつしと打砕きました。

「痛ッ！」

兵馬は道の側わきへ飛び退いて身構えて見れば、月をながめて突

立っていた天蓋の人が、手に持っていた尺八を振り上げて、通り抜ける兵馬を音もなく打ち込んで来たものです。

稀代きだいの乱暴かなと思いました。よし、それが刃でなくて尺八であつたとは言いなから、これ抜打ちの辻斬とあいえらばぬ仕方です。この上もなき無礼、この上もなき狼藉です。この場合でなかつたら兵馬と雖もいせど、その分には済まされぬところを、兵馬は恠こらえました。碎かれた小指を握りながら、月に立っている天蓋の怪しの男の姿をながめながら、兵馬は取合わずに別れて行きました。

指の痛みを堪忍かんにんして、宇津木兵馬はその場を立去りましたけれども、かの天蓋の怪しい男を、単純な乱暴人とのみ見るわけにはゆきません。沉いんや狂人の振舞ではありません。

相手の右へ向つて摺り抜けるということが、作法の上から間

違つていて、それがために彼の怒りを買つたものと見れば、過あやまちはやはり自分にある。そこで兵馬は多少悔ゆるの心を起すと共に、心外なのはこの指の痛みです。

かりそめに振り上げた尺八のために、ともかくもこれだけの傷を負わせられたことは、自分の不覚である。と同時に、どう考えても相手の腕の冴さえを認めないわけにはゆかないことです。そこで兵馬は、かの天蓋の男が只者ただものでないということを考えました。ただそれだけを考えたけれど、混乱した頭脳あたまのために、空想はあらぬ方へ持つて行かれてしまいます。

兵馬は最初から、吉原へ飛ぶつもりでいました。今となつては、それがあまりに恥かしくてたまらぬことです。そうかといつて、本所の相生町の老女の家へ帰つて、誰かおに面を合せよう。

神尾主膳は眉間みげんに怪我したために、病床うなに呻うなつて寝ています。

なぜか、主膳は医者を呼ぶことを嫌います。これほどの怪我をして呻りながら、ついに一言医者ということを言いません。医者を迎えようという者があれば、厳しくそれを叱りつけて、寄たかつて集たかつてする手療治に任せているのは、一方から言えばこの男の剛情我慢で、一方から言えば、己おのれの屋敷へ他人の出入りを許さぬ内部の弱味かも知れません。

うなり通しにうなつて、その合間に、

「坊主を呼べ、あのお喋り坊主は癩かにさわる小坊主だ、戸惑いをした売うらないしや卜者のようなよまいごとを喋るのが癩かんに触かつてたまらん、あれをここへ連れて来て、眼の前で締め殺してくれ、こう

して寝ていても、あいつの姿が目ざわりになり、あいつの言い草が耳ざわりになってたまらん」

主膳は噤んで吐き出すように、こう言つて罵ののしります。

「大将、あの小坊主は井戸へ落つこつてお陀仏ですぜ、死んでしまいましたぜ」

福村が、言いくるめようとする、主膳は承知しません。

「なあに、死んでしまうものか、あいつは生きて土蔵の中に助けられていたのだ、誰か、あの小坊主をここへつれて来て、拙者の眼の前で締め殺してくれ、それでないと拙者の怪我は癒らん」

福村は、当惑しながら、

「冗談じゃねえ、坊主は、疾とうに井戸の底に往生しているんだ、小坊主の死しり霊りょうに悩まされるなんて、大将にも似合わねえ」

それでも主膳は承知しません。どこまでも小坊主が助けられ

て、土蔵の中にいるものと思ひ込んで、彼をそこへ引いて来て締め殺せ、締め殺せと繰返すその有様は、あの小坊主の生命を眼の前で断たなければ、自分の命が危ないものと思ひ込んでいゝるようです。もてあました看護の連中とても、敢て弁信を憐んで主膳の前を言いこしらえるのではないから、ついに主膳のむづかりに我慢がしきれなくなつて、

「どうだ、大將がすっかりかんづいてるんだから、坊主を一つここへ引張つて来ようじゃねえか。といつて、土蔵はこつちの鬼門だから、あの中へ引取られた上は、おいそれとは渡してよこすまいが、なんとか口実をこしらえて引取つて来ようじゃねえか、そうもしなけりやとても、看病人がやりきれねえ」

ついに彼等は相談して土蔵へ、小坊主引取り方を交渉に出かけることになりました。福村が先に立つて、御家人崩れが都合ごげにんくず

三人で、その晩、土蔵の前までやって来たが、彼等にも、この土蔵の中が気味が悪い。美しい腰元のお化けが怖いのではなく、現にこの中に籠こもっている幾つかの怪物は、同じ屋敷中にあつても、彼等にとつては治外法権の怪物であります。

土蔵の前まで来るには来たが、彼等は急には訪れようとはしないで、まずこちらに立つて中の様子をうかがつておりましたけれど、中には物音が一つするではありません。どちらも真暗で、土蔵の二階の金網の窓から、燈火ともしびの光が青く洩れているばかりです。

そのうちに土蔵の戸がガタピシとあいて、中から人が現われました。様子を見ていた連中は物蔭に隠れていると、中から現われしたのはまず盲法師の弁信です。今宵は笠もかぶらず、例の法然頭を振り立てて出て来ました。ただおかしいのは、手に九曜くようともえ巴

の紋のついた、かなり古びた提灯を点して持つて出たことです。それが倉から出て戸前を二三歩あるくと、そのあとから出て来たのは竜之助です。これは頭巾ずきんを被かぶつて、両刀を帯びて、竹の杖を持つていました。

竜之助が出ると、倉の戸前を引き立ててしまったから、多分、今宵も倉の中では、お銀様一人が留守居をするのでしよう。そうして出かけた二人は、今宵は尺八を持つていないのだから、彼等は別に目的があつて出歩くものに違いありません。ただ、わからないのはその提灯です。持つて前に立つ人も盲目めくらです、あとについてたよりにする人もまた盲目です。盲目が盲目の手引をするのに、持つ人も持たれる提灯も変なものです。それと板倉家の定紋である九曜巴を、弁信が提げ出したことも何の意味だかよくわかりません。

「エエ、その辺にどなたかおいでになりますな、どなた様でございます」

弁信はこの時、例によつて聞き耳を立てました。その実、誰も言葉をかけた者もなければ、物音を立てた者もありません。弁信は杖を取り直して、提灯を持ち換えながら誰かに向つて、こんなことを呼びかけて立ち止まり、

「ちよつとお断わりを申し上げておきます、わたくしはこれから本所まで行つて参りたいものだと思つて存じます。あれから暫く御無沙汰を致しました法恩寺の長屋へ参りまして、皆様に御挨拶を申し上げて来たいと思つて存じまして、これから出かけるところでございます。長屋の衆は、さだめて、わたくしがあれから一度も便りを致しませんものでございますから、死んだものと思つていることと存じます。かねて、わたくしは左様に申し

残しておいたのでございます、こういう身の上でございますから、いつ、どうして、どんなところで間違いが起るか知れませんか、もし、二日も三日もわたくしが帰りませんでしたら、死んだものとお諦め下さいまし、決して、お忙しいところをお探し下さるような御心配をなすつていただいては困ります、と、こう申しておいたものでございますから、多分、長屋の衆も、弁信は死んだものと思っておいでなさるだろうと思えます。それでも、こうして無事であるのでございますから、一応は御挨拶に上らねばならぬとは思っておりますけれど、こちら様で御懇意になったお方の不思議の御縁に引かされて、今日までこうして御厄介になっておりました、今日から以後も、ことによると、また長く御厄介になりになるかも知れません、法恩寺の方を引払って、こちら様へ御厄介になるようなことに

なりますれば、またお屋敷の皆々様にも改めて御挨拶を申し上げます、おわびも申し上げたいと存じております。それで今晚は、これから本所まで、こつこつと歩いて行きたいと存じます。幸い、こちら様が、やはり本所の弥勒寺長屋までおいでになる御用がおりなさるところとおっしゃるものでございますから、お連れを願いましたのでございます。今晚は二人ともに、あちらへ泊りまして、帰りもなるべくは御一緒に願いたいと存じます。が多分そうは参りますまいかとのお話でございます。わたくしだけは明晩は必ずこちら様へ帰って参りまして、改めて御挨拶を申し上げますつもりでございますから、どうぞ御無礼をお許し下さいまし。ええ、この提灯でございますか。なるほど、盲目が提灯を持つては物笑いと思召すおぼしめでございますが、何の意味もあるのじゃございません、わたくしどものために提灯を

つけて歩くのではございません、彼方むこうからいらつしやる方が、突き当るとお困りなさるだろうと思ひまして、これを持って参ります、御新造様がお倉の中からこれを探して、わたくしに持たせて下さいました」

例によつて盲法師の弁信は、誰に問われもしないのに、ベラベラとこんなことを喋りました。二人の盲人は、こうして徐々しずしずと屋敷を出て行きました。

福村をはじめ御家人崩れの連中は、それを見ながらどうすることもできません。

二人の行こうとする目あては、多分ただいま弁信が名乗つた通りであろうけれど、その歩み行く道筋の光景は更にわかりません。武蔵野の尽くるところには、林もあり、森もあり、畑もあり、江戸の郊外が始まろうとするところには、屋敷もあり、人

家もあり、火の見の半鐘もあるうというものだが、二人はただこくあんあん黒暗々の闇を歩いて行くだけです。お喋りの弁信も、どうしたものか、あれつきり沈黙してしまいました。

染井から本所へ行こうとするのは、この二人にとってはかなりの夜道です。もし、きながに歩いて行ったら、夜が明けるかも知れません。急いで行つたところでこの二人は、とても近道を取るといふわけにはゆきません。あぶなければ途中で、駕籠でも雇うまでのことです。

巢鴨の庚申塚こうしんづかあたりへ来たとき、急に人声がさわ騒がしくなりました。庚申塚へ廻るのは、少し廻り道すぎると思われるけれども、化物屋敷の連中は、江戸の市中へ出るのに好んであちらの方を廻りたがります。二人もまた期せずして、そちらへ廻つたけれども、そのあたりは、いつもりょうりょう寥々たる広野の心持の

するところです。しかるに今宵は、その辺で人声が噪がしい。

こういう時に、弁信法師は何事を措おいてもヒタと歩みをとどめて、仔細らしく小首を傾かしげて、その物音の因よつて起るところを、じつと聞き定めようとするのがその例です。今もまた、その例に洩よるることがありません。

「大層、騒がしいようでございますね」

と言つてたちどまりました。その声は往来で起るものではありません。往来を少し引込んだところの原の中で起る、騒々しい声であります。

「喧嘩でも始まったのかな」

と竜之助が言いました。

「エエ、どうも穏かでない騒ぎ方でございます、多分、喧嘩が始まったのでございましょうと思ひます、そこへ、仲裁の人が

出て、ああのごうのと言つて、騒いでいるらしいございます」

そこで弁信は、また静かに歩き出しました。声の因つて起るところをたしかめておき、どのみち二人は、その方向へ行かねばならないのです。人の噪ぐ声は、いよいよ近くなりました。その数多あまたの人が騒ぎ罵ののしる中に、人の泣く声が聞えます。そこで、弁信は再びたちどまりました。

「エエ、エエ、あの中で泣いているのは、あれは女の声でございます。大勢の者に囲まれて、女が泣いているのでございませよ」

なるほど、弁信の鋭敏な耳を待つまでもなく、人の騒ぎ罵る中で、絶え入るばかり悲鳴を揚げているのは、まさしく女の声であります。

「皆さん、それほどまでに恥をかかせないで、いつそ一思いに殺

してしまつて下さい、私共が悪うございました、殺されても決して皆様をお恨み申しは致しませんから、どうぞ、一思いに二人を殺してしまつて下さい、それほどに恥をかかせないで、殺してしまつて下さい」

ひいひいと泣いているのは女の声であつたけれど、こう言つて歎願しているのは男の声です。

「見せしめのためだからこうしてやるのだ、俺たちを恨んじやならねえぞ」

これは、いきり立つた大勢の中から起る声です。

弁信ならずとも、感づくことでありましょう。路傍の原つばで、大勢の者が、男女二人を捉えて何かの制裁を加えているところです。女が、ただ泣いている、男が只管ひたすらにあやまつている、大勢が見せしめのためだということを知れば、それも直ちに合点がてん

のゆかねばならぬことで、ここに二人の男女が道ならぬ行いを  
して、大勢のために極端な私刑を加えられようとしているとこ  
ろに紛れまぎもありません。

「もし、皆さん、少々お待ち下さいまし、どういうわけか存じ  
ませぬが、わたくしは通りかかった盲目めくらの者でございます」

お喋り坊主しゃべの弁信は、どうしても持つて生れたお節介せっかいをやめ  
ることはできないものと見えます。そこで九曜巴の提灯を振り  
かざして、大勢の中へ飛び込んだものです。

けれども、それは受入れらるべくもありません。この制裁は、  
単純なる意味の喧嘩や口論とは違って、これは土地の風儀で、  
重おもなる人が先に立ってやらないまでも、その為すことを黙許し  
なければならぬ制裁ですから、立って見ている者のうちにも、  
必ずやかわいそうだと思ふ人も、一人や二人ではあるまいけれ

ど、それを、どうとも口出しのできない性質たちのものでした。たとえ、役人たちが通りかかっても、それと聞いては、見て見ぬふりをするよりほかはない種類の制裁に属するものでありました。

言うまでもなく不義をした男女です。男には女房があるかないか知れないが、女には確かに夫のある身です。その道ならぬ恋を重ねて露あらわれた時に加えられる制裁は、時によりところによつては、非常な惨酷な私刑となつて現われて来ることがあります。二人は、その哀れむべき、憎むべき犠牲であつてみれば、この場合に弁信風情ふせいが取付いたとて、詮方せんかたのないものであります。

「いけません、いけません、お前さん、こんなところへ来るものではありません」

温おと和なしい年寄株の者が、弁信を抑えました。

「ですけれども、かわいそうでございます、大勢して二人の者をお苛いじめなさるのはいかがいそうでございますから、なんとかして上げたいものでございます、当人があの通り、わたしどもが悪いから殺して下さいと、あやまつているではございませんか、あやまつている者を殺したつて仕方がないではございませんか」  
弁信は提灯を振りかざしながら、しきりにその人に縋すがりついで、もがきました。

「お前さんにはわからない、ああしてやらなければ、みんなのためにならないのです、だから誰もお詫わびをしてやろうというものものは一人もないのだ、それでいいのだから、引込んでおいでなさい」

そう言つて温厚なのは離れて弁信をなだめているが、血気な

のは男女を取つて押えて、その見せしめのためというはずか  
しめを与えんとしてはいますが、盲目である弁信には、その振舞がわ  
かりません。しかしながら、暗い中の一方には焚火がしてあつ  
て、その明りで見ると、光景は狼藉ろうぜきにして酸鼻を極めたものと  
言うべきです。

男女二人をこの原まで誘おびき出して来て、泣いて拒こぼむのをむり  
やりに、一糸もつけぬ素裸すはだかに剥むいてしまつたものか、これから  
剥むこうとするものかして、揉み合つているところです。遠く囲  
んでいる見物の者は、息を凝こらしてその体ていをながめて一語を出  
す者もありません。

この上に、血氣の連中が、男女二人の肉体に向つて、有らん  
限りの侮辱を加えようとするものらしい。すでに加えているの  
かも知れない。男には堪えられる侮辱も、女には堪えられない。

むしろ殺された方が遙かにまさる辱めはずかしのために、女が身を悶えもたて泣いているのが、弁信にもよくわかります。

ともかくも殺すことは憚りはばかがあるから、彼等の制裁はそこまでは行くまいが、当人たちは、そうされるよりは、殺されることを心から訴えて号泣しています。

見物みぶつしている者の中には女性もありました。見ていられない面かおを蔽おほうて逃げ出す者もありました。しかしながら、そのために、たとえ一言でもとりなしを言おうとする者はありません。惨さんとして一語もなく、そのなりゆきを氣遣つて泣くものさえありません。泣いて同情を現わすことが自分の弱味になることを怖れたのでしよう。

「あたいのお母ちゃんが殺されるよう」

誰も彼も惨として一語なきところに、咽喉のども裂けるばかりに

号泣してこの場へ駆けつけて来たのは、まだいたいけな子供です。

憐れむべきはその子供です。多くの人が鳴りをひそめて見物しているうちに、その子供だけが母なる人の命を助けられんとして、号泣して飛び廻るけれど、誰あつて、この子供の訴えを聞いてやるものはありません。誰に取付いても、みんな突き放してしまいます。突き放さないものは、なんと云つて慰めてやつていいか、その言葉に苦しんで横を向いてしまいます。

「母ちゃんを殺しちやいやよう」

七歳か八歳になるほどの女の子です。ついに竜之助の袂に縋すがりつきました。

「小父おじさん、母ちゃんを助けて上げて下さい、刀を差している人は、弱い者を助けて上げてでもいいでしょう、ね、小父さん」

女の子は竜之助の刀にとりついて、わあわあと泣きます。どこへ行っても突き放された子供は、もはや、その人をたよることなしに、手に触った腰の物を頼むものらしい。

「あれはお前の母親か」

竜之助はこう言つて尋ねました。

「小父さん、あれは、あたしの母ちゃんです、みんなの人があはして苛め<sup>いじ</sup>ます、あたしは、母ちゃんが何を悪いことをしたか知らないけれど、みんなして、ああして酷<sup>ひど</sup>い目に逢わせるんですもの、誰も、母ちゃんを助けてくれる人は一人もありません」  
女の子が必死に縋りつくのを、竜之助も御多分に洩れず、冷やかに突き放しました。

「お前のお父さんを連れて来て助けてもらえ」  
女の子は頭を振りました。

「お父さんは駄目です、お父さんは助けに来てくれません、お父さんが助けてくれないだけならいいけれど、そのお父さんが先に立つて、ああして母ちゃんを苛いじめているのですもの」

「エエ、お前のお父さんが先に立つて？」

「ええ、お父さんだつて、そんなに母ちゃんが憎いのじゃないでしょうけれど、ああして、先に立つて、母ちゃんのお仕置しおきをしなけりやならないんですつて。だから誰だつて、母ちゃんを助けてくれる人はありません。小父さん、どうぞ、頼みます、もう母ちゃんに悪いことをさせませんから、今日は、これで許して上げてくださいますし、どうぞ、頼みます、小父さん」

こう言つて女の子が、杖とも柱とも竜之助一人に縋すがりつく時に、一方盲法師の弁信は、いよいよ群集の中へ深入りしてしまいました。

「皆さん、人の罪を責めるのは結構なことでございますけれども、それよりも結構なのは、人の罪をゆるして上げることでございます、責められて恨む者はございまして、ゆるされて有難いと思わぬものはございませぬ、どなたも人間でございませぬ、あやまちの無いという限りはございませぬ、人のあやまちは七度ななたびゆるして上げてくださいますし、ゆるし難いあやまちでも、許して上げるのが功德くどくでございます、悪木あくぼくの梢にも情けの露は宿ると申しまして、許し難いものを許して上げるほど功德が大きいです、どうか、皆様、ここで神様のお心になつて下さいまし、仏様のお心になつて下さいまし」

こちらから見ていると、弁信の差し上げている提灯ちようちんだけが人波たみに揉まれて左右に揺れます。ちょうど担かつぎ上げられた樽御輿たるみこしが、担がれたまま自由になつて、真闇まつくらな人波のう

ごめく中で提灯のみが宙に浮いているようです。

その時に、群集の焦点から、また一つの騒ぎが起りました。それと共に、大波の崩れたように人だかりが四方へ溢れ出ししました。

「御亭主殿が氣狂きちがいになった、御亭主殿が氣狂きちがいになって脇差を抜いて荒れ出あばした、だれかれの見さかいなく人を斬りはじめた、危ない、逃げろ！」

原つばに集まった幾百の人波が、真暗な中を右往左往に逃げ惑います。

なるほど、その通りでしょう。群集の逃げ惑う真中に、髪はおおわらわ大童おおわらわになつて、片肌を脱いだ男が一人、一尺八寸ほどの脇差を振りかざして、当るを幸いにきつて廻つているところは、佐野次郎左衛門の荒れ出したような有様です。

思うに、この男は、不義をした女の御亭主なのでしよう。あまりのことに逆上して、かつと気が狂うてこのていたらくと見えます。

驚いて押えようとした者は、みんな斬られたようです。逃げて迷うて転んだ者も、浅かれ深かれ一太刀ずつは浴びせられているようです。これによつて見ると、相応に手は利きいているのかも知れません。手の利いていないまでも、氣狂いになるほどの逆上に刃物を持たせたのだから、無人の境を行くが如くに群集の中を荒れ狂う勢いは、手がつけられないものらしい。

ただ九曜巴くようともえの提灯だけが一つ、相変らず宙に浮いて、右へ揺れたり左へ揺れたりしているところを見れば、弁信だけはまだ斬られてはいない様子です。生きている間は、持つて生れたお喋りが止みそうにも思われません。

「そうれごらんなきい、何か大變が出来ましたでしょう、いくら罪ある者にしましたところで、それを責めることが、あんまりキツいと、きつと咎とががあります、許して上げれば、その徳が、いつかはこつちへ向つてかえりますけれど、あんまりキツいことをなさると、恨みがみんなこちらへかかるものでございます。何か大變が出来ましたようですね、何でございます、エ、本当の御亭主さんが氣狂いになりましたんですって？　そうでございましょう、そういうことにならなければよいにと思いました。敵も味方も見さかなくなりつけておいでなさるんですって？　それそれ、そういうことになってしまふのでございます、悲しいことですね、なんでも最初に許しておしまいなれば、そんなことにはならないのでございしましたのに、許して上げないから、こんな悲しいことが出来ました」

弁信は逃げ惑う人に押し返されながら提灯を振り立てて、こんなことを言いましたけれども、誰とて耳に入れるものはありません。またなるほどと感心して、それを聞いているような場合でもありません。

兇刃を振りかざした気狂いは、もうその背後まで迫って怒号しています。

「おれの女房は美しい女だ、美しい女だから、おれも好きで女房に貰ったんだ、おれが好きで貰った女房を誰がなんと言うんだ、おれが美しい女と見るくらいのは、ほかの男が見たって美しい女だ、だから、どうしたと言うんだ、おれが惚れるくらいの女に、ほかの男が惚れるのはあたりまえだ、それがどうしたと言うんだ、わからねえ奴等じゃねえか、それほど女房が大事なら、箱へ入れて蔵しまっておくがいいや、箱へ入れたって虫がつくとい

うことがあるじゃねえか、自分の女房に虫が附いたからつて、土用干しもできねえじゃねえか、奴等あ、みんな嫉そねんでさういうことをするんだな、おれが美しい女房を持っているものだから、それをけなれがつて、寄つてたかつて、あんまりひでえことをしやがら、だから承知ができねえ、さあ、矢でも鉄砲でも持つて来い、これからはおれが相手だ、おれの女房に指一本だつて差させるものか、さあ来い」

自分も血まみれになつて、血に染まつた白刃を振りかざして、前後の辻褄つじつまの合わない啖呵たんかを切つて、息せきながら弁信うしろの背後まで迫つて来ました。盲法師の提灯が危ない。提灯を斬られた切先でその頭が危ない。頭を斬られれば命が危ない。さすがの弁信ろうばいも狼狽ろうばいして逃げ惑まよいました。

いま打ち下ろした刃やいばは、弁信の持つていた九曜巴の提灯をパツ

と斬り落したらしい。弁信はアツと言つて倒れたから、それで第二の刃をのがれることができました。

あとは、真暗闇まつくらやみの広つぱを、その狂人が躍り上り、躍り上つて狂い走ります。

その時に、狂人の刃の下に取とり縫すがつたものがあります。それは八歳になる女の子でありました。

「お父さん、危ない」

竜之助の耳には、ただその騒がしい物音を聞くのみです。

涯かぎりも知れぬ広い原に、野火が燃え出して、右往左往に人が逃げ走る光景を想像するだけであります。

疾風あおに煽あおられた野火のような勢いで、触れるものをめらめらと舐なめて行く一個の狂人を想い浮べるのみであります。

その狂人が、こうも突発的に狂い出した原因は、ほぼわかり

ました。その狂人のいかなる種類の男に属するかということ、想像があるのみです。

その時に現われた狂人の面影は、大和の国の三輪の藍玉屋のおもかげ俵せがれの金蔵というもののそれにそっくりです。その俵は三輪大明神の社家、植田丹後守の屋敷に預けられていたお豊に命がけて懸想した男であります。その執念深い恋が、ついには物になつて、お豊をつれて紀伊の国の竜神へ行って温泉宿の亭主となつたその男であります。その宿から火が出て竜神の村を焼いた時に、竜之助はその男を、なんの苦もなく日高川の水上へ斬つて落しました。その後、お豊の話によると、金蔵は嫉妬ゆえに狂い出したものだそうです。お豊と、ある前髪の若いさむらいとの間を疑つて、それから狂い出したということであります。取るに足らぬ男ではあつたけれども、その執念の深いことは怖る

べきものでした。垣根を忍び越えようとして竜之助のために泥田へ投げ込まれた恨みも、植田丹後守が自分を遠ざけるがために、お豊をかくまったことも、ことごとく、彼にとつては恨みの種でありました。ついには鉄砲を持ち出して、お豊以外の邪魔物をすべて撃ち殺そうとして失敗しくじつた程の執念であります。弾薬を明神の杉の木の根に埋めて、これを植田丹後守に見つかつて、それがために処におられなくなつたけれども、恋を捨てることができせん。いろいろに浮身うきみをやつして、ついにお豊の心を靡なびかせてしまいました。心は靡かないにしても、女をわが物とすることができました。その時のことを、竜之助はよく見て知っていたものです。知つてそのままに、十津川の旗上げに加わりました。

今や、その男の執念がここにめぐつて来たものと見えます。

竜之助の眼にうつるのは、髪をふり乱した藍玉屋の金蔵であります。斬られつ追われつしているのは、かつて三輪の社頭で見たその時のすべての人々であります。藍玉屋の親爺もあれば、薬屋の夫婦のものもあります。植田丹後守に召使われた男や女たち、それに、はじめて三輪へたどりついた時に、将棋をさして無駄口を叩いていたすべての面が、いずれも面の色を変えて逃げ惑うている光景がありありと現われます。

阿修羅のように荒れ出した金蔵が、血刀を振りかざして、遙かあなたの彼方の野原から此方こちらをのぞんで走って来る光景がありありと見えます。

「お父さん、助けて下さい——」

女の子の声よこびんが、金かねをきるように竜之助のみみもとに響く途端に、竜之助の横鬢よこびんを掠かすめてヒヤリと落ちて来た狂人の刀。小癩こしやく

とも言わずに右手を伸べた竜之助は、狂人の脇差の柄つかを握つて、邪慳じゃけんにそれをひったくると、高く振り上げて、水を搔くように無雑作に振り下ろすと、左の肩から垂直に胸の下まで斬り下げました。日高川の上で金蔵を斬つて捨てたのが、やつぱりこの手でした。

「あつ！」

狂人は二言ともなくそこへのめつてしまいました。

四方あたりの原は、大風の吹き荒した後のように静かなものです。

燃えさかっていた野火も消えてしまい、それを消そうと騒ぎ廻った人も在らず、寥々りようりようたる広野の淋しさを感じた時に、ふと気がつきました。

斬つたのは金蔵ではないが、その女は、もしやお豊とは言わないか。

辱められたる不貞の女の憎み、憎む女の肉を食い、骨を削りたくなるのは、彼の膏肓こうこうに入れる病根であるかも知れない。竜之助は、金蔵を斬つたこの刃で、その女を併せて殺したくなりました。彼の右の手には、悪血あくちがむず、痒いがゆほどに湧き上つて来る。よし、その女が生きていようとも、すでに殺されていようとも、あくまでこの刃をその女の豊満した肉に突き立てて、その血を啜すらなければ飽かぬ思いが、ぞくぞくと全身にこみ上げて来ました。

竜之助が、男から奪い取つたその脇差を離さないのはこの故です。この広野原のいずれかを尋ねたならば、かならずその女の肉体がころがっているに相違ない。求めてその肉を食くらわなければ、渾身こんしんに漲みなぎる悪血をどうすることもできない。

それにしても、盲法師の弁信はどうしたろう。提灯が消えて

しまつたからとて、無事でいるならば、あのお喋り好きが何か文句を言い出さない限りはないのに、それが一言も言わないのは、かわいそうに、これも狂人の刃にかかつて敢なき最期を遂げたのか。原をうずめていた無数の人だからはどうしたものだ。狂人の勢いに怖れをなして一旦は逃げ散つても、また盛り返して取押えに来なければならぬはずであるのに、四辺あたりに人の近づく気配はない。

森閑として物淋しさが身に沁しみみると、夢ではないかと思ひます。夢でなければ狐につままれたものでしょう。巢鴨の庚申塚あたりには悪い狐が出没する。この場の座興に同勢を狩り催して、二人の盲人をからかつてみたものかも知れない。

その時、遠音とおねに聞えたのは鶏の鳴く音です。その鶏は宵鳴き

をしたものやら、時を告げたものやら、いつこう要領を得ない鳴き音でありました。

続いてビョウビョウと犬の吠えるのが、まだ宵の口であるか、ただしは深夜の物音に驚かされたのか、それもハッキリとわかりません。

曾かつて、十津川の奥から竜神村へ逃げ込んだ時に、頻しきりに犬が吠えました。竜神八処の犬が、悉ことごとく天に向つて吠えるのを聞いた時には、さすがにもものすごいと思いました。いま吠えている犬は、まさしくその時の犬であります。机竜之助は、再び紀伊の国の竜神村の人となつたのであろう。

空をながめることができたら、その天には清姫の帯が流れていたかも知れない。天に清姫の帯が流れる時、地にそれをながめた人に祟たりがある、ということをお豊の口から聞きま

した。

恍惚こうこつとして立っている竜之助の周囲は、どうしても紀伊の国、竜神村の山の奥であります。

金蔵は斬つて落したけれども、その相手のお豊はどこにいる。

「もし、あなた、罪のない人を殺してはいけません、わたしを殺して下さいまし、わたしが悪いのですから、わたしだけを殺して、ほかの人を助けて下さいまし、わたしはお前さんに殺されれば本望すがでございます」

そこへ縋すがりついたのはお豊ではありません、名も知らぬ女です。声にも聞覚えのない女であります。

女もまた、縋りついて、その人が動かない人でありましたから驚きました。

「あ、違いました」

離れようとしたが離れられません。動かない人の手が、早くも蛇のようにからみついております。

「あなた様は、どなたでございます、あの人はどちらへ参りました、どうぞ、お放し下さいまし、わたくしは、あの人に殺されなければならぬ女でございます、どうぞ、お放し下さい」  
もがいたけれども、離れることはできません。

あちらの原っぱの方角で弁信法師が、お喋りをはじめたのはこの時分でありました。

「大変なことになってしまいました、一時、いつときわたくしも気が遠くなつてしまいました。おや、提灯の火も消えていますね。それでも、御安心下さいまし、わたくしの身体は無事でございませぬ、倒れた拍子に頭を打つたものですから、ほんの一時、気が

遠くなつただけのことです。もう、なんともございませんから御安心下さいまし。それにしても、あの発狂者きちがいはどうなされた、ほんとうにお気の毒なのはあの方でございしますが、これも前世の宿業しゆくごうの致すところでございしましょう、お諦めあきら下さいます。怪我をしたくもないし、おさせ申したくもないものでございます。女の方は、どうなさいました、逃げておしまいなさいましたかな、それとも真先に斬られておしまいなさいましたかな。それにつけても女というものは、罪の深いものでございしますな、女一人ゆえに、どのくらい多くの人に間違いが出来るか知れたものではございません。でございしますからお釈迦様も、女は怖ろしいものじゃと仰せられました、また女は救われないものじゃと仰せられました」

こう言つて、ようやく起き上つて来ました。転んでもただは

起きないで、喋りながら起きて来ました。序ついでに、地に落ちて消えた提灯を手さぐりにして拾って起き上りました。

「おやおや、それにしても、あんまり静かでございますね、お怪我をなすった方もずいぶんおありなさるはずなのに、この近所には、どなたもおいでになりません、皆さん歩いてお帰りになつたのですか、たつた今、あれほどの騒ぎがありましたところにしては、あんまり静か過ぎますようでございます。まさか、夢ではございますまいね、夢であろうはずはございません。それならば、もしや、あの、狐につままれたと申すものではございませんまいか。おお、それそれ、わたくしにはお連れがありません。した、わたくしはそのことを忘れておりました、お連れの先生は、どうなさいましたでしょう、あの先生のことだから、お怪我をなさるようなことはございますまいが、わたくしのことを

御心配になつておいでになるかも知れません、大きな声でお呼び申してみましようかしら。それともまた、ここで大きな声を出して悪いようなことはございませんか知ら

弁信は塵打ちり払いながら例によつて、暫く小首を傾かしげていると、その鋭敏な耳に女の声が聞える。

「どうぞここをおはなし下さいまし、人違いで失礼を致しました……苦しうございます」

それを聞くと、弁信は声のした方へ頭をクルリと振向けました。

「どうぞおはなし下さいまし、わたしは苦しうございます……」  
女は何者にか捉われの手を逃れようとして苦しみ呻うめいている。  
半ば蛇に吞まれて、半身だけが地上にのたうち廻つて苦しむよ  
うな、熱苦しい、どろどろした呻うめきの声であります。

それを篤とくと聞き定めた弁信は、消えた提灯を片手に、飛鳥の如く走り出しました。不思議となにもものにも躓つまずくことなく、声のしたところへ一足飛びに走つて来て、

「もし、先生、そこにおいでになりましたか。女のお方も、そこにおいでなさいますね。なんにしても、お怪我が無くてよろしうございました。けれども、あの足音をお聞きなさい、あの人の声をお聞きなさい、大勢の人がまた尋ねに参ります、今度つれて行かれたら、もう助かりませぬ、早くお逃げなさい。先生、わたくしのことは御心配にはなりません、あなた様は早く、その女のお方を連れてお逃げ下さいまし、先生がお逃げにならなければ危のうございます、早くこの場をお逃げ下さいまし。あの通り人の足音と声とが近寄つて参りました、お聞きなさいまし」

## 十六

弁信から逃げろと言われたことが、竜之助にとつて思い設けぬ暗示となりました。女もまた、そう言われて、一にも二にもこの人を頼る気になつたらしい。

頼つてみるとその人は、意外にも盲目めくらの人でありました。強いと思つた人は、人並より弱味を備えた人であつたことを知つた時に、女はその恐怖から解放された心持になりました。この人は怖るべき人ではなく、憐れむべき人である。

女の心が男に向う時、その男が己おのれを托するに足りるほどに強い男であることを知つた時には、信頼となり、或いは恋愛に変ずることもあります。それと違つて、男が弱くして、自分が

それを世話をしてやるという立場に立つた時は、女はまたその女らしい自負心が芽を出して、男を愛慕する心も起るものでもあります。

この不思議な遭逢そうほうの二人の男女は、どちらが頼り、どちらが頼られるとも知らずに、その場をおちのびました。けれども、道案内はまさしく女のしたこと、竜之助は万事をその女の導くままに任せたのでしよう。かくて、板橋の宿の、とある旅籠屋はたごやにたどりついて、そこで一夜の泊りを求めることとなりました。多少の疲労とそれから、このごろとしては久しぶりで人を斬つた竜之助は、女がまだ起きているうちに、すやすやと夢に入つてしまいました。

いつしか、自分は、振りわけの荷物を揺りかたげて、東海道

を上つて行つた時の旅の姿になつてゐる。ところは鈴鹿峠の下あたりで、その前を一挺の早駕籠が威勢よく駈けて通る。

なんにしても、おびただ夥しい急ぎ方だと思ひました。

「その駕籠はどこへ行くのだ」

尋ねてみたけれど、駕籠屋は振返つても見ません。

しかしながら、どうも見たような駕籠である。竜之助は駕籠に引添うて走りはじめました。まもなく駕籠は或る家の軒下へ立ちました。そこは、ちよつとした宿場外れの、はず木賃宿とも思われるほどの宿屋の軒下であります。

これも見たことのあるような行燈があんどんかかつてゐる。筆太に「若葉屋」と記して、側面には二行に「千客万来」と認したためてあるのを明らかに読むことができるのであります。

駕籠は、その掛行燈の下に据すえつけられると共に、駕籠屋共

は、いずれへ行つてしまつたか、影も形も見えませぬ。

竜之助はぜひなく、その宿屋の雨戸をハタハタと叩きました。行燈は、まだまばゆいほどに点けておくのに、雨戸は、もう一寸の隙間もなく締めきつて、叩いてみても、返事ありません。

「お連れさんは？」

当惑して立ちつくしていることや暫く、すると中から声がありました。

「連れは女だ」

と竜之助は答えました。

「どうぞ、お通り下さいませ、お待ち申しておりました」

雨戸の枢くくるを外すのも、やはり女の声でありました。

そこで、やれ一安心という気になつて、戸の前に置き据えられた駕籠を振返つて見ると、そこにはありません。

「オホホ、もう先廻りをしてここにお待ち申しております」  
戸をあけて微笑ほほえんでいる女の面おもてが、見覚えのある面かおでありま  
す。

「おお、お前はいつのまに——」

さすがの竜之助も、あっけに取られて、その女の面をながめ  
ました。まさしく見覚えのある女には違いないけれども、さて、  
誰を誰と言つていいかわかりません。

「ずいぶん長いことお待ち致しました、もうおいでになるだろ  
う、なるだろうと思ひまして、こうしてお仕事をしてお待ち申  
してましたけれど、いくらお待ち申してもおいでがありません  
んから、戸を締めました、それでももしやと気にかかるもので  
ございますから、ああして行燈だけは、夜明し点つけておくこと  
に致しました」

何者とも見当のつかない女は、こう言いながら、懐し<sup>なつか</sup>そうに竜之助の手を取つて、広い座敷へ案内しました。

その座敷はかなり広いけれども、なんとなく陰気な感じのするほどに古びた座敷でありました。その中行燈が一つ、座敷の広いのには、あまりに光が暗いと思ひました。光が暗いから、それで、部屋がいつそう陰気に見えるのではないかと思われます。

案内されるままにこの座敷へ通つたけれども、竜之助の心は解けているわけではありません。

戸を締め切つて、行燈だけを点け放しておいたこと理由は、ただいまの女の言葉によつて、よくわかつたけれども、何故にこの女から、こうまでして自分が待たれるのだから、それはわかりません。また何の由あつて、これほどに懐しく、自分をこの

女が、旅の宿で待つていてくれるのだか、それもわかりません。竜之助が、不審に堪えやらぬ面かおをして、座敷に通つていると、女はその暗い行燈の下へ坐つて、そこで仕事をはじめました。なるほど、仕事をしながら、今まで待ち明かしたという心持が、嘘とは思われませんが。

それにしても、自分は旅の身である。ここはいずれの宿しゆくか知れないが、旅籠屋はたごやには違いない。旅籠屋とすれば、この女は宿のおかみさんか、そうでなければ女中であろう。こうして着いた上からは、とりあえず風呂のかげんを見られるか、食事の世話をしてくれるのがあたりまえであろうのに、それらのことは頓着なしに仕事をはじめている。竜之助はそれを慥然ぶぜんとしてながめていたが、

「それは誰の着物だ」

と言つて尋ねてみました。

「誰のといつて、あなたわかつているじゃありませんか」

「拙者にはわからない」

「これ、ごらんなさいまし、郁太郎の着物でございますよ」

「え、郁太郎の？」

愕然<sup>がくぜん</sup>として暗い行燈<sup>あんどん</sup>の下を見ると、女は縫糸の一端を糸切歯

で噛みながら、竜之助の面<sup>おもて</sup>を流し目に見て笑っています。暗い

行燈が、いよいよ暗く、広い座敷が、あんまり広過ぎる。

「おわかりになりましたでしょう」

竜之助は、座右に置いた武蔵太郎の一刀を引寄せました。暗

い行燈の下を、瞬<sup>またた</sup>きもせず見つめました。

明<sup>めい</sup>を失うてから久しいこと、切れの長い眼の底に真珠のよう

な光を沈めて、甲源一刀流の名代<sup>なだい</sup>の、例の音無しに構えて、じつ

と相手を見据えて、毛骨もうこつみな寒い、その眼の色の冴さえを見ることがありませんでした。

「お前は浜だな」

「ええ、左様でございます、あなたとお別れしてから、ずいぶん久しいことになりましたね、今日は、あなたがおいでになるということですから、こうして待つておりました。あなたが恋しいのではございません、郁太郎がかわいそうですからね。だんだん寒くなつてゆくのに、あの子は、綿の入つた着物一つ着られまいかと思うと、それが心配で、眠れません、どうぞ、あなた、これを郁太郎に持つて行つて上げてくださいます。あなたとの間のことなんぞは、どうでもよいではございませんか、恨みを言えばおたがい際限がありませんからね。もう少しお待ち下さいまし、今、わたくしがこれを縫い上げてしましますま

で

「うーん」

「もし、あなた、どうなさいました」

前のは夢の声、これは現実の言葉であります。夢とうつつとの境はよくわかるけれども、女の声には変りがありません。してまた、竜之助の心では、現実の女と、夢の女とを、区別することができません。夢にうなされた自分を呼び起している女の声を、やはり夢で見た同じ女とのみ思うよりほかはありません。

板橋駅の、とある旅籠屋の一室に、夢に見たと同じような行燈の下に縫物をしているのは、どこやらに婀娜あだなところのある女房風の女でありました。けれどもその縫っているのは、郁太郎の着物ではありません。乱れた髪かたちを直してから、自分

の着物の綻びほころを繕つくろっているものらしい。

夢にうなされた人の声に驚いた女の人は、針の手を止めて暗い行燈の光で、うなされている人の面おもてをさしのぞくと、

「まだ起きておられたのか」

夢から醒さめて、かえって現実の人の醒めているのを不思議がるようです。

「はい、まだ起きてお仕事をしておりました」

女の返事は、まことに、しとやかな返事であります。

「こんな夜更けまで、誰の着物を縫ぬっているのだ」

「いいえ、誰の着物でもございませぬ」

と言いなから、女は再び針の手を運ばせて、

「たいそう夢に、うなされておいでのようでした」

「ああ、妙な夢を見た」

「怖い夢でございましたか」

「怖いというほどの夢でもないが、見ている間は夢とうつつがよくわからなかったが、醒めてみると、やっぱり夢の通りだ」  
竜之助の言うことは、まだ夢とうつつの境に彷徨さまようているもののようなのです。

再び夢路に迷い込んだ机竜之助は、またも旅中の人であります。行手を急ぐ一挺の駕籠に附添おのうて、いずこともなく走り行く己おのれを発見しました。

行手を急ぎながらも、心にかかるのは今宵の宿です。昨夕ゆうべは板橋の宿にホッと仮寝の息を休めたけれども、今宵の宿が覚束おぼつかない。どこまで行って、どこへこの女を泊めていいか、それが心にかかる。

まもなく、一つのやや大きな宿駅を通りかかりました。

「ここはどこだ」

たずねてみると、

「八王子の宿しゅくでございます」

返事をするものがあつたから、不思議に思いました。板橋は中仙道の親宿。八王子は、それとは、方面を変えた甲州街道の一駅であります。昨夜、板橋を出ていつのまに八王子へ来てしまつたらうと、訝いぶかしさに堪えられません。しかしながら駕籠はいよいよ急ぎます。暫くして行手に山岳ちやうじやうの重畳ちゆうじやうするのを認めました。

「あれは？」

と尋ねると、

「小仏峠こぼとけとうげでございませす」

果して甲州街道へ来てしまった。しかし、よく考えてみると甲州街道へ来るのがその目的であつたようです。

雲の棚たなび曳ひいている小仏峠の下を見ると、道の両側に宿場の形をなした人家があります。両側の家の前には、水のきれいな小流れが、ちよろちよろと走つています。

「ここは？」

「浅川宿でございます」

と答えた途端に、急いでいた駕籠がピタと止まりました。

駕籠の止まつたところを見ると、この宿場としては目立つて大きな一軒の旅籠屋はたじやの軒下であります。それは昨夜と同じように、表の戸はすっかり締めきつてあるのに、掛行燈だけが、かかんかんと明るく、昨夕「若葉屋」と書いてあつたところに、今宵は「こなや」と仮名文字かなもじで記されてありました。

駕籠かごはと見れば軒下に置放しにされて、駕籠屋は影も形も見えませぬ。

そこで竜之助は、その家の戸をハタハタと叩きました。

「どなたでございます」

中から返事がありました。

「浅川宿のこなやというのは当家か」

竜之助は念を押してたずねると、

「いいえ、宅はこなやではございません、花屋でございます」という二度目の返事です。

そこで竜之助が、はて、と思いました。表の掛行燈にはまさしく「こなや」と書いてあるのに、中の人は「こなや」ではない、「はなや」だという。行燈を見直して、更にたずね直してみなければなりません。

「ここは甲州街道の浅川宿であろうな」

「はい、小仏へ二里、八王子へ二里半の、浅川宿の小名路こなじでございます」

「それならば、行燈に書いてあるこなやが間違いないのだろう」  
「いいえ、こなやではございません、小名路の花屋でございます」  
「す。いったい、どちらからおいでになりました」

「江戸の駒込から来た」

「駒込はどちら様で」

「以前、当家の養女であつたという、お若という人を連れて来た」

「まあ、お若さんがおいでなすつたそうですよ」

家の中が、さざめき渡りました。そこで、はじめて中から戸がガラリとあくど、立っている女は透きとおるほど鮮あざやかな着物

を着ています。

「よく、おいでになりました、さきから、こうして、明りだけは、かんかんと点つけてお待ち申しておりました、あまり遅いものですから、戸だけは締めておきましたが、まだみんな起きてるのでございます、さあ、お通り下さいませ」

案内をしてくれたその女は、また見覚えのある女であります。振返つて見ると、そこに置き据えられた駕籠は、もうありません。

案内された座敷は、昨夜と違つて明るい座敷でありました。朱塗りの雪洞ほんぼりが、いくつも点いて、勾欄こうらんつきの縁側まで見えているが、その広い座敷に誰一人もおりません。家内の者はまだ起きていると言つたにかかわらず、入つて見れば、ひっそりとして人の気配は更にありません。

ここへ案内をしてくれた女の人は、燈籠とうろうの下へ、ぴたりと坐ると、あちらを向いて頻しきりに物を書きはじめました。昨夕の女は、旅の客の疲れも知らず面がおに仕事をしていたが、今宵はまたお客をさしおいて、あちら向きで物を書いているのは、よほどさし迫った用向に違いない。いかに差迫った手紙とは言いながら、お客をそつちのけにして、あんまり無作法だと思いましたが、

「何を書くのか知らないが、手紙は後廻しにしておいたらどうだ」

苦にがにが々しく言い放ったけれども、あちらを向いていた女は向き直ろうともしません。女の書いている巻紙だけが、するすると竜之助の見える方へ流れて来るのです。雨漏りあまもの水が板の間を伝って流れて来るように、紙が眼の前を流れて行くから、いつ

たい、何をそれほど熱心に書いているのだらうと、のぞいて見ると、

花は散りても

春は咲く

鳥は古巢へ帰れども

往きて帰らぬ

死出の旅

と書いてありました。何のつもりで、こんな文句を書き出したのか知ら。その次を読んでみると、やっぱり同じように、

花は散りても

春は咲く

次へ次へと読んで行っても、どこまで読んでも同じ文句です。その手紙がぼーっと白け渡った時分に、あちらを向いていた

女が、こちらを向いて、

「あなた、お眼はいかがでございます」

突然にこう言つて、暗い燈籠の蔭からたずねました。

「相変らずいけないよ」

女があまりなれなれしく言つたから、それで竜之助も碎けた返事をしました。

「まだいけませんのですか、困りましたね、早くお癒なおしなさらなくてはいけません」

「癒るものか」

それは冷罵れいばの語気であります。

「癒らないことはございますまい」

「癒るものか」

いよいよ冷淡にハネ返すと、女は何を思つたか、

「それでは仕方がございません、早くあの峠を越えてしまいましよう、あの峠を越えないと、どうも心配でなりません、こうしていても眠れませんもの」

「あの峠とは？」

女の指差したところを振仰いで見ると、それは前にながめた小仏の峠であります。左右を見ると、路の両側には小流れが流れていて、人家のまばらな甲州街道の一駅に相違ない。例の駕籠がどこから出て来たか、その小仏峠の方を指して一散に飛んで行きます。これもいつのまにか旅仕度をしていた竜之助は、やはりその駕籠かごに引添うて道を急いで行くうちに、橋を渡ると追分になっていました。

駕籠は追分を左へ一散に急ぐのに、竜之助だけが右へそれてしまいました。右へそれては駕籠を見失ってしまうにきまつて

いるけれども、行手に見える小仏の峠へ出るには、どうしても右へ行かなければならないと思われてなりません。左へ行くのは嘘だと思われてなりません。右へたつた一人で急いで行くと、最初のうちは、左の道に、畑や、林や、流れを隔てて駕籠の飛んで行くのがよく見えました。急ぐほどに双方の距離がようやく隔たつて、とうとう見えなくなりました。駕籠が見えなくなつた時分に、峠も見えなくなりました。

ははあ、小仏へ出るには、あちらの道を通るのがよかつたのだな、と気がついたけれども、もう引返す道さえわかりません。あたり四方はいつぱいに雲と霧がとりまいて、自分は今、かなりの深山幽谷にさまよつていふことを発見しました。

「どうも仕方がない」

とつひ呟いて草鞋わらじの紐を締め直しました。その時に、つい耳もとで、

どうどうと水の鳴る音が聞えます。草鞋を結び終つて背後を見ると、雲の絶え間に一条の滝がかかっている。さのみ大きな滝とは見えないが、懸崖けんがいを直下に落ちて、見上ぐるばかりに真紅しんくの色をした楓もみじが生い重なつて、その一ひら二ひらが、ちらちらと笠の上に降りかかつて来ました。

「あれが蛇滝でございます」

と言う声で気がつくつと、そこは小名路こなじの宿でもなければ、小仏の峠道でもありません。中仙道の板橋の宿場外はずれの旅籠屋の、ただつぴろい陰気な座敷の間で、眼のさめた時に二番鶏がしきりに鳴いていました。

「まだ寝ないのか」

竜之助が驚かされたのは、暗い行燈の下に夜もすがら、まんじりともしなかつたらしい女は、思い余つて忍び音に泣いてい

るところでありました。

「どうしても眠れませんか」

何だか知らないが、その声が竜之助の心を嚇そそりました。

「生きている間は眠れまい」

と言ったのは、自分ながら謎なぞのような言葉です。

「本当でございます、わたしは、どうして死んだらよいか、それを昨夜も一晩中考えておりました」

「そして考えついたかな」

「やつぱり人に弄なぶり殺しにされてしまいとうございます」

「なるほど」

寝返りを打つと竜之助は、枕許の刀の下緒さげおをずっと引き寄せました。

大菩薩峠 小名路の巻

大菩薩峠 小名路の巻

底本：「大菩薩峠 6」ちくま文庫、筑摩書房

1996（平成 8）年 2 月 22 日第 1 刷発行

底本の親本：「大菩薩峠 四」筑摩書房

1976（昭和 51）年 6 月 20 日初版発行

※「お玉ヶ池」「躑躅《つつじ》ヶ崎《さき》」「小金ヶ原」の「ヶ」を小書きしない扱いは、底本通りにしました。

※本作品中には、身体的・精神的資質、職業、地域、階層、民族などに関する不適切な表現が見られます。しかし、作品の時代背景と価値、加えて、作者の抱えた限界を読者自身が認識することの意義を考慮し、底本のままとしました。（青空文庫）

入力：（株）モモ

校正：原田頌子

2002 年 10 月 13 日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。